

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第362集

中居俵Ⅱ遺跡発掘調査報告書

二子地区ほ場整備

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

中居俵Ⅱ遺跡発掘調査報告書

二子地区ほ場整備

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、10,700ヶ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実もまた重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県北上地方振興局北上農村整備事務所が整備を進めている二子地区ほ場整備に関連して、平成11年度に実施した中居俵Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。本調査により、平安時代の住居跡や土坑・溝跡・掘立柱建物跡・柱穴状土坑の遺構のほか、縄文時代前期から平安時代の遺物が確認され、貴重な資料を提供することができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました北上地方振興局北上農村整備事務所・北上市教育委員会・北上市埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成12年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は、北上市二子町中居俵地内に所在する、「中居俵Ⅱ遺跡」の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、二子地区ほ場整備に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会と北上地方振興局北上農村整備事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 本遺跡の成果は、平成11年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査第340集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」に公表したが、本書を正式な報告とする。
4. 岩手県遺跡登録台帳における番号と調査時の遺跡略号は、以下の通りである。
遺跡番号 …… ME56-2249
遺跡略号 …… NITⅡ-99
5. 調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。
調査期間 …… 平成11年6月22日～7月28日
調査面積 …… 800㎡
調査担当者 …… 吉田 充 ・ 朝倉 雄大
6. 室内整理期間と整理担当者は以下のとおりである。
室内整理期間 …… 平成12年2月15日～平成12年3月31日
整理担当者 …… 吉田 充
7. 本報告書の執筆は吉田 充が担当した。
8. 分析鑑定及び委託業務は次の方々々に依頼した(敬称略)。
石質鑑定 …… 花崗岩研究会
保存処理 …… (株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センター
9. 国土地理院発行の地図を複製したものは図中に図幅名と縮尺を記した
10. 遺構の埋土観察には、小山・竹原編「新版標準土色帖」を参考にした。
11. 本報告書の実測図の凡例については、Ⅲ、調査方法と室内整理の末尾に掲載した。
12. 本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導とご教示をいただいた(敬称略)。
沼山 源喜治・高橋 文明 他(北上市埋蔵文化財センター)
13. 野外調査にあたっては、北上市の方々にご協力をいただいた。
14. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序

例言

<本文>

I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 位置と環境	2
2. 地形と地質	3
3. 基本層序	5
4. 周辺の遺跡	6
III. 調査方法と室内整理	9
1. 野外調査	9
2. 室内整理	9
IV. 検出された遺構と遺物	12
1. 竪穴住居跡	12
2. 竪穴状遺構	27
3. 土坑	29
4. 溝跡	29
5. 掘立柱建物跡	32
6. 柱穴群	32
V. 遺構外出土遺物	36
1. 縄文土器	36
2. 平安時代の土器	36
3. 石器	36
VI. 考察	39
VII. まとめ	44

参考文献

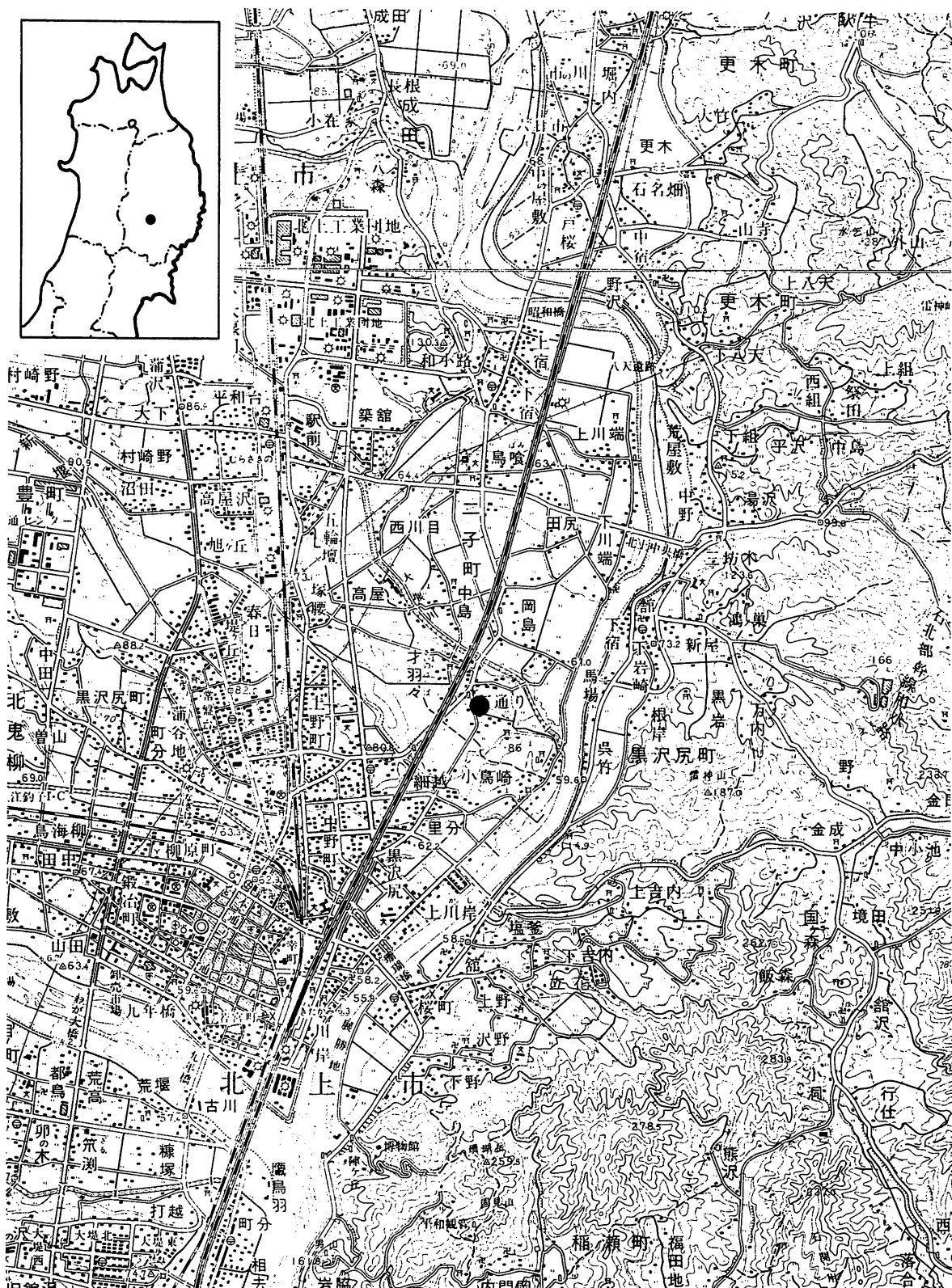
<図版>

第1図 遺跡位置図	1
第2図 地形区分図	4
第3図 模式土層図	5
第4図 土層断面図	5
第5図 模式柱状図	5
第6図 周辺の遺跡位置図	7
第7図 遺構配置図	11
第8図 第1・3号竪穴住居跡	13
第9図 第1・3号竪穴住居跡出土遺物(1)	14
第10図 第1・3号竪穴住居跡出土遺物(2)	15

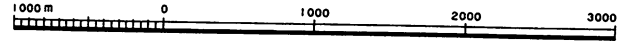
第11図	第2号竖穴住居跡	17
第12図	第2号竖穴住居跡遺物出土状況	18
第13図	第2号竖穴住居跡出土遺物 (1)	19
第14図	第2号竖穴住居跡出土遺物 (2)	20
第15図	第2号竖穴住居跡出土遺物 (3)	21
第16図	第2号竖穴住居跡出土遺物 (4)	22
第17図	第4号竖穴住居跡・出土遺物(1)	24
第18図	第4号竖穴住居跡出土遺物(2)・第5号竖穴住居跡	25
第19図	第5号竖穴住居跡出土遺物	26
第20図	第6号竖穴住居跡・出土遺物	28
第21図	第1号竖穴状遺構・第1号土坑・出土遺物	30
第22図	第1・2号溝跡・出土遺物	31
第23図	第1号掘立柱建物跡	33
第24図	柱穴群・出土遺物	34
第25図	遺構外出土遺物 (1)	37
第26図	遺構外出土遺物 (2)	38
第27図	住居面積	39

<写真図版>

写真図版 1	調査区全景	47
写真図版 2	土層断面	48
写真図版 3	第1・3号竖穴住居跡 (1)	49
写真図版 4	第1・3号竖穴住居跡 (2)、第4号竖穴住居跡	50
写真図版 5	第2号竖穴住居跡	51
写真図版 6	第5号竖穴住居跡	52
写真図版 7	第6号竖穴住居跡	53
写真図版 8	第1号竖穴状遺構・第1号土坑	54
写真図版 9	第1号溝跡	55
写真図版 10	第2号溝跡・柱穴群	56
写真図版 11	第1号掘立柱建物跡・柱穴群	57
写真図版 12	第1・3号竖穴住居跡出土遺物	58
写真図版 13	第2号竖穴住居跡出土遺物 (1)	59
写真図版 14	第2号竖穴住居跡出土遺物 (2)	60
写真図版 15	第2号竖穴住居跡出土遺物 (3)	61
写真図版 16	第4・5・6号竖穴住居跡出土遺物	62
写真図版 17	その他遺構遺物・遺構外出土遺物 (土器)	63
写真図版 18	遺構外出土遺物 (石器)	64



1:50,000 北上・花巻



第1図 遺跡位置図

I. 調査にいたる経過

本遺跡は「ほ場整備事業二子地区」の施行に伴って、遺跡が事業区域内に位置することから発掘調査をすることになったものである。

「ほ場整備事業二子地区」は北上市の北東部に位置し、北上川の西部に広がる水田地帯で、昭和27～33年に区画整理事業で10区画に整備された区域である。地区の現状は区画形状が小さい上、農道の幅員も狭く、小用水路は土水路で漏水し、小排水路は用排兼用で浅く、排水不良により湿田化し、営農の機械化、耕地の汎用化、更には農地の流動化、生活環境の向上など高生産性農業を阻害している。これらの阻害要因を解消し、土地利用型農業の生産性の向上を図る為に農地を集団化し、近代化農業の中心となりうる担い手が農業生産を効率的かつ安定的に担い、新時代農業構造の確立に資するとともに生産基盤の整備と生活環境の一体整備により地域発展に資するものである。平成8年度に新規採択された地区で、平成10年度以降本格的な区画整理事業を行っている。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の扱いについては、花巻土地改良事業所へ平成9年12月24日付け教文第814号「担い手育成基盤整備事業実施計画における埋蔵文化財の分布調査について（回答）」に於いて、花巻土地改良事業所へ回答し、その際今後の進め方は文化課と協議していくという調査結果が付記された。回答を受けた北上地方振興局北上農村整備事務所では、本遺跡を含む面工事を平成10年10月9日より工事着手を予定し、平成10年10月14日付け北農整94号「ほ場整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書により岩手県教育委員会に対して試掘を依頼し、依頼を受けた岩手県教育委員会では平成10年12月3日～4日に試掘調査を実施したが、その結果は平成10年12月8日付け教文第981号「ほ場整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」に於いて、北上地方振興局北上農村整備事務所に回答し、その際本遺跡の発掘調査を必要とすることが付記されたものである。

II. 遺跡の立地と環境

1. 位置と環境

中居俵Ⅱ遺跡は岩手県北上市にあり、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の北東約3kmに位置する。国土地理院発行5万分の1地形図「北上」NJ-54-14-13（一関13号）の図幅に含まれ、北緯39度18分30秒、東経141度8分30秒付近にあたる。所在地番は、北上市二子町中居俵地内である。

北上市は岩手県南部にあり、県庁所在地である盛岡市の南方約64kmに位置する。北上市は平成3年4月に旧北上市、和賀町、江釣子村の3市町村が合併し、新しい北上市に生まれ変わった。面積は約440km²、人口は約9万349人となった（平成11年3月）。

地理的条件に恵まれ、古くから交通の要衝にあった。南北に流れる北上川船運の南部藩最南端の商港として、後に西和賀の鉱産物集配地として栄えた。今日では従来の交通網に加え、平成9年7月に東北横断自動車道秋田線の北上西一湯田間の完成に伴い全線開通、平成8年秋には北上南部工業団地そばに本県初の開発型インターである東北自動車道北上・金ヶ崎インターが開業し、北東北の十字路として位置付けられている。平成11年5月には内陸税関基地設置を目指して、流通センター内で保税蔵置場と通関営業所の営業を開始した。さらにはかつての商業活動の中心が空洞化し郊外に拡散するのを防ぐため、都市再開発整備をすすめます中核都市としての機能を充実させている。

2. 地形と地質

a. 地形

本遺跡は北上川右岸に位置し、高位の段丘を挟み取るように蛇行した跡を残す段丘面上にある。北上低地帯全域にわたる地形区分は中川ほか（1963a、b）がはじめて火山灰編年法により行っている。本報告では金原（1981MS）により区分された段丘区分に基づき行う。金原は北上市から金ヶ崎町に至る低地内に分布する段丘を高位より一首坂段丘、西根段丘、村崎野段丘、煤孫段丘、江釣子段丘、河岸低地の6面に区分した。金原の区分によると本遺跡がのる面は火山灰をのせない低位段丘の江釣子段丘に区分されているが、現地踏査や空中写真の判読により江釣子面段丘とは段差をなし、高位の村崎野段丘を取り巻くように分布していることが判明し、より高位の煤孫段丘に対比した。なお、遺構を構築している地山の黄褐色粘土層は降下細粒火山灰状を呈し、黒沢尻火山灰上部層の可能性はある。

県南地区には奥羽山脈に位置する焼石岳（標高1548m）や栗駒山（標高1628m）などから供給されたと考えられる更新世の火山灰が分布し、これらの火山灰と段丘との関係が調べられている。金原は、隣接する胆沢扇状地で大上・吉田（1984）が区分した段丘に、表1のように対比している。

	大上・吉田（1984）	金原（1981MS）
	河岸低地	河岸低地
低位段丘	水沢低位段丘 水沢高位段丘	江釣子段丘 煤孫段丘
中位段丘	胆沢段丘 福原段丘 堀切段丘 横道段丘 上野原段丘	村崎野段丘
高位段丘	西根段丘 一首坂段丘 大歩段丘	西根段丘 一首坂段丘

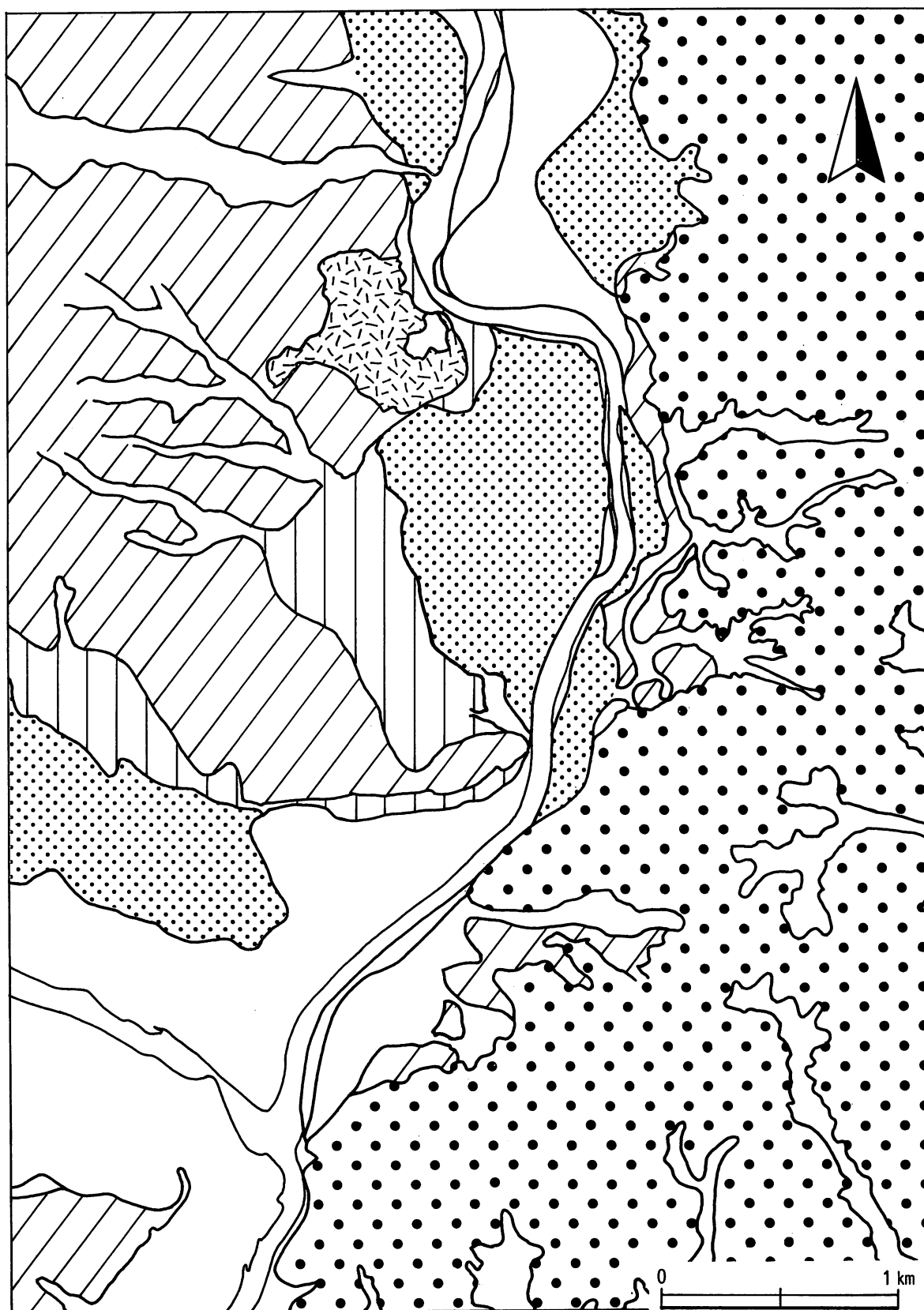
表1 段丘区分

火山灰との関係は、大歩段丘には永栄火山灰以上が、一首坂段丘には一首坂火山灰以上が、西根段丘には前沢火山灰以上が、胆沢段丘には前沢火山灰上部層以上が、水沢高位段丘には火山灰質の水中堆積物がのるとされた。本遺跡がのる段丘面は低位段丘に相当し、前沢火山灰や黒沢尻火山灰の分布域にもかかわらず火山灰はほとんどのらないとされているので、火山灰と段丘との関係は今後の課題としたい。

b. 地質

基盤である南部北上帯上に新第三系・第四系が堆積する。新第三系は北上河谷南部地域で、下位より中新統大荒沢層、大石層、鈴鴨

川層、網取層、菱内層、前塚見山酸性火山岩、鮮新統本畑層が分布する。本畑層は花巻市西方寒沢川から金ヶ崎町西部までの北上河谷西縁部の丘陵地に分布し、砂岩・礫岩・凝灰質シルト岩・凝灰岩・亜炭からなり、やわらかい。第四系は段丘の堆積物である砂礫層とその上位の火山灰（前述）からなる。最近大石ほか（1996）は本畑層の模式地で詳細な層序学的研究を行い、次のように再区分した。下位より上部中新統石羽根層（亜炭・凝灰岩・砂岩・礫岩）、上部中新統～下部鮮新統竜の口層（砂岩・青灰色泥岩・火山豆石凝灰岩・灰色泥岩、軟体動物化石・鯨類化石）、鮮新統本畑層（砂岩泥岩互層・亜炭・砂岩・礫岩・軽石凝灰岩・火山豆石凝灰岩・泥岩、足跡化石）、下部・中部更新統岩崎新田層（灰色泥岩・亜炭・砂岩・礫岩・軽石凝灰岩・火山豆石凝灰岩・角礫岩、足跡化石）、萱刈場層（角礫岩）、百岡層（灰色泥岩・砂岩・凝灰岩、足跡化石）とした。また、北上川左岸には大石層に対比される稻瀬層（両輝石安山岩、同質集塊岩）が分布し、段丘礫層下に基盤として観察されるが、右岸では観察できない。本遺跡調査終了後の土木工事の際に露出した基盤の様子を観察した結果、地山である黄褐色粘土層下に灰色～青灰色泥岩、亜炭、中礫層が堆積していることがわかった。岩相から大石らが区分したいずれかの層に対比されると考えられるが、詳細は不明である。

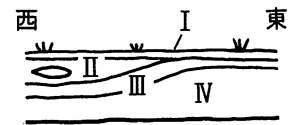


河川低地
 江釣子段丘
 煤孫段丘
 村崎野段丘
 西根段丘
 山地

第2図 地形区分図

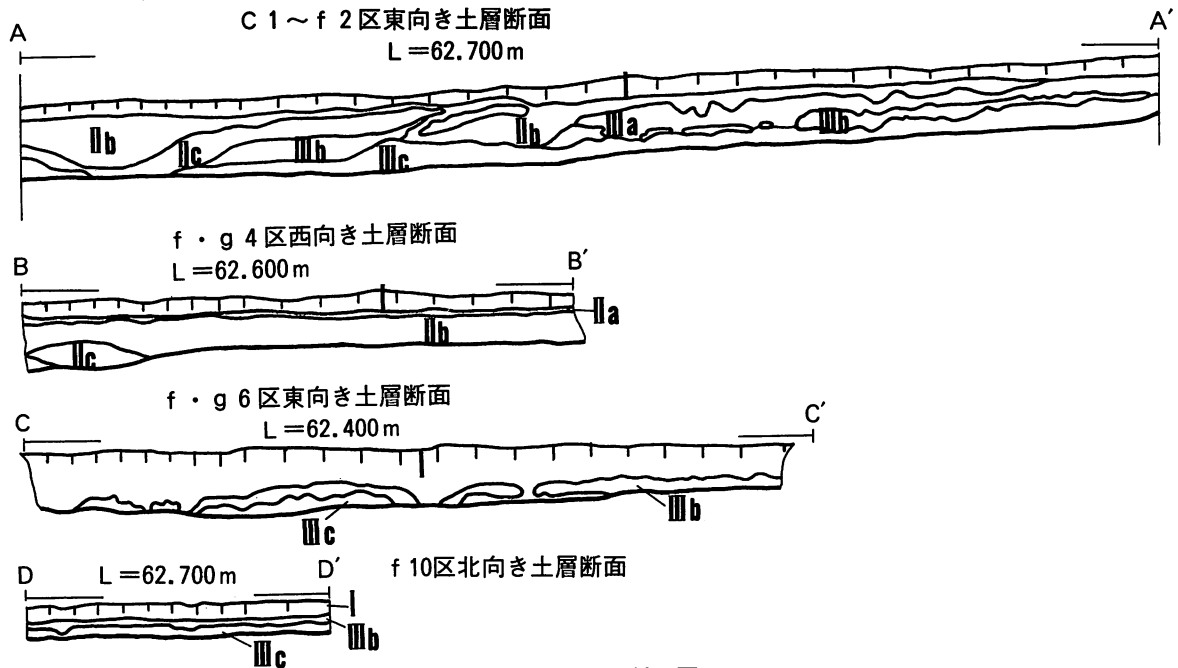
3. 基本層位

本調査区における堆積層は、基本的に地山である更新世の黄褐色細粒火山灰層上における黒褐色～黒色のシルトないし粘土質シルト層からなる。調査終了後の深堀から考えると、調査区西側は更新世の火山灰層が堆積する頃から凹地になっており、農用地として利用され始めた頃に盛土された。地山までの堆積層は調査区中央で数十cmに対して西側では約1mと厚くなっている。およそ上位から耕作土、盛土、自然堆積層、地山（更新世火山灰層）の4層に分けることができる（第3図）。



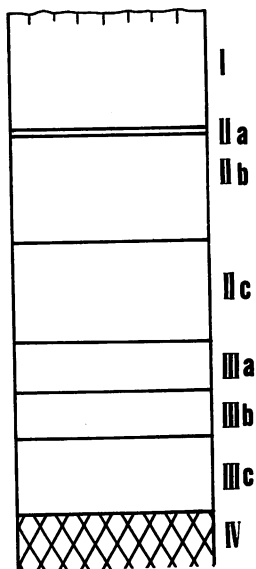
第3図 模式土層図

I層 耕作土 II層 盛土
III層 自然堆積層 IV層 地山



第4図 土層断面図

- 第I層 10YR3/2黒褐色シルト～7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト、厚さ70cm、しまりわるい、盛土の有無で多少層相を異にする、耕作土
- 第IIa層 7.5YR3/1黒褐色粘土質シルトと5/8明褐色粘土(20%)との混合土
- 第IIb層 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト、厚さ65cm、改良に伴う盛土、調査区西側にのみ分布する
- 第IIc層 7.5YR5/6明褐色粘土(70%)に5/2灰褐色粘土、3/2・2/2黒褐色粘土質シルトが塊状に混入、厚さ60cm、改良に伴う盛土、調査区西側にのみ分布する
- 第IIIa層 5YR1.7/1黒色粘土質シルト、厚さ60cm、しまりわるい、遺物を含む、旧表土と見られ、耕作により分布しない場所がある。
- 第IIIb層 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト、厚さ60cm、しまりわるい
- 第IIIc層 5YR1.7/1黒色粘土質シルト
- 第VI層 7.5YR5/6明褐色粘土、地山

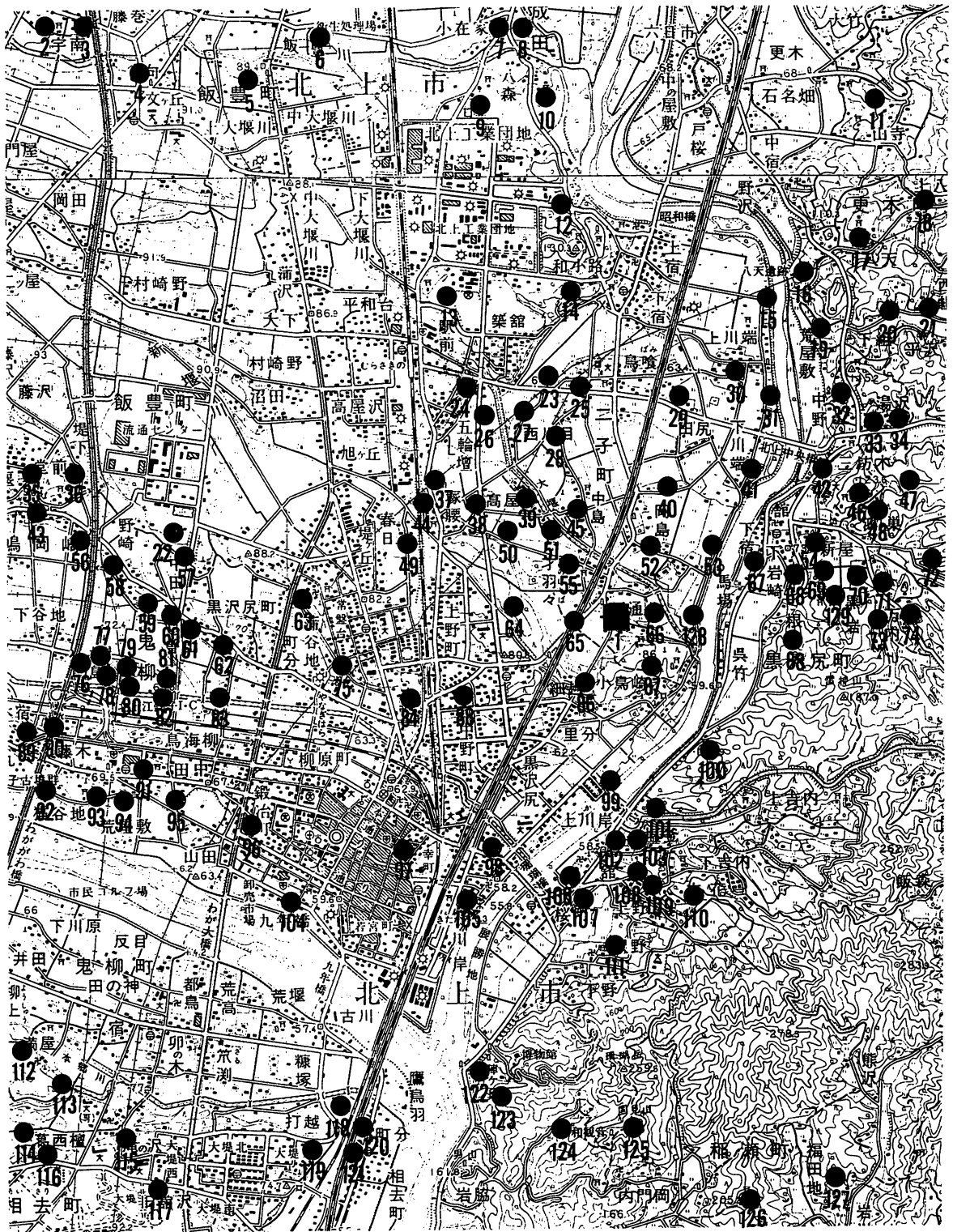


第5図 模式柱状図

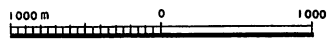
4. 周辺の遺跡

北上市では昭和40年代からの東北新幹線、東北縦貫自動車道・横断道秋田線、工業団地建設などに伴う緊急発掘調査が数多く行われている。現在までのところ413ヶ所の遺跡（平成11年度遺跡台帳）が登録されている。時代別では旧石器時代が11、縄文時代が201、弥生時代が5、古墳時代が4、奈良～平安時代が144、古代が22、中世が67、近世が6である。本遺跡が所在する二子地区は低位面にあたり、26遺跡が登録され、奈良～平安時代の遺跡がほとんどである。この低位面を南方の里分、北鬼柳、江釣子と西方に追いかけると、江釣子段丘、煤孫段丘の縁辺に沿って古墳・奈良～平安時代の遺跡が連なっているのがわかる。中位の村崎野段丘の縁辺部にも同時代の遺跡がみられるが、縄文時代の遺跡を含む複合遺跡であることが多い。本遺跡は奈良～平安時代の集落跡と考えられるので、この時代の遺跡を中心にのべる。

尻引遺跡は北上川右岸の自然堤防上に位置し、竪穴住居跡・大溝跡を検出した。住居跡はⅡ期に区分され、構造上や土器組成から、奈良時代末期頃と9世紀中葉頃に区分されている（北上教委文調報第17集1977）。野田Ⅱ遺跡は中居俵Ⅱ遺跡の約100m北西に位置し、同一面内にある。住居跡が1棟検出され、土器組成は須恵器を欠き、土師器にはロクロ未使用と使用のものが共伴することにより、9世紀中葉～後半と位置付けた（県教委文調報第34集1979）。堀ノ内遺跡は中居俵Ⅱ遺跡と同一面内にあり、竪穴住居跡・土坑・溝などを検出している。出土遺物はヘラ切り須恵器とロクロ不使用甕、ロクロ未使用の土師器甕、ロクロ使用土師器坏の共伴から9世紀前半～中葉と考えられている（県教委文調報第34集1979）。高橋遺跡は低位の江釣子段丘上に立地し、竪穴住居跡、土坑、溝跡を検出している。竪穴住居跡は4棟検出され、このうち1棟は北壁中央部にカマドを持つこと、出土遺物組成に須恵器がなく、ロクロ不使用の土師器のみが出土していることから奈良時代の住居跡とされた。残り3棟からは10世紀前半の土器様相を示す土器が出土している（江釣子教委1981）。八幡遺跡は低位段丘の江釣子段丘上に立地し、住居跡・土坑・合口甕棺墓などを検出している。住居跡は18軒検出され、出土遺物から6～10世紀代に営まれていたとみられている。合口甕棺墓は県内で8遺跡9例目の検出である。出土遺物には県内初の平安時代のハソウがあり、平安時代にも土器のセットとして構成していることが確認された（江釣子教委1984）。牡丹畑遺跡は北上川右岸の自然堤防上に位置し、竪穴住居跡7棟、竪穴状遺構5基、土坑12基などを検出した。住居跡は出土遺物組成からそれぞれ、8世紀後半・9世紀前後・9世紀代・9世紀後半～10世紀代に位置づけられた（北上文調報第55集1988）。藤沢遺跡は中位段丘の村崎野段丘上に位置し、住居跡・土坑・製銅遺構などを検出している。住居跡は出土遺物などから8世紀後半～9世紀代とみられている。製銅遺構は出土遺物から8世紀末とみられている（北上文調報第54集）。森下遺跡は中位段丘の村崎野段丘上にある平安時代の集落跡である。住居跡2棟と土坑1基を検出し、出土遺物から9世紀後半～10世紀代とみられている。同時代の方形周溝を検出している（北上埋文4集1991）。金成Ⅰ遺跡は北上山地内に位置する山間地集落跡で、湿地を囲む湾部緩斜面に竪穴住居跡、高位斜面部で竪穴状遺構、平坦地で溝跡・掘立柱建物跡・柱穴列・柱穴群など検出している。住居埋土中の白色火山灰（十和田a火山灰とみられる）や出土遺物などから、9世紀後半～10世紀代に営まれていたとみられている（北上埋文17集1992・1993）。本宿羽場遺跡は低位段丘の江釣子段丘上にある奈良時代後期から平安時代後期の集落跡である。竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・柱列・溝・柱穴状土坑群などを検出している。竪穴住居跡は15棟検出され、出土遺物組成から8世紀半ば～10世紀代にわたり間断なく構築されたと考えられている。SI003からは鍛冶遺構が検出され、小鍛冶を行ったものと推定されている（北上埋文19集1993・1994）。



1:50,000



第6図 周辺の遺跡位置図

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
4	向	散布地	縄文	96	大曲西	散布地	平安
6	飯豊	散布地	縄文	112	柳上	散布地	平安
20	沢目	散布地	縄文	117	大堤	散布地	平安
26	--	散布地	縄文	121	西野	散布地	平安
46	鴻巣	散布地	縄文	122	陣ヶ岡	散布地	平安
47	神行田	散布地	縄文	123	展勝地	散布地	平安
51	--	散布地	縄文	124	西谷	散布地	平安
67	--	散布地	縄文	21	掘の内	散布地?	平安
70	四十九里	散布地	縄文	54	白山廃寺	寺院跡	平安
71	--	散布地	縄文	125	国見山廃寺	寺院跡	平安
72	--	散布地	縄文	1	中居俵II	集落跡	平安
73	--	散布地	縄文	14	秋子沢	集落跡	平安
74	--	散布地	縄文	41	尻引	集落跡	平安
85	梨子山	散布地	縄文	43	--	集落跡	平安
87	小鳥崎	散布地	縄文	53	中村	集落跡	平安
88	根岸	散布地	縄文	58	野崎I	集落跡	平安
97	和野	散布地	縄文	75	常盤台	集落跡	平安
100	岩溪	散布地	縄文	84	黒北グラウンド	集落跡	平安
101	横町	散布地	縄文	114	高前田	集落跡	平安
102	館II	散布地	縄文	116	葛西壇	集落跡	平安
103	館III	散布地	縄文	128	千刈	集落跡	平安
107	館I	散布地	縄文	120	鬼柳西裏	集落跡・経塚	平安
108	館IV	散布地	縄文	98	方八丁館	城館跡	平安
109	立花小学校下	散布地	縄文	105	安部館	城館跡	平安
111	沢野	散布地	縄文	106	立花館	城館跡	平安
129	--	散布地	縄文	56	鳩岡崎三館	散布地・城館跡	平安・中世
16	八天	集落跡	縄文	9	成田	散布地	古代
49	下春木場	集落跡	縄文	10	八森館	散布地	古代
104	九年橋	集落跡	縄文	23	--	散布地	古代
115	滝ノ沢	集落跡	縄文	25	--	散布地	古代
119	南館	墳墓	縄文・近世	27	--	散布地	古代
69	--	散布地	縄文・古代	28	--	散布地	古代
34	湯沢館	散布地・城館跡	縄文・中世	29	--	散布地	古代
68	黒岩城	散布地・城館跡	縄文・中世	30	--	散布地	古代
110	高館	散布地・城館跡	縄文・中世	33	--	散布地	古代
99	牡丹畑	散布地	縄文・平安	37	--	散布地	古代
35	鳩岡崎高台	集落跡	縄文・平安	38	--	散布地	古代
36	鳩岡崎上の台	集落跡・城館跡	縄文・平安	39	--	散布地	古代
55	野田I	散布地	縄文・弥生・古代	40	--	散布地	古代
126	八王子森館	散布地・城館跡	弥生・中世	44	--	散布地	古代
92	猫谷地古墳群	古墳群	古墳・奈良	45	--	散布地	古代
93	八幡古墳	古墳群	古墳・奈良	48	--	散布地	古代
22	藤沢	散布地	奈良・平安	50	--	散布地	古代
60	清水端	散布地	奈良・平安	52	--	散布地	古代
89	本宿羽場	集落跡	奈良・平安	66	--	散布地	古代
94	八幡	集落跡	奈良・平安	2	飯豊館	散布地	中世
95	鳥海柳	集落跡	奈良・平安	3	中館	散布地	中世
63	藤沢窯跡群	窯穴	平安	11	八幡館	城館跡	中世
5	月館	散布地	平安	12	二子城	城館跡	中世
8	下成田	散布地	平安	17	天王館	城館跡	中世
31	上川端	散布地	平安	18	梅ヶ沢館	城館跡	中世
32	三坊木	散布地	平安	19	下欠野館	城館跡	中世
57	中田	散布地	平安	42	三坊木館	城館跡	中世
59	野崎II	散布地	平安	113	羽場館	城館跡	中世
61	曾山I	散布地	平安	118	観音館	城館跡	中世
76	下谷地	散布地	平安	127	一夜館	城館跡	中世
77	朴島I	散布地	平安	15	上川端塚群	墳墓	中世
78	朴島IV	散布地	平安	24	五輪壇	墳墓	中世
79	朴島II	散布地	平安	7	成田一里塚	一里塚	近世
80	朴島	散布地	平安	13	伊勢	散布地	近世
81	萩島	散布地	平安	86	蟹沢	散布	--
82	三枚橋	散布地	平安	64	上野	散布地	--
83	柳田	散布地	平安	65	中居俵	散布地	--
90	上藤木	散布地	平安	62	蒲谷地	散布地	
91	高橋	散布地	平安				

第2表 周辺の遺跡一覧

Ⅲ. 調査方法と室内整理

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査区の区画設定は任意の基準点1・2を設置し、2点間を見通す直線と基準点を通りこれに直交する直線を座標の基軸線とした。各基準点の平面直角座標第X系による成果は次の通りである。

基準点1 X=-77, 710. 000m、 Y=+26, 350. 000m、 H=61. 453m

基準点2 X=-77, 710. 000m、 Y=+26, 390. 000m、 H=61. 800m

これら座標値をもとに遺跡全体を32×72mの大区画を設定し、さらに4×4mの小区画に細分し、東西に数字の1～18を、南北にアルファベットa～hを付した。調査区の名称はアルファベット・数字の組み合わせでa1、b1というように呼称した。

(2) 粗掘り・遺構検出

雑物の除去と刈り払い作業から開始し、調査区内を網羅するように一辺が4mのマスを4ヶ所設定し、試掘を行い、土層の状況と遺物の出土状況の把握につとめた。その結果、調査区西側で30cm、東側で10cmは、耕作土として剥ぎ取っても調査に支障がないことが判明し、重機により慎重に除去した。その後人力により遺構の検出、精査を行った。

(3) 遺構の命名 検出された遺構の命名は次のように行った。

種別 遺構名(登録数)

竪穴住居跡: SI1～6 (6) 土坑: SK1 (1) 竪穴状遺構: SI t 1 (1)

溝状遺構: SD1～2 (2) 掘立柱建物跡: SB1 (1)

柱穴状遺構: SKP1～109、117 (欠番75、76、77、107)

(4) 遺構精査と実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は、竪穴住居跡・竪穴状遺構は4分割法、土坑類は2分法を原則として精査を行った。遺構の記録は主に実測図作成と写真撮影により行い、実測図に表現できないものはフィールドノートに記録した。作図は座標系にあわせた1mメッシュを基本とする簡易遺方測量で行った。

(5) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ(モノクロ)と35mm判カメラ(モノクロとカラーリバーサル)を使用し、この他にデジタルカメラ1台をメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影内容を記載した「撮影カード」を事前に写し、整理がしやすいようにした。また、調査終了間近に小型飛行機による空中写真の撮影を実施した。

2. 室内整理

図面の点検・遺物の洗浄・写真の整理は原則的に現場で野外調査と平行して行うこととしたが、後半は毎日の調査整理を重点的に行ったため、一部は野外調査終了後に行った。

(1) 遺構

実測してきた図面の座標、セクションポイントの位置、基準高などを点検しながら必要に応じて第2原図を作成し、トレースを行った。

図版の縮尺は、竪穴住居跡が1/60、土坑類・焼土遺構・竪穴状遺構などが1/40、掘立柱建物跡・柱穴

群は1/60を原則とした。なお、個々の図版にはスケールを付してある。

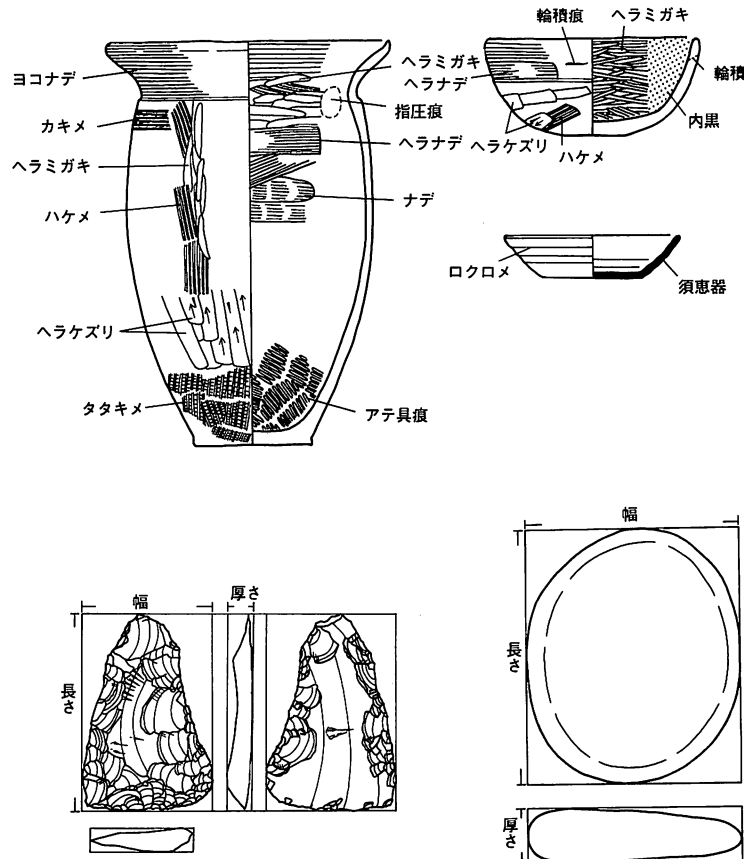
(2) 遺物

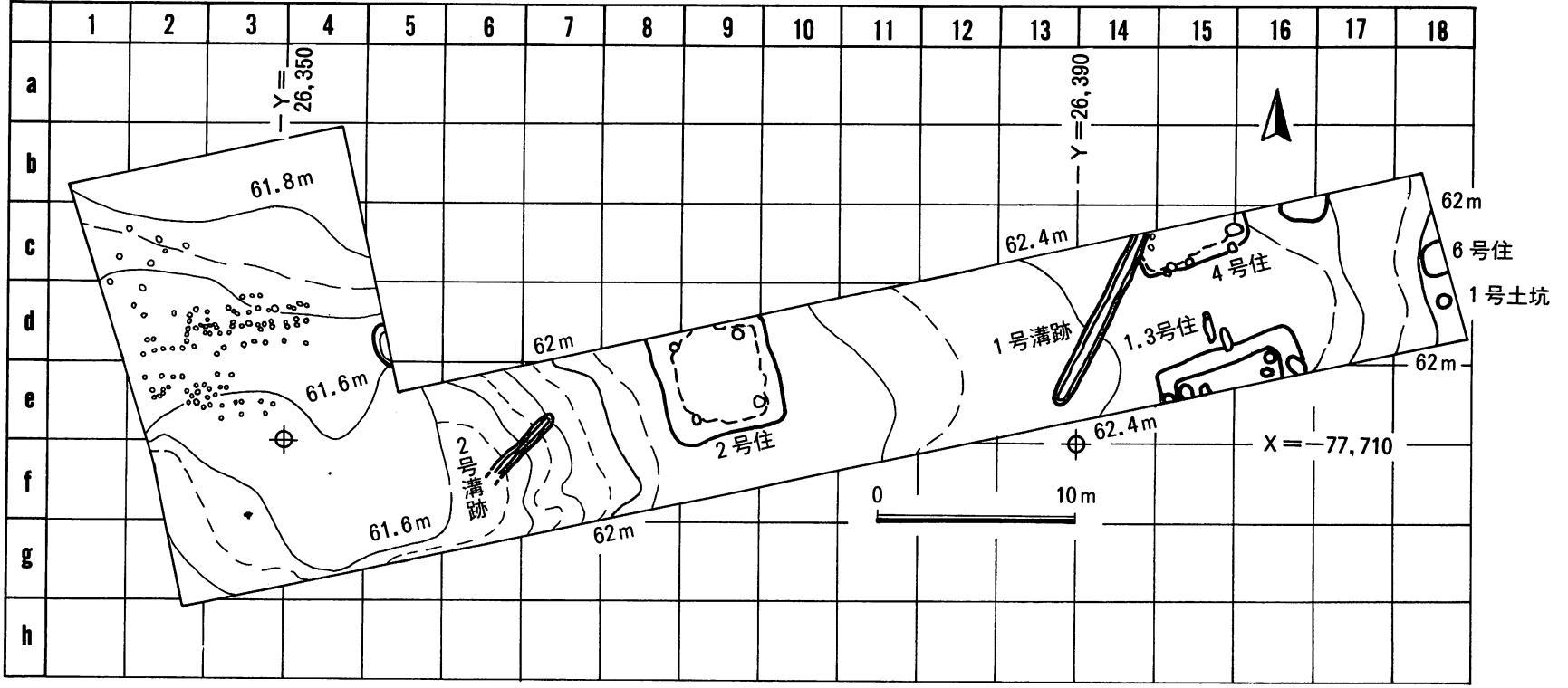
遺物は洗浄後、採取月日順に整理し、実測や拓本の必要なものを選択した後遺構内外に分け登録し、注記・接合・復元を行った。報告書に掲載した遺物は、登録した中からさらに選択して実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、土器は接合・復元できたものの大部分、破片は器形や文様モチーフの明瞭なものを優先した。同一遺構の破片資料は床面出土のものはできるだけ使用し、同じ文様の破片は重複記載のないようできるだけ避けている。遺構外遺物は遺構内遺物と比較して特徴的なものを掲載している。石器は出土点数が少なく、遺構内外とも不定形石器の一部を除き、明瞭な器種は掲載している。挿図中の縮尺は、土器が1/3、剥片石器が1/2、礫石器が1/3を原則としている。

(3) 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルム規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理して台帳に記載した。デジタルカメラのデータはCD-Rに調査日ごとにJPEGファイルで記録している。遺物は登録したものを、石器は遺構内外の順に、土器は復元できたものから破片の順に遺構内外の別なく35フィルムで撮影し整理した。なお、遺物の撮影は当センターの写真技師が行った。





第7图 遺構配置図

Ⅳ. 検出された遺構と出土遺物

検出された遺構は竪穴住居跡6棟、竪穴状遺構1基、土坑2基、掘立柱建物跡1棟、柱穴状土坑104基、溝跡2条である。これらの遺構から平安時代の土師器、須恵器、石器、鉄製品などが出土している。遺構外では、西側の凹地で縄文土器片や石器が、竪穴住居跡が検出された東側の凸地ではおもに平安時代の土師器や須恵器が出土している。

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡

遺構(第8図、写真図版3・4)

<検出状況・重複関係> d15~16区、e15~16区に位置し、半分以上調査区外に延びる。I層の耕作土を除去し、IV層(地山)上面で検出した。第3号住居跡と重複し、第3号住居跡より新しい。

<形状・規模> 調査区内の形状で見ると、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸はN-16°-Wで、規模は東西で7.38m、南北は2.5m以上である。

<埋土> 19層に区分された。埋土上部は削平されているが、黒褐色シルトを主体とした混合土である。

<壁・床> 地山の褐色粘土層を掘り込んで構築されている。床はほぼ水平で締まっており、壁は床面から緩く外傾して立ち上がる。壁高は削平の影響により2~3cm程度である。

<柱穴> 3基検出した。P1とP2は主柱穴と見られる。平面形はともに楕円形を呈し、P1は開口部径73×60cm、深さ84cmで、P2は開口部径58×46cm、深さ48cmである。P8は円形を呈し、開口部径22×22cm、深さ8cmである。底面から土師器鉢が出土している。その他、P7及びP9が検出されているが本遺構との関連は不明である。

<カマド> 北壁中央部に位置する。削平により大部分が消失されており、確認できるのは燃焼部と煙道部の一部である。燃焼部は82×81cmの不整形の広がりを持ち、焼土の層厚は最大10cmである。煙道部は検出長165cmで、煙出部に向かって緩やかに傾斜し、煙出部で落ち込んでいる。煙出部の深さは35cmである。

<付属施設> 土坑2基を検出した。P11は全体形が不明であるが、規模は短軸方向で58cm、深さは20cmである。P12は楕円形を呈し、規模は開口部径108×66cm、深さ17cmである。

<その他> 東壁側で焼土が検出されている。調査区外にかかるため平面形及び規模は不明である。焼土の層厚は約6cmである。

遺物(第9・10図、写真図版12)

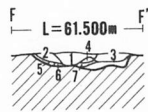
第3号住居跡からの出土遺物と区別できなかったため、2つの住居一括で取り上げた。出土遺物には土師器、須恵器がある。これらは床面、埋土および柱穴から出土しており、出土状況に規則性は見られなかった。土師器は坏・鉢・甕、須恵器は甕・壺が出土している。土師器坏や鉢で完形に近いものもあるが、ほとんどが口縁部や底部付近の破片である。石器は出土していない。

<所属時期> 出土遺物や住居の構造から9世紀後半と考えられる。

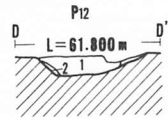
第3号住居跡

遺構(第8図、写真図版3・4)

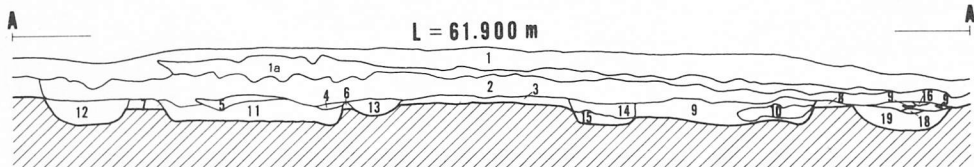
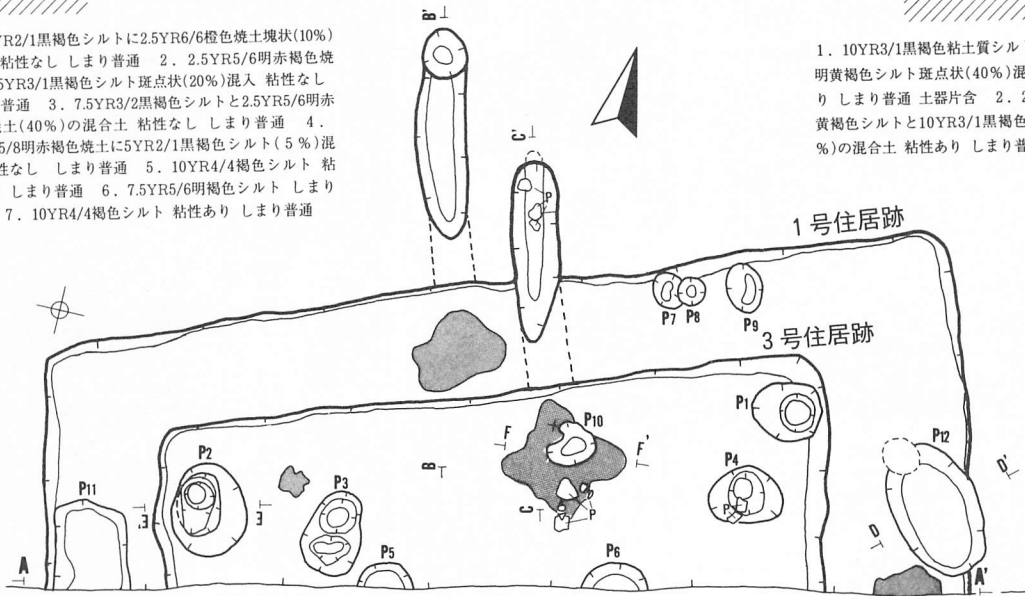
<検出状況・重複関係> d15~16区、e15~16区に位置する。I層の耕作土を除去し、IV層(地山)上面で検出した。第1号住居跡と重複し、第1号住居跡より古い。



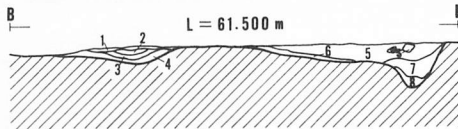
1. 5YR2/1黒褐色シルトに2.5YR6/6橙色焼土塊状(10%)混入 粘性なし しまり普通
2. 2.5YR5/6明赤褐色焼土に7.5YR3/1黒褐色シルト斑点状(20%)混入 粘性なし しまり普通
3. 7.5YR3/2黒褐色シルトと2.5YR5/6明赤褐色焼土(40%)の混合土 粘性なし しまり普通
4. 2.5YR5/8明赤褐色焼土に5YR2/1黒褐色シルト(5%)混入 粘性なし しまり普通
5. 10YR4/4褐色シルト 粘性あり しまり普通
6. 7.5YR5/6明褐色シルト しまり普通
7. 10YR4/4褐色シルト 粘性あり しまり普通



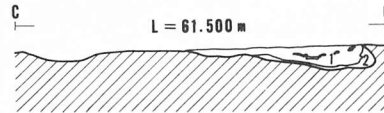
1. 10YR3/1黒褐色粘土質シルトに2.5Y6/6明黄褐色シルト斑点状(40%)混入 粘性あり しまり普通 土器片含
2. 2.5Y6/6明黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルト(5%)の混合土 粘性あり しまり普通



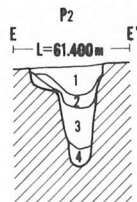
1. 7.5YR3/1黒褐色シルトに2.5Y7/6明黄褐色シルト(5%)粒状が混入 表土
- 1a. 2.5Y7/6明黄褐色粘土質シルトと7.5YR3/1黒褐色シルト(15%)の混合土 盛土
2. 10YR3/1黒褐色シルトに焼土粒極少量混入 粘性ややあり ややしる 土器片含
3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルトと3/1黒褐色シルト(20%)の混合土 粘性あり ややしる 土器片含
4. 10R2/2黒褐色シルトに2.5YR4/4にぶい赤褐色焼土粒(20%)が混入
5. 10YR3/1黒褐色シルトと2.5Y5/6黄褐色シルト(30%)の混合土 粘性ややあり しまりあり
6. 10YR4/3にぶい黄褐色シルトと3/1黒褐色シルト(20%)の混合土 粘性あり ややしるあり
7. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性あり しまり普通
8. 10YR5/6黄褐色シルト 粘性あり しまり普通
9. 10YR3/2黒褐色シルトに6/6明黄褐色シルト(30%)が斑点状に混入 粘性あり しまり普通
10. 10YR2/1黒色シルトに6/6明黄褐色シルト(3%)混入 粘性なし しまり普通
11. 10YR3/1黒褐色シルトに5/6黒褐色シルト(30%)が斑点状に混入 やや粘性あり しまり普通
12. 10YR3/1黒褐色シルトと5/6黄褐色シルト(30%)、4/4褐色シルト(20%)の混合土 やや粘性あり しまり普通 P11埋土
13. 10YR3/1黒褐色粘土質シルトに5/6黄褐色シルト(20%)が斑点状に混入 粘性あり しまり普通 P5埋土
14. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトに3/1黒褐色シルト(10%)が斑点状に混入 粘性あり しまり普通 P6埋土
15. 10YR5/6黄褐色粘土質シルトに3/1黒褐色シルト(5%)が斑点状に混入 粘性あり しまり普通 P6埋土
16. 10YR5/6黄褐色シルト 粘性あり しまり普通
17. 10YR3/1黒褐色シルトと5/6黄褐色シルト(30%)の混合土 塊状焼土粒(10%)混入 粘性なし ややしる 土器片含
18. 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性あり しまり普通
19. 10YR2/1黒色シルトに5/6明黄褐色シルト(50%)が斑点状に混入 粘性大 しまり普通



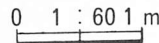
1. 7.5YR2/2黒褐色シルトに2.5YR明赤褐色焼土粒(10%)混入 粘性なし しまりあり
2. 2.5YR5/6明赤褐色焼土に7.5YR2/2黒褐色シルト(5%)混入 粘性なし しまりあり
3. 2.5YR4/4にぶい赤褐色焼土 粘性なし しまりあり
4. 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性あり しまり普通
5. 7.5YR2/1黒色シルトと3/2黒褐色シルト(20%)の混合土 2.5YR5/6明赤褐色焼土粒(数%)混入 粘性なし しまりあり
6. 10YR6/6明黄褐色粘土質シルトと7.5YR3/1黒褐色シルト(5%)の混合土 粘性あり しまり普通
7. 7.5YR2/2黒褐色シルト 粘性あり しまり普通
8. 10YR6/6明黄褐色粘土質シルトに3/1黒褐色シルト斑点状(30%)に混入 粘性あり しまり普通



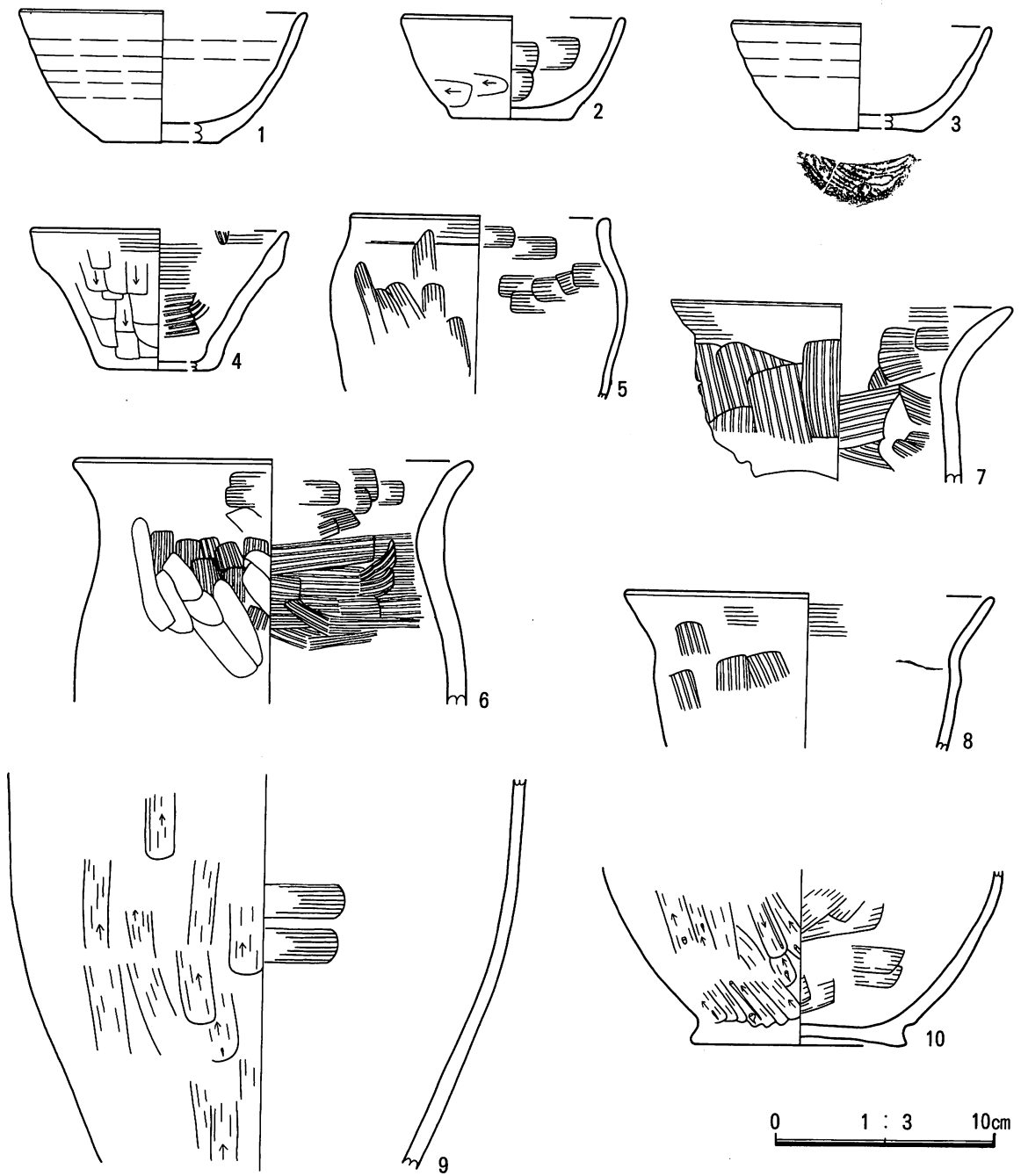
1. 10YR2/2黒褐色シルトに3/2黒褐色シルトが斑点状(20%)に混入 粘性なし しまりあり 土器片含
2. 2.5YR5/6黄褐色粘土質シルトと2/2黒褐色シルト(20%)の混合土 粘性あり しまりあり



1. 10YR2/1黒色シルトと2.5YR4/3オリブ黒色シルトの混合土 炭化物粒含 粘性なし しまり普通
2. 2.5YR4/3オリブ褐色シルトに5YR5/6明赤褐色焼土塊(40%)混入 粘性なし しまり普通
3. 10YR2/1黒色シルトに5/6黄褐色シルト斑点状(40%)に混入 粘性あり しまり普通
4. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性あり しまり普通



第8図 第1・3号竪穴住居跡

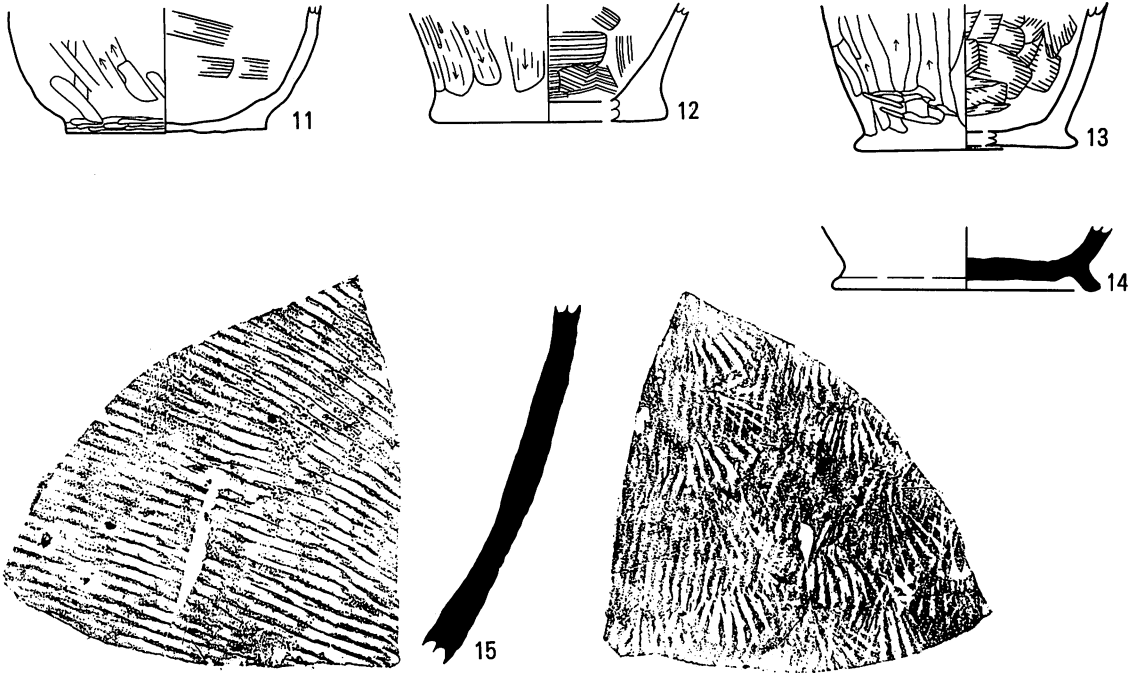


(単位: cm)

番号	出土地点	種別	器種	外面調整				内面調整				内黒	口径	底径	器高	分類	備考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
1	焼土(1住)	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	回転糸切後手持ヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(14)	(5)	5.9	I		
2	501柱穴埋土	土師器	小鉢	ナデ	ナデ	手持ちヘラケズリ	回転糸切後手持ヘラ削り	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	(9)	5.5	4.8			
3	床面(1住)	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(13)	(6)	5	IIa		
4	埋土	土師器	鉢	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	---	ナデ	ナデ	ナデ	---	(12)	---	(6.8)			
5	埋土	土師器	甕	ナデ	ナデ	---	---	ナデ	ナデ	---	---	(13)	---	---	I	頸部に沈線	
6	埋土	土師器	甕	刷毛目後ナデ	刷毛目後ヘラケズリ	---	---	刷毛目後ナデ	刷毛目	---	---	(19)	---	---	I		
7	埋土	土師器	甕	刷毛目後ナデ	刷毛目	---	---	刷毛目後ナデ	刷毛目	---	---	---	---	---	I		
8	埋土	土師器	甕	刷毛目後ナデ	刷毛目	---	---	ナデ	ナデ	---	---	(20)	---	---	I	調整面が剥落	
9	掘出し(3住)	土師器	甕	---	ヘラケズリ	---	---	---	ヘラナデ	---	---	---	---	---	I		
10	埋土	土師器	甕	---	---	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	---	---	ナデ	ナデ	---	(10)	---	I		

() 推定値

第9図 第1・3号竪穴住居跡出土遺物(1)



0 1 : 3 10cm

(単位: cm)

番号	出土地点	種別	器種	外面				内面				内径	口径	底径	器高	分類	備考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
11	埴土	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	—	ヘラナデ	ナデ	—	7.7	—	I		
12	埴土	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	—	刷毛目	ナデ	—	(10)	—	I	外部表面に貼げ	
13	埴土	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	—	ヘラナデ	ナデ	—	(9)	—	I		
14	埴土	須恵器	甕	—	—	—	口クロ	—	—	—	口クロ	—	10	—			
15	床面	須恵器	甕	—	—	平行叩き目	—	—	—	放射状あ	—	—	—	—			

*放射状あ=放射状あて具痕 () 推定値

第10図 第1・3号竪穴住居跡出土遺物(2)

<形状・規模> 調査区内の形状で見ると、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸はN-15° -Wで、規模は東西で5.30m、南北は1.80m以上である。

<埋土> 表土から残った、住居を横断する面では19層に区分されたが、住居にかかわる土層は13層である。埋土上部は削平及び第1号住居構築の際の掘り込みのため不明である。確認できる埋土からは黒褐色シルトやにぶい黄褐色シルトを主体とした混合土である。

<壁・床> 地山の褐色粘土層を掘り込んで構築されている。床面中央部がやや盛り上がり、壁面に向かうに従って緩やかに傾斜している。壁は床から外傾して立ち上がる。壁高は5~18cm程度である。

<柱穴> 2基検出した。P3とP4は主柱穴と見られる。平面形はともに楕円形を呈し、P3は開口部径66×48cm、深さ47cmで、P4は開口部径58×44cm、深さ30cmである。

<カマド> 北壁中央部やや東寄りに位置する。削平等により大部分が消失されており、確認できるのは燃烧部と煙道部の一部である。燃烧部は75×54cmの不整形の広がりを持ち、焼土の層厚は約6cmである。煙道部は検出長152cmで、煙出部に向かって緩やかに傾斜し、ややオーバーハングして立ち上がる。煙出部の深さは18cmである。

<付属施設> 土坑2基を検出した。調査区外に半分以上かかるため平面形は不明である。深さはP6が17cm、P5が12cmである。

<その他> 北壁側西寄りで焼土が検出されている。平面形は24×20cmの不整形を呈し、焼土の層厚は約8cmである。

遺物（第9・10図、写真図版12）

第3号住居からの出土遺物と区別できなかったため、2つの住居一括で取り上げた。出土遺物には土師器、須恵器がある。本住居の出土遺物として、煙出しから出土した土師器甕の胴部片(9)がある。外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデが施されている。

<所属時期> 出土遺物や住居の構造から9世紀と考えられる。

第2号住居跡

遺構（第11図、写真図版5）

<検出状況・重複関係> d9区~e9区を中心に位置し、一部調査区外に延びる。I層の耕作土を除去し、IV層（地山）上面で検出した。

<形状・規模> 調査区内の形状で見ると、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸はN-13° -Wで、規模は東西が5.75m、南北は6.10mである。

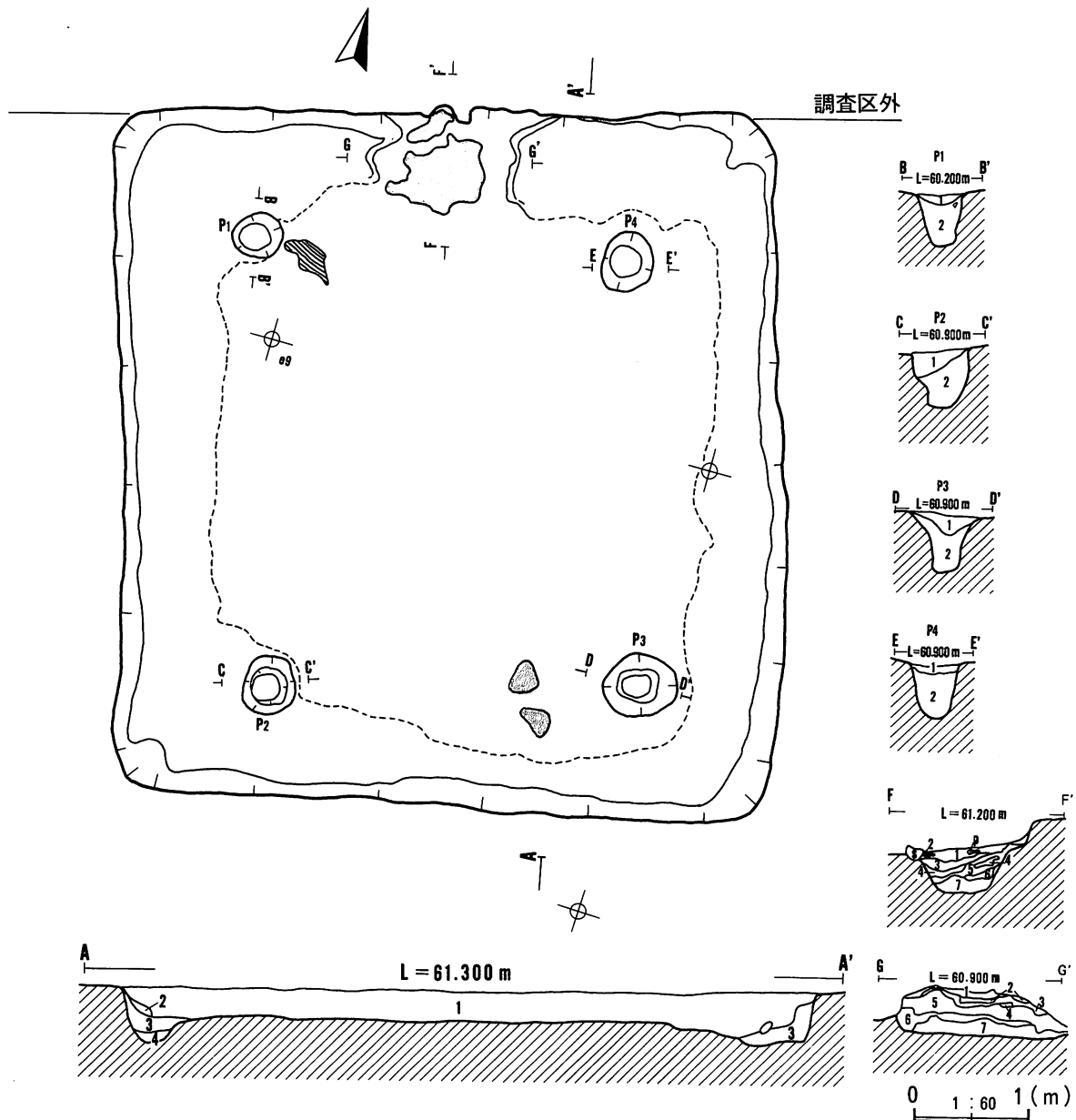
<埋土> 4層に区分された。黒色粘土質シルトが主体で、地山に近くなるにつれ褐色粘土が混入する。自然堆積と考えられる。

<壁・床> 地山の褐色粘土層を掘り込んで構築されている。床は中央部から壁に向かってわずかに傾斜している。中央部で南北方向に2列の掘り方面があり、土を貼っている。また、壁際は全周にわたり、幅50cm~90cmで住居掘り方埋土を床としている。壁は急激に立ち上がっている。各壁中央部の壁高の残存値は、東壁35cm、西壁25cm、南壁28cm、北壁31cmである。

<柱穴> 4基検出した。配置・規模などから主柱穴と考えられる。

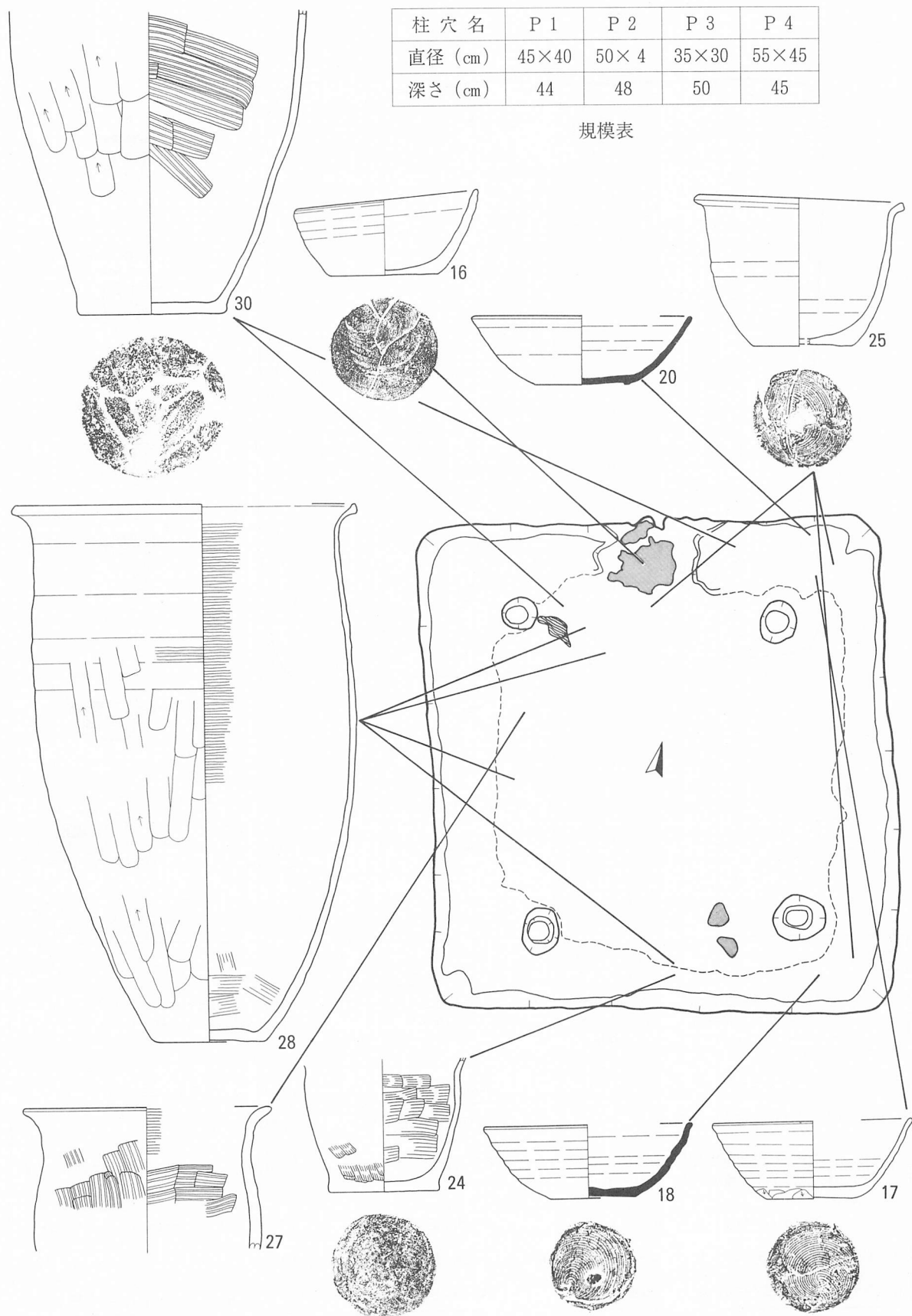
<周溝> 検出していない。

<その他> P1の東脇に長さ50cm幅20cmの炭化材を、また南側床面では2基の焼土を検出した。

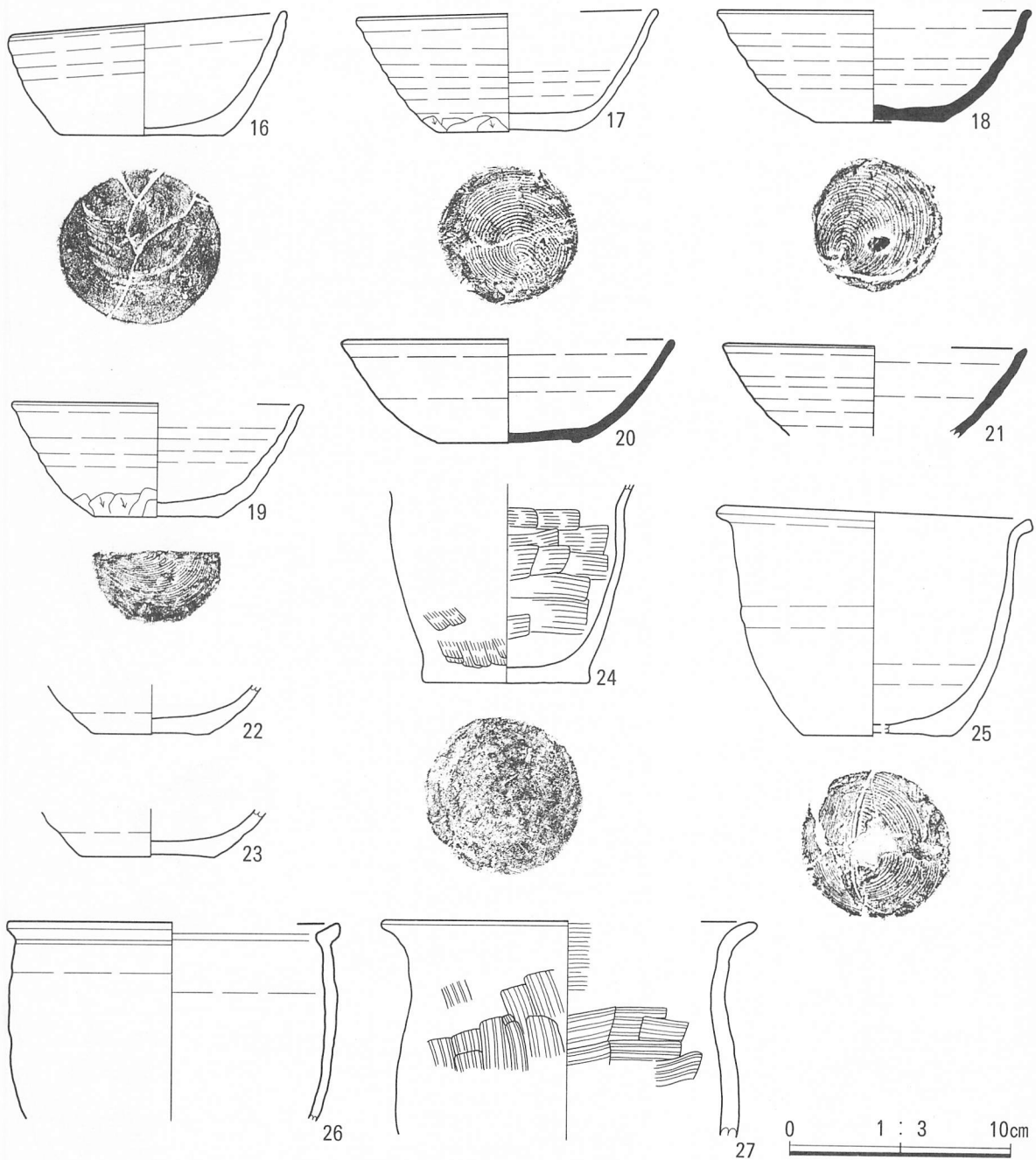


断面	注 記
A—A'	1 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトに4/4褐色粘土が斑点状に混入 土器片 しまりわるい 2 7.5YR2/1黒色粘土質シルト しまりわるい 3 7.5YR2/2黒色粘土質シルトに3/3暗褐色粘土(20%)と4/4褐色粘土が斑点状混入 4 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトに3/3暗褐色粘土(30%)と4/4褐色粘土(20%)が塊状に混入
B—B'	1 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトに4/4褐色粘土が粒状に混入 土器片 2 7.5YR3/3暗褐色粘土に6/6橙色粘土粒状に混入 土器片
C—C'	1 7.5YR3/3暗褐色粘土(90%)に4/4褐色粘土混入 2 7.5YR3/3暗褐色粘土に6/6橙色粘土塊状に混入
D—D'	1 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト(90%)に4/4褐色粘土が粒状に混入 土器片 2 7.5YR3/3暗褐色粘土(60%)に6/6橙色粘土と2/2黒褐色粘土質シルトが塊状に混入 土器片 炭化物
E—E'	1 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト(80%)に5/6明褐色粘土が粒状に混入 2 7.5YR3/3暗褐色粘土(60%)に6/6橙色粘土が混入 炭化物
F—F'	1 5YR3/1(60%)黒褐色粘土質シルトに5/8明赤褐色焼土が混入 土器片 炭化物 2 5YR4/3にぶい赤褐色焼土 3 7.5YR4/4褐色
G—G'	粘土 4 7.5YR3/2黒褐色粘土質シルト 5 7.5YR3/3暗褐色粘土 6 7.5YR2/2黒褐色シルト質粘土 7 7.5YR6/6褐色粘土

第11図 第2号竪穴住居跡



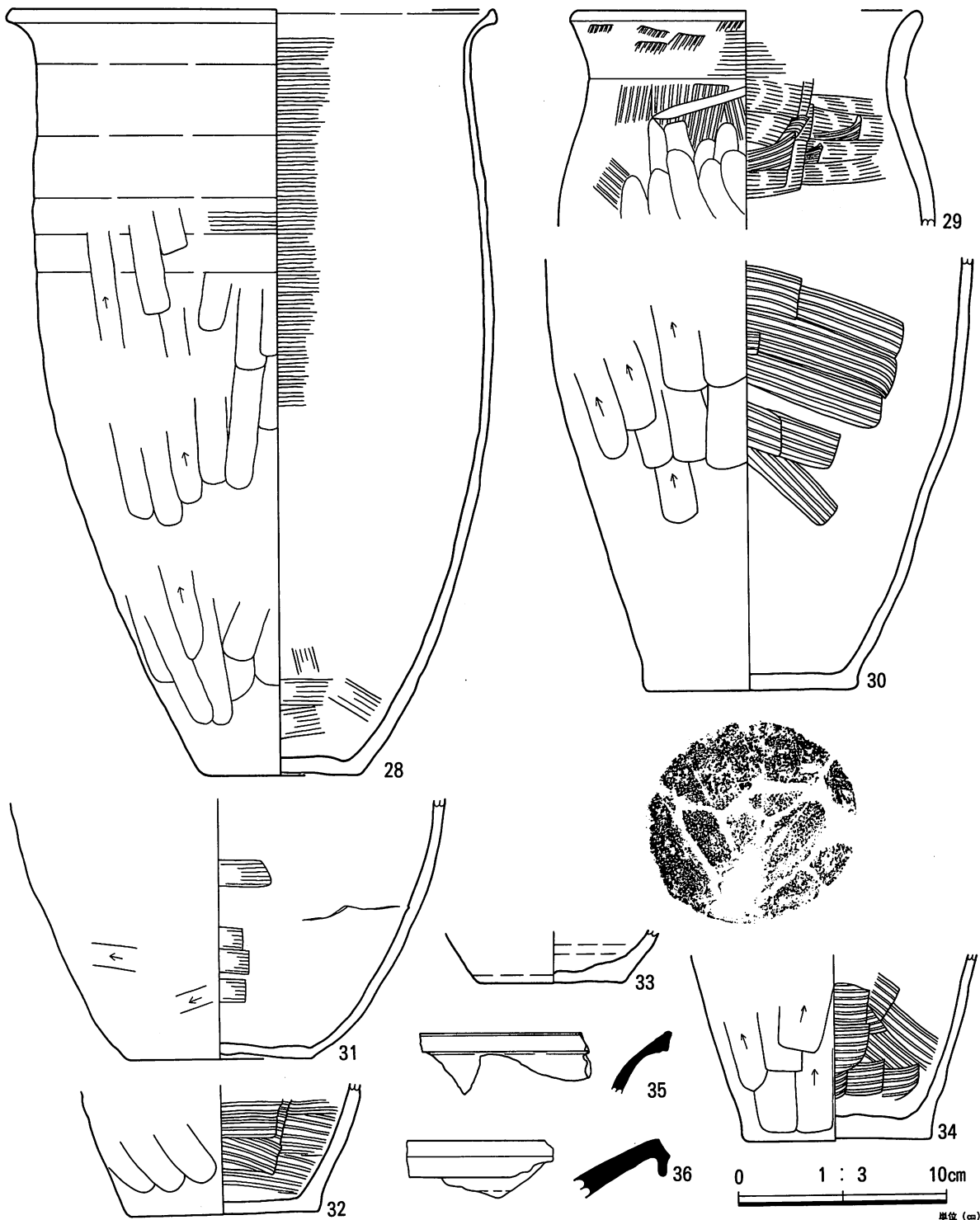
第12図 第2号竪穴住居跡遺物出土状況



番号	出土地点	種別	器種	外面調整				内面調整				内黒	口径	底径	器高	分類	備考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
16	カマド(支脚)	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸切後手持ちヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	13	7	5.5	I	
17	北東住居掘方埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	手持ちヘラケズリ	回糸切後手持ちヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(13)	6.0	5.4	I	
18	南東住居掘方埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(15)	5.8	5.0	B	
19	北東住居掘方埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	手持ちヘラケズリ	回糸切後手持ちヘラ削り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(15)	(6)	5.2	I	
20	西住居掘方埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(15)	(6.6)	4.7	A	
21	住居掘方埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(15)	—	—	A	
22	南東住居掘方埋土	土師器	坏	—	—	ロクロ	回糸切後手持ちヘラ削り	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	—	5	—	I	
23	南住居掘方埋土	土師器	坏	—	—	ロクロ	回糸切後手持ちヘラ削り	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	—	6	—	I	
24	埋土	土師器	甕	—	ナデ	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	ナデ	ヘラナデ	ナデ	—	—	7.2	—	I	一部網代痕
25	埋土	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	—	12	6.5	10	II	
26	埋土	土師器	甕	ロクロ	ロクロ	—	—	ロクロ	ロクロ	—	—	—	(15)	—	—	II	
27	埋土	土師器	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ	—	—	ナデ	ハケメ	—	—	—	(18)	—	—	I	

() 推定値

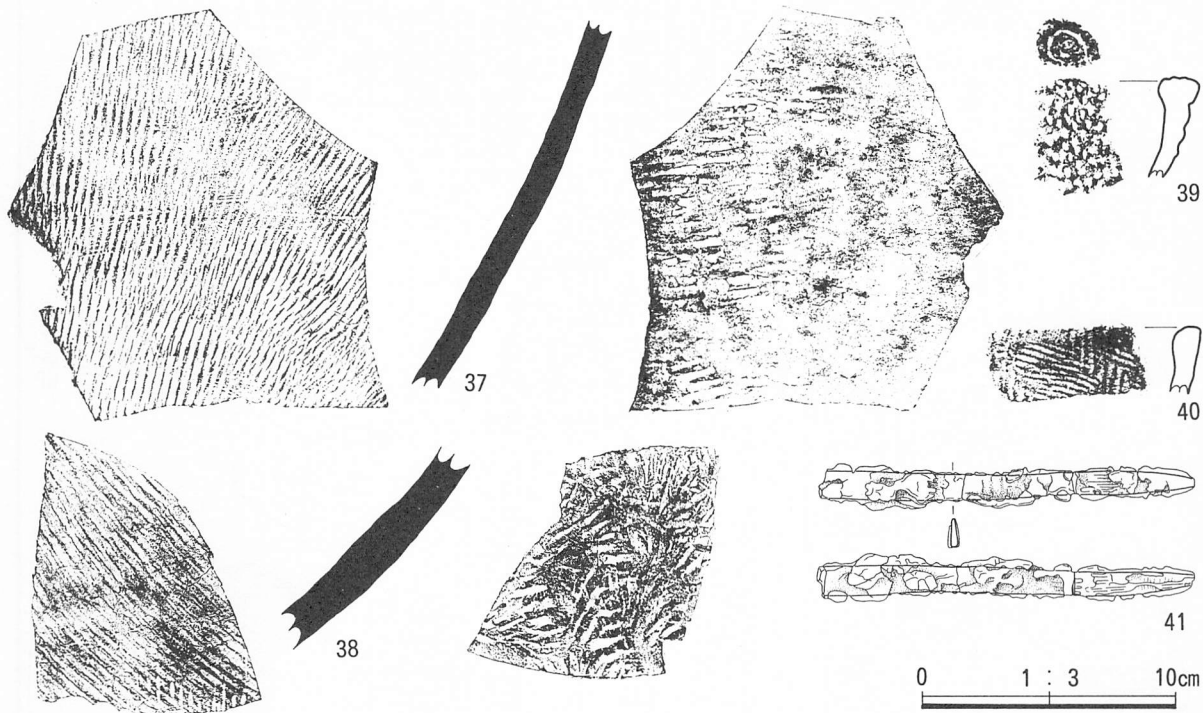
第13図 第2号竪穴住居跡出土遺物(1)



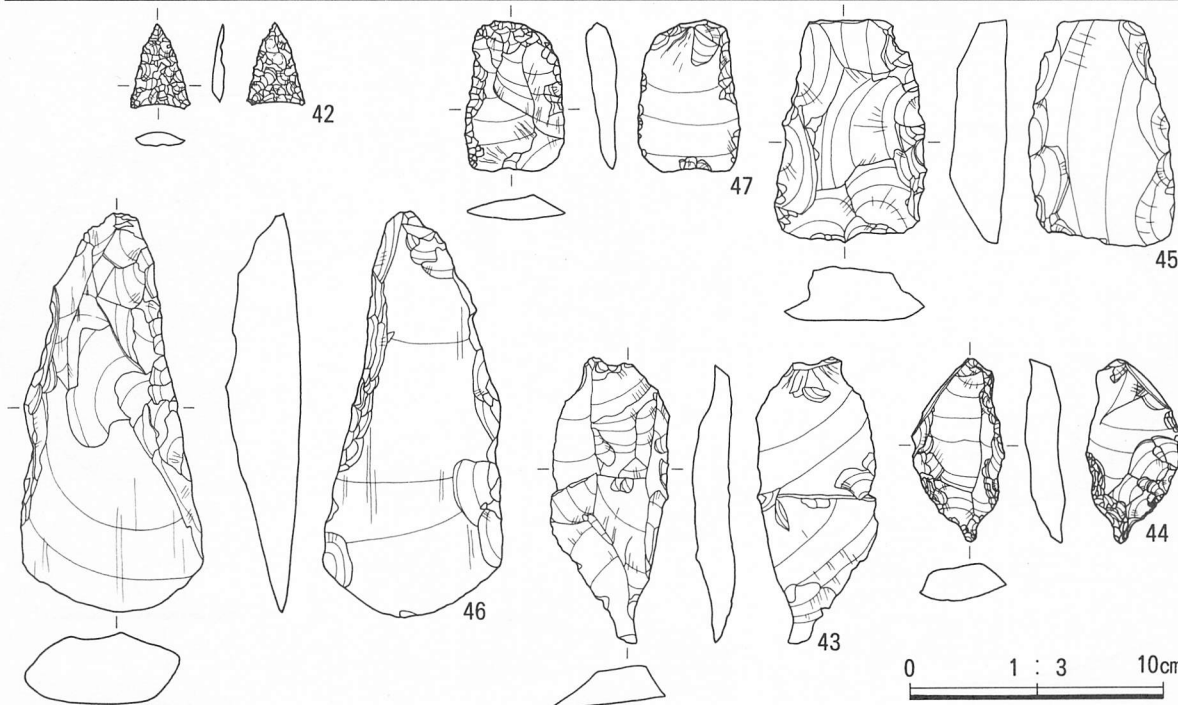
番号	出土地点	種別	器種	外面				内面				内径	口径	底径	器高	分類	備考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
28	埋上	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	22	7.5	36	Ⅱ	長胴甕
29	1号柱穴埋上	土師器	甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ヘラケズリ	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ	—	—	(18)	—	—	—	Ⅰ	頸部に段
30	埋上	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	水取痕	—	—	ナデ	—	—	—	10	—	Ⅰ	—
31	埋上	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	—	ヘラナデ	—	—	—	8.5	—	Ⅰ	風化
32	埋上	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	—	ナデ	—	—	—	(9)	—	Ⅰ	—
33	カマド燃焼部	土師器	甕	—	—	—	回糸切後手持ちヘラケズリ	—	—	—	ロクロ	—	—	7	—	Ⅱ	—
34	埋上	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	—	ハケメ	ナデ	—	—	9	—	Ⅰ	—
35	床面	抓慮器	甕	ロクロ	ロクロ	—	—	ハケメ	ハケメ	—	—	—	—	—	—	—	—
36	埋上上部	抓慮器	甕	ロクロ	ロクロ	—	—	ロクロ	ロクロ	—	—	—	—	—	—	—	—

() 推定値

第14図 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)

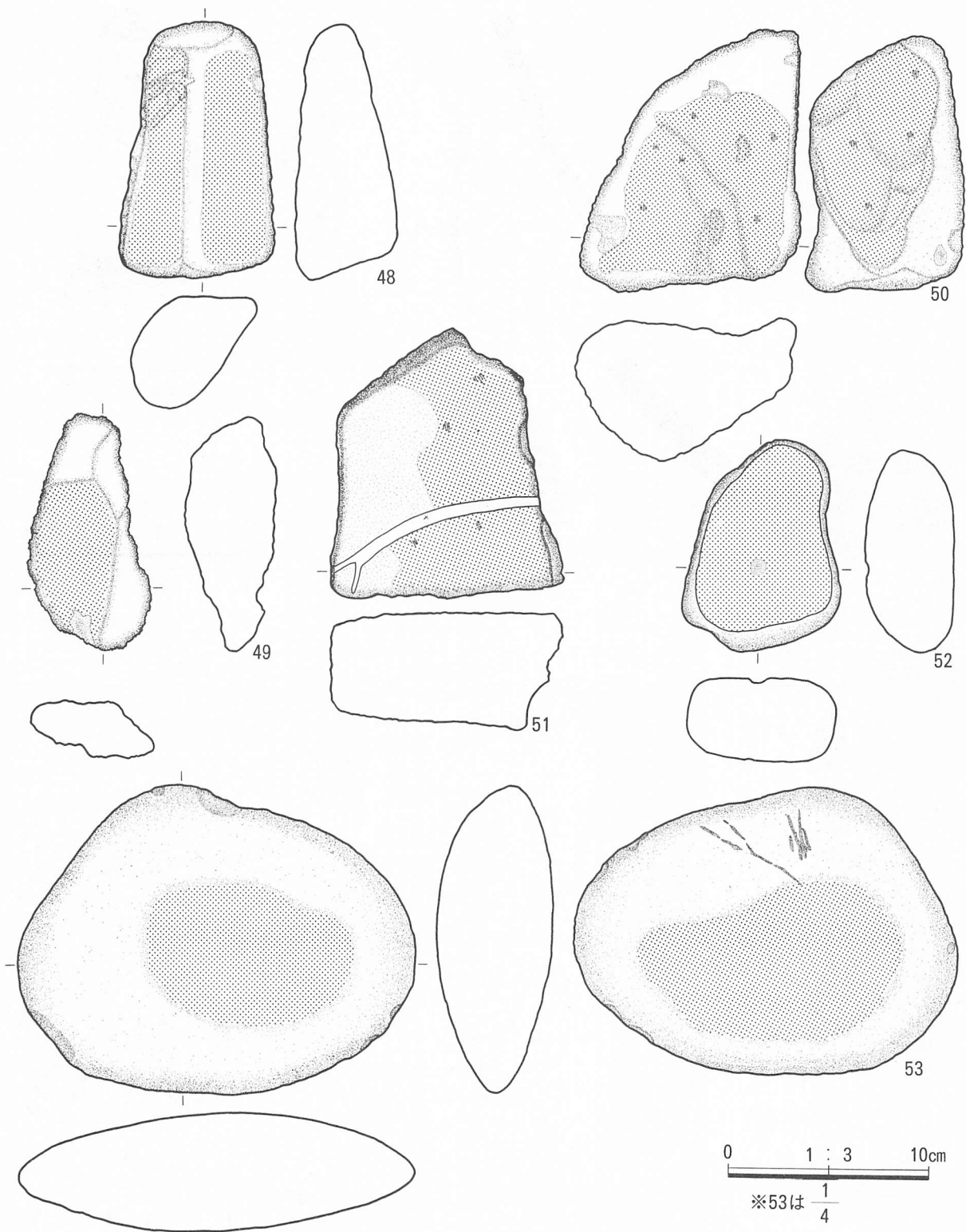


番号	出土地点	種別	器種	外面調整				内面調整				内黒	口径	底径	器高	分類	備考	
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部							
37	床面	須恵器	鏝	—	平行叩き目	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
38	南西住居掘方埋土	須恵器	鏝	—	平行叩き目	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
番号	出土地点	器種	文様の特徴				備考											
39	埋土上部	深鉢	口縁部：山状突起で天井部に楕円形の沈線、外面に竹管状の刺突															
40	埋土上部	深鉢	口縁部：内側に肥厚し、外面はR.L施文															
番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考											
41	北住居掘方埋土	刃子	16.1	1.9	0.5	—												



番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
42	粗掘	石鏃	22	16	3	0.7	頁岩	
43	P 4-2	石錐	75	32	11	22.4	頁岩	
44	埋土下部	石錐	48	24	11	10.9	頁岩	
45	粗掘	石鏃	59	41	15	36.2	砂岩	
46	床面付近	石鏃	11	49	20	95.6	ホルンフェルス	
47	埋土下部	不定形	40	26	8	6.9	頁岩	

第15図 第2号竪穴住居跡出土遺物(3)



番号	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
48	北掘方埋土	擦石	124	67	55	633	角閃ヒン岩	
49	南西掘方埋土	擦石	112	57	45	116	玄武岩質溶岩	
50	南掘方埋土	擦石	168	148	110	633	玄武岩質溶岩	
51	北側掘方埋土	擦石	130	115	60	1319	安山岩	
52	南西掘方埋土	擦石	102	78	43	484	安山岩	
53	北東掘方埋土	擦石	193	250	70	4500	安山岩	

第16図 第2号竪穴住居跡出土遺物(4)

規模は28×18cmと28×25cmで不整形な形をしている。

＜カマド＞北壁中央部に設けられている。煙道部は調査区外に延びているため、燃烧部のみを検出した。規模は70cm×50cmで、中央部から倒立の坏や甕の底部が重なって出土した。支脚として使われていたと考えられる。

遺物（第12～16図、写真図版13～15）

出土遺物には土師器・須恵器・石器・鉄製品がある。これらは床面および埋土、柱穴内から出土している。土師器は坏・鉢・甕で、須恵器は坏、甕の口縁部片と胴部片、鉄製品は刃子が出土している。土師器坏(16)はカマドで、甕(27・28)は床面から出土した。甕(28)は西半分の床面4ヶ所に散在していた。

＜所属時期＞ 出土遺物や住居の構造から9世紀後半と考えられる。

第4号住居跡

遺構（第17図、写真図版4）

＜検出状況・重複関係＞ c15区に位置し、半分以上調査区外に延びる。I層の耕作土を除去し、IV層（地山）上面で検出した。

＜形状・規模＞ 調査区内の形状でみると、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸はN-18°-Wで、規模は東西が5.6m、南北は2.0m以上である。

＜埋土＞地山まで20cmと薄く、ほとんどが耕作により攪乱を受けており、1層のみ区分できた。暗褐色粘土に黒褐色粘土質シルトが混合する。

＜壁・床＞地山の褐色粘土層を掘り込んで構築されている。床はほぼ水平である。南壁中央部から東壁にかけては、幅45cm～60cmで住居掘り方埋土を床面としている。壁はほとんど削剥をうけている。残存部で約5cmである。

＜柱穴＞4基検出された。全体的に南壁に偏った配置になっており、規模や配置からP2・P4は支柱穴とみられる。P1は開口部が85×65cmと不整形な楕円形を呈する。

＜周溝＞検出されなかった。

＜カマド＞検出されていない。

遺物（第17・18図、写真図版16）

出土遺物には土師器・須恵器・石器がある。これらは周溝埋土および柱穴から出土しており、いずれにおいても出土状況に規則性はみられなかった。土師器には手捏土器、須恵器は坏・甕・壺の破片が出土した。坏(54)の体部表面には「大」字様の墨書がされている。

＜所属時期＞ 出土遺物や住居の構造から9世紀後半と考えられる。

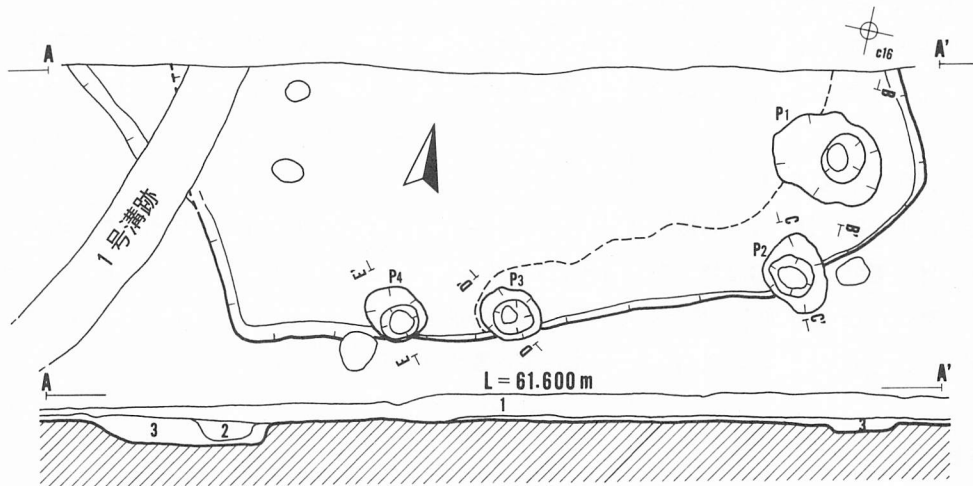
第5号住居跡

遺構（第18図、写真図版6）

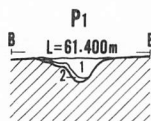
＜検出状況・重複関係＞ b16区～c16区に位置し、一部調査区外に延びる。I層の耕作土を除去し、IV層（地山）上面で検出した。

＜形状・規模＞ 調査区内の形状でみると、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸は南北とみられ、規模は東西が2.1m、南北は1.1m以上である。

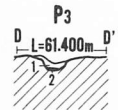
＜埋土＞6層に区分された。黒色シルトに褐色粘土がその割合を変えながら塊状に混入する。人為堆積と考



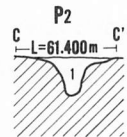
1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト、しまりわるい
2. 7.5YR3/3暗褐色粘土(50%)と3/1黒褐色粘土質シルトの混合土 しまりわるい 土器片含
3. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトと3/3暗褐色粘土(20%)との混合土



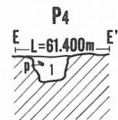
1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトに4/4褐色粘土(20%)混合 しまりわるい 炭化物含
2. 7.5YR4/4褐色粘土 しまる



1. 7.5YR3/1黒褐色粘土質シルト 炭化物含
2. 7.5YR4/4褐色粘土に3/1黒褐色粘土質シルト(20%)混合



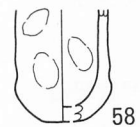
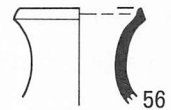
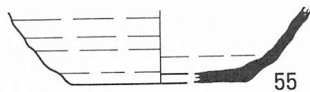
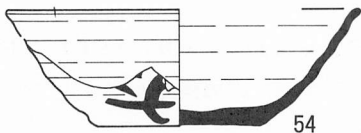
1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトに4/4褐色粘土(20%)混合 しまりわるい 炭化物含



1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトに4/4褐色粘土(20%)混合 しまりわるい 土器片含

0 1 : 60 1 m

柱穴	P1	P2	P3	P4
直径 (cm)	37×32	37×31	32×28	30×28
深さ (cm)	34	58	18	42

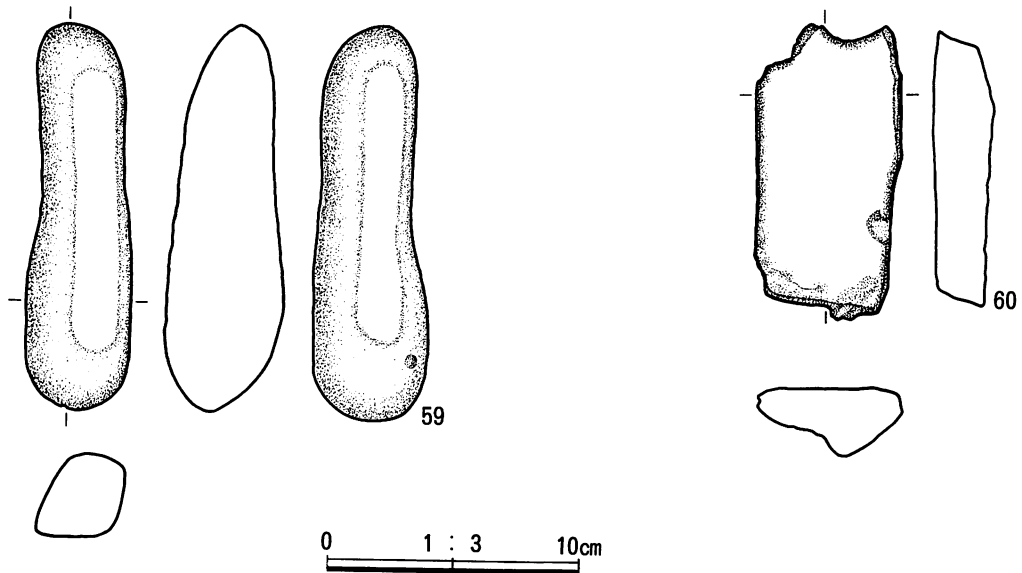


0 1 : 3 10cm
(単位: cm)

番号	出土地点	種別	器種	外面調整				内面調整				内黒	口径	底径	器高	分類	備考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
54	P1埋土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	—	6.4	4.7	b		
55	掘方埋土	須恵器	坏	—	—	ロクロ	回転糸切	—	—	ロクロ	ロクロ	—	(7)	—	—		
56	埋土	須恵器	壺	ロクロ	—	—	—	ロクロ	—	—	—	5	—	—	—		
57	掘方埋土	須恵器	甕	—	平行縄目叩き目	—	—	—	指あて痕	—	—	—	—	—	—		
58	埋土	土師器	手捏ね	—	—	—	指頭圧痕	—	—	—	指頭圧痕	—	—	—	—		

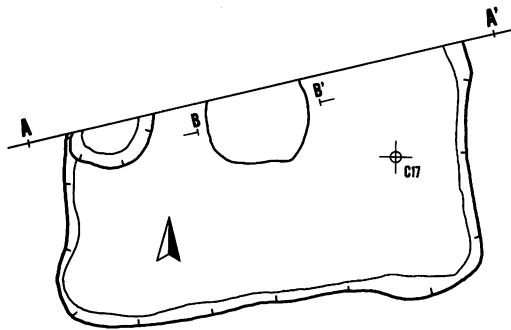
() 推定値

第17図 第4号竪穴住居跡・出土遺物(1)

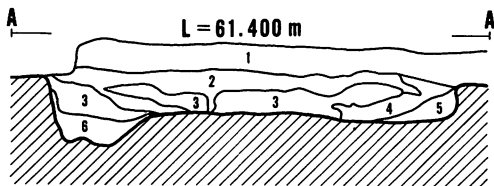


番号	器種	層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	石質	備考
59	擦石	P 2 埋土	147	37	50	356	砂岩	
60	砥石	P 4 埋土	114	53	16	209	凝灰岩	

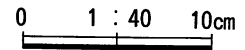
第4号竪穴住居跡出土遺物(2)



1. 5YR4/6赤褐色焼土に7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトが混入 炭化物粒含
2. 7.5YR5/6明褐色粘土 しまる

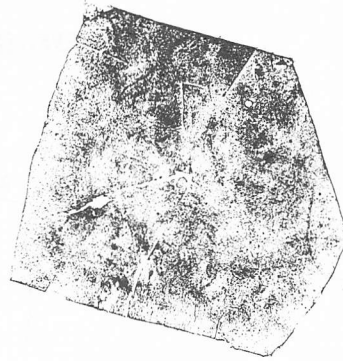
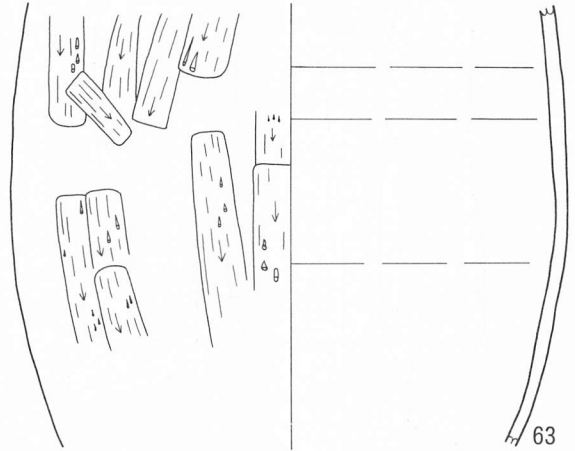
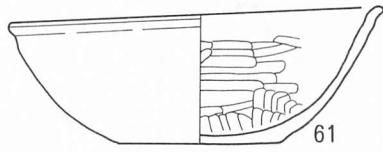


1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト 耕作土
2. 5YR1.7/1黒色シルトに7.5YR4/3(40%)・4/4褐色粘土(10%)が塊状混入 しまりわるい 炭化物粒含
3. 5YR1.7/1黒色シルトに7.5YR4/3(15%)・4/4褐色粘土(15%)混入 しまりわるい
4. 7.5YR4/3褐色粘土に4/4褐色粘土(15%)が塊状混入 土器片含
5. 5YR1.7/1黒色シルトに7.5YR4/3褐色粘土(30%)が塊状混入
6. 7.5YR4/4褐色粘土に5YR1.7/1黒色シルトが混入 しまりわるい



第5号竪穴住居跡

第18図 第4号竪穴住居跡出土遺物(2)・第5号住居跡



(単位: cm) 0 1 : 3 10cm

番号	出土地点	種別	器種	外 面 調 整				内 面 調 整				内黒	口径	底径	器高	分類	備 考
				口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	底 部						
61	埋土	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	○	14.5	6.5	5.5	II b	
62	埋土上部	土師器	坏	—	—	ロクロ	回転糸切	—	—	ロクロ	ロクロ	—	—	(7)	—	II a	
63	埋土	土師器	甕	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	—	ロクロ	ロクロ	—	—	—	—	—	II	
64	埋土上部	須恵器	甕	—	平行縄目叩き目	—	—	—	指あて痕	—	—	—	—	—	—		

() 推定値

第19図 第5号竪穴住居跡出土遺物

えられる。

<壁・床>地山の褐色粘土層を掘り込んで構築されている。床はほぼ水平で、壁はやや急激に立ち上がっている。各壁中央部の壁高の残存値は、東壁22cm、西壁25cm、南壁27cmである。

<柱穴>検出されなかった。

<炉> 中央とみられる床面に地床炉1基を検出した。調査区外に延びるため全貌を把握できないが、規模は55cmの円形を呈するとみられる。赤褐色焼土が主体で炭化物片を混入する。焼土の厚さは最大8cm、炭化物片は最大5cm長である。

<付属施設>地床炉の西側に土坑を検出した。調査区外に延びるため全貌を把握できないが、規模は40cm、深さ16cmの楕円形状を呈するとみられる。褐色粘土に黒色粘土質シルトが混合し、しまりがわるい。遺物は出土していない。

遺物（第19図、写真図版16）

出土遺物には土師器坏・甕・須恵器甕がある。土師器坏(61・62)、須恵器甕(64)は投げ捨てられたとみられる焼土とともに東南隅付近で出土した。

<所属時期> 出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第6号住居跡

遺構（第20図、写真図版7）

<検出状況・重複関係>調査区東端のc18区に位置し、一部調査区外に延びる。I層の耕作土を除去し、IV層（地山）上面で検出した。

<形状・規模>調査区内の形状でみると、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向は東西とみられ、規模は東西が2.0m以上、南北は2.2mである。

<埋土>6層に区分された。全体に黒褐色～黒色粘土質シルトと明褐色粘土の混合土で、後者は塊状に混入する。人為堆積と考えられる。

<壁・床>地山の褐色粘土層を掘り込んで構築されている。地床炉より東側は掘り方面とみられ、さらに30cm掘り下げられているため、床は東に向かって階段状に下がっており、その上に貼り床がされている。壁はやや急激に立ち上がっている。各壁中央部の残存値は、西壁49cm、北壁43cm、南壁41cmである。

<柱穴> 5基検出された。その中で規模・配置などから、p4が主柱穴と考えられる。

<炉>住居中央から西よりに地床炉1基検出した。規模は60cm×55cmで不整な形をしている。焼土の厚さは8cmである。

遺物（第20図、写真図版16）

出土遺物には土師器・須恵器がある。これらは埋土中部～下部から出土しており、いずれにおいても出土状況に規則性はみられなかった。土師器は甕の胴部上半～口縁部と底部、須恵器は坏の破片が出土している。

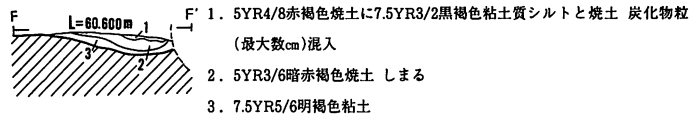
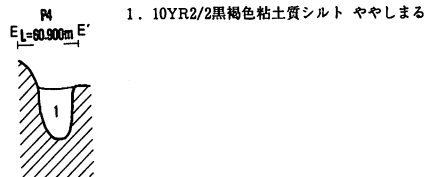
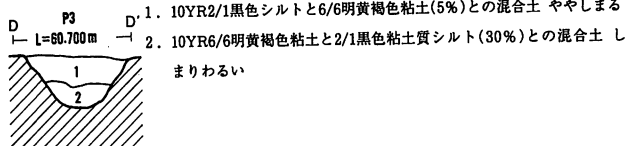
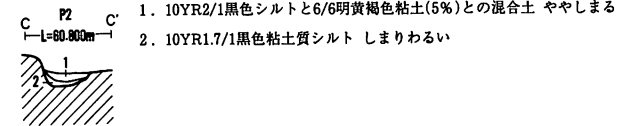
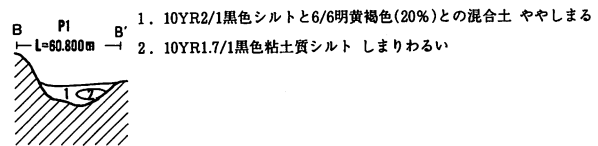
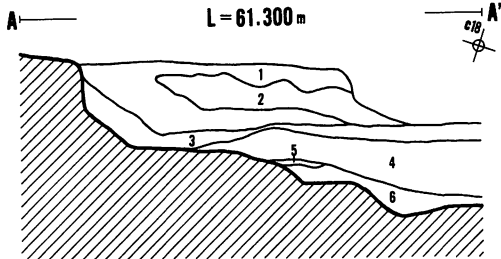
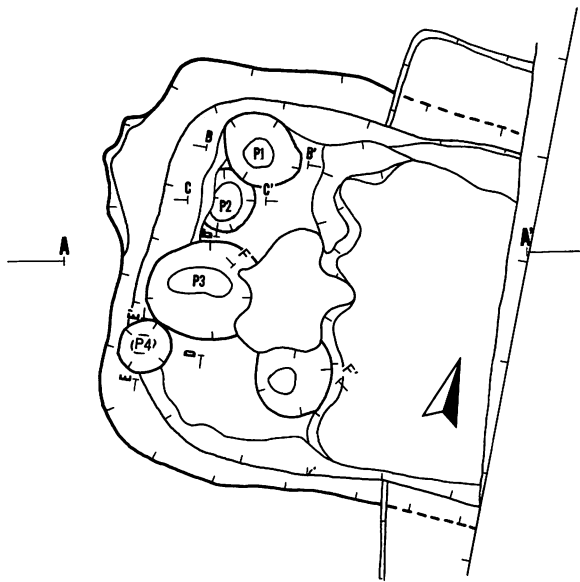
<所属時期> 出土遺物より9世紀後半と考えられる。

2 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構

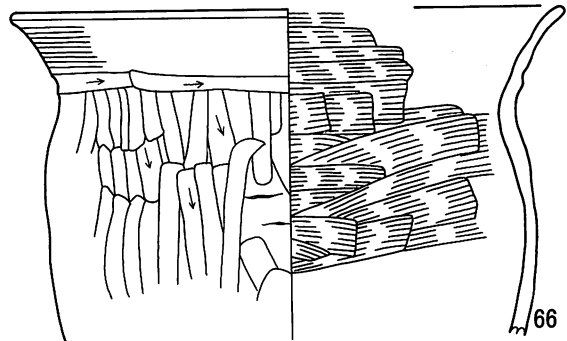
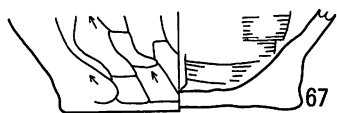
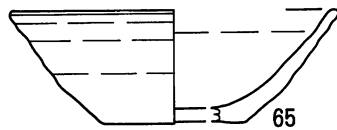
遺構（第21図、写真図版8）

<検出状況・重複関係> d5区に位置し一部調査区外に延びる。II層の盛土を除去したⅢc層上面で検出した。



1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト しまりわるい
2. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトと5/6明褐色粘土(30%)との混合土 2.5YR4/6赤褐色焼土塊(最大数cm)が少量混入 土器片含
3. 7.5YR2/2黒色粘土質シルトに7.5YR4/6褐色粘土が斑点状に少量混入(最大数cm) しまりわるい
4. 7.5YR5/6明褐色粘土と2/1黒色粘土質シルト(20%)との混合土 しまりわるい
5. 5YR4/8赤褐色焼土と7.5YR6/6橙色粘土(50%)との混合土
6. 7.5YR6/6橙色粘土と3/2黒褐色粘土質シルト(20%)との混合土

0 1 : 20 1 m



0 1 : 3 10cm

(単位: cm)

番号	出土地点	種別	器種	外面調整				内面調整				内黒	口径	底径	器高	分類	備考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
36	堀土	土師器	甕	ナデ	ヘラケズリ	—	—	ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—	—	—	I	
37	堀土	土師器	甕	—	—	ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	—	—	ヘラナデ	ナデ	—	—	9.3	I		
38	堀土	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(13)	(5)	4.8	a		

() 推定値

第20図 第6号竪穴住居跡・出土遺物

<形状・規模> 調査区内の形状でみると、楕円形状を呈し、南北方向に主軸を持つと考えられる。規模は東西が1.6m以上、南北は2.1mである。

<埋土>4層に区分された。黒色粘土質シルトが主体で、下部は褐色粘土を混入する。自然堆積と考えられる。

<壁・床>地山の褐色粘土層を掘り込んで構築されている。床面はほぼ平坦である。

遺物（第21図、写真図版17）

床面から板状の凹石（69）と棒状の砥石（68）が出土した。

<所属時期> 出土遺物や遺構の構造から時期は特定できなかった。

3 土坑

第1号土坑

遺構（第21図、写真図版8）

<検出状況・重複関係> d18区に位置し、第6号住居跡に隣接する。I層耕作土を除去し、IV層で検出した。

<形状・規模>平面形は円形を呈し、規模は85cm×80cm、深さは22cmである。壁は東西でその傾斜が異なり、東側が比較的緩やかに立ち上がる。

<埋土>2層に区分される。II層は黒褐色粘土質シルトに暗赤褐色の焼土塊と炭化物が混入する。

遺物（第21図、写真図版17）

土師器・須恵器の坏破片と土師器の甕破片がII層から出土している。坏はロクロで整形され、口縁部が外反する。土師器坏は内黒である。

<所属時期>出土遺物から9世紀後半と考えられる。

4 溝跡

第1号溝跡

遺構（第22図、写真図版9）

<検出状況・重複関係>調査区東側のe13・d14・c14区に跨って位置する。表土が薄く、I層耕作土を除去したIV層（地山）で検出した。北端部で第4号住居跡と重複しており、第4号住居跡を掘りこんでいる。調査以前に耕作等の攪乱により南端部は消失していたが、北北東—南南西方向に延びており、全長9mにわたり検出された。

<規模>上端幅は40～55cm、下端幅は25～35cm、深さは11～23cmで、横断面形はU字状を呈し、壁は外形ぎみに立ちあがる。両端部の高低差は6cm程度で、南側に低くなっている。

<埋土>2層に区分され、下部ほど地山起源の暗褐色粘土の割合が大きくなる。

遺物（第22図、写真図版17）

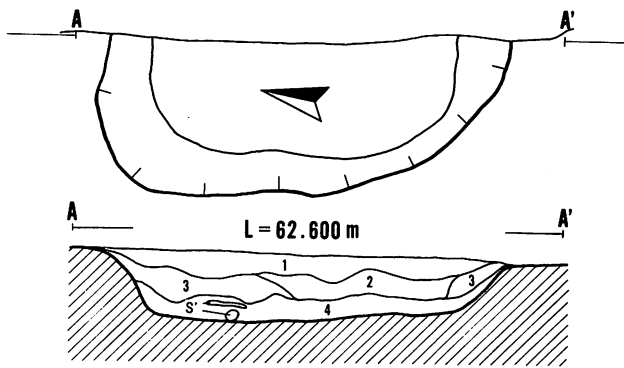
土師器・須恵器の破片が出土している。坏はロクロで整形され、内黒である。

<所属時期>出土遺物や溝の構造から時代を特定できない。

第2号溝跡

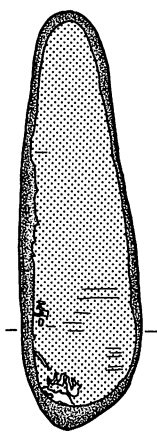
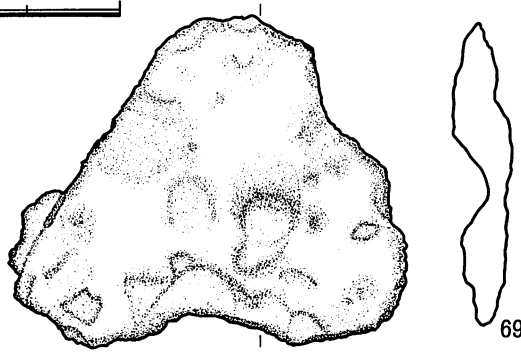
遺構（第22図、写真図版10）

<検出状況・重複関係>調査区中央付近のf6・e7区に位置している。西側に傾斜する斜面上面で検出された



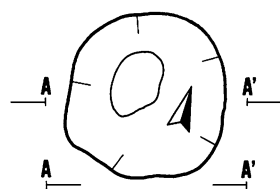
- 1 7.5YR2/2黒褐色シルト
- 2 7.5YR2/2黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色粘土(10%)と7.5YR3/3明褐色粘土(10%)が塊状(径数cm)に混入
- 3 5YR1.7/1黒色粘土質シルト
- 4 5YR2/1黒褐色粘土質シルトに7.5YR3/3暗褐色粘土(10%)が塊状(径1cm)に混入

0 1 : 4 1 m



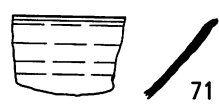
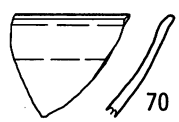
0 1 : 3 10 cm

番号	器種	層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	石質	備考
68	砥石	埋土	166	47	46	347	凝灰岩	
69	凹石	埋土	163	208	30	854	凝灰角礫岩	68とセットで出土



- 1 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト
- 2 7.5YR3/2黒褐色粘土質シルトに5YR3/4暗赤褐色
焼土混入 炭化物粒・土器片含

0 1 : 4 1 m

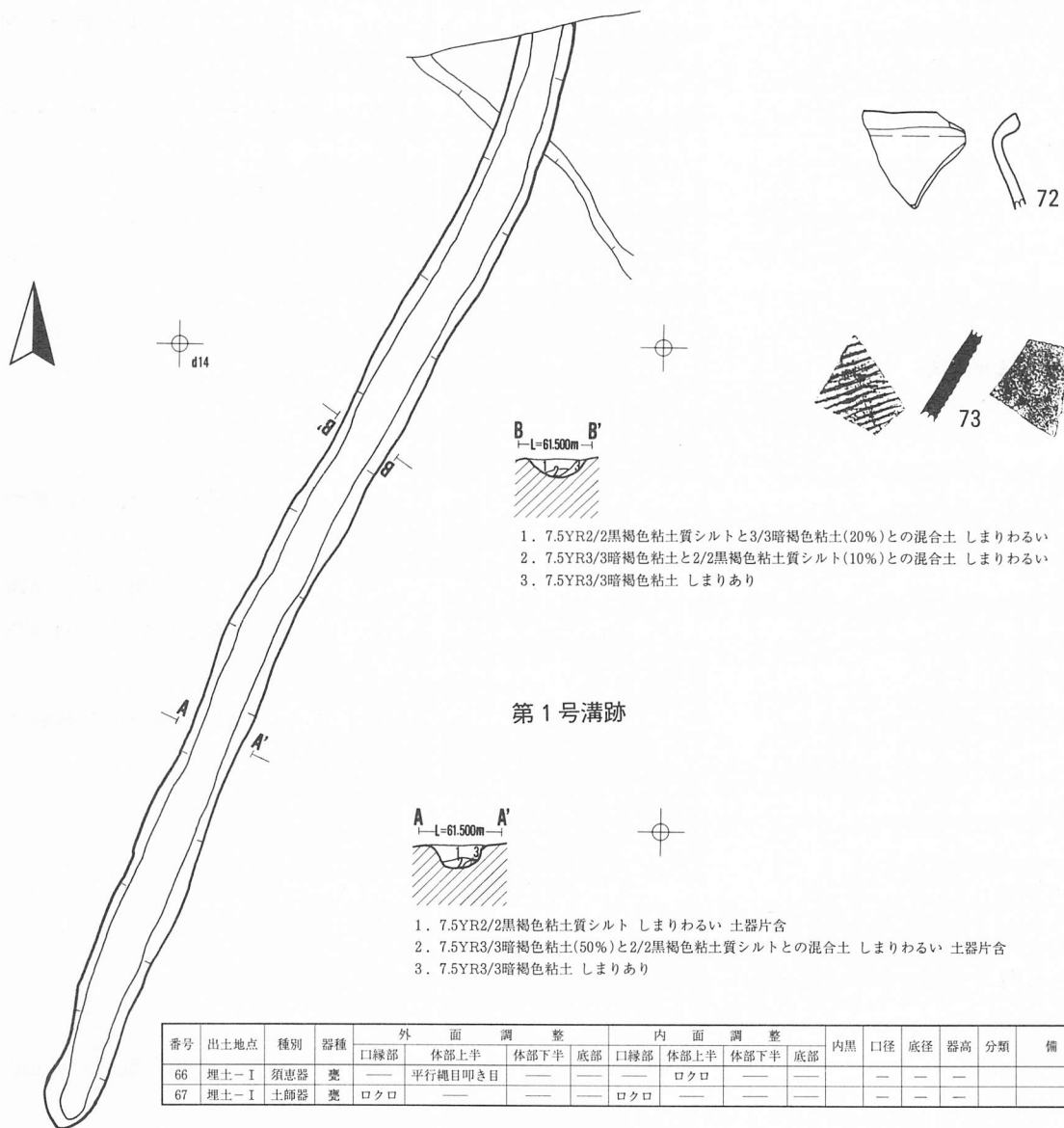


0 1 : 3 10 cm
(単位: cm)

番号	出土地点	種別	器種	外面調整				内面調整				内黒	口径	底径	器高	分類	備考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
70	埋土-Ⅱ	土師器	坏	ロクロ	—	—	—	ロクロ	—	—	—	—	(13)	—	—	—	
71	埋土-Ⅱ	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	—	—	ロクロ	ロクロ	—	—	—	(13)	—	—	b	

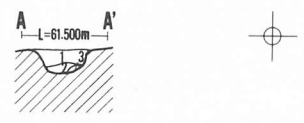
() 推定値

第21図 第1号竪穴状遺構・第1号土坑・出土遺物



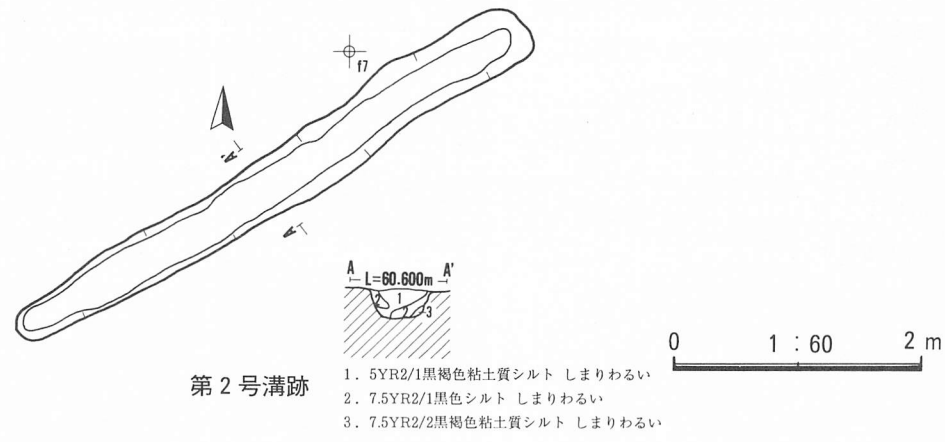
1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトと3/3暗褐色粘土(20%)との混合土 しまりわるい
2. 7.5YR3/3暗褐色粘土と2/2黒褐色粘土質シルト(10%)との混合土 しまりわるい
3. 7.5YR3/3暗褐色粘土 しまりあり

第1号溝跡



1. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト しまりわるい 土器片含
2. 7.5YR3/3暗褐色粘土(50%)と2/2黒褐色粘土質シルトとの混合土 しまりわるい 土器片含
3. 7.5YR3/3暗褐色粘土 しまりあり

番号	出土地点	種別	器種	外 面 調 整				内 面 調 整				内黒	口径	底径	器高	分類	備 考
				口縁部	体部上半	体部下半	底部	口縁部	体部上半	体部下半	底部						
66	埋土-I	須恵器	甕	—	平行縄目叩き目	—	—	—	—	ロクロ	—	—	—	—	—	—	—
67	埋土-I	土師器	甕	ロクロ	—	—	—	—	—	ロクロ	—	—	—	—	—	—	—



1. 5YR2/1黒褐色粘土質シルト しまりわるい
2. 7.5YR2/1黒色シルト しまりわるい
3. 7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト しまりわるい

第22図 第1号溝跡・第2号溝跡・出土遺物

ため、表土が厚く最大60cm掘り下げたⅣ層上面で検出した。第2号住居跡に隣接している。北東—南西方向に延びており、全長4mにわたり検出された。

<規模>上端幅は40～50cm、下端幅は25～35cm、深さは18～29cmで、横断面形はU字状を呈し、壁は外形ぎみに立ち上がる。両端部の高低差は斜面上にあるため29cmと大きく、西側が低くなっている。

<埋土>3層に区分され、黒褐色～黒色粘土質シルトよりなる。

遺物 出土していない。

<所属時期>1号溝と規模・方向性が似ているが、不明である。

5 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

遺構（第23図、写真図版11）

<位置・検出状況>調査区西端のd2区に位置する。Ⅲa層上面で検出した柱穴群を削り取った後、Ⅲb層で検出した。

<規模・方向>桁行2間、梁行1間の南北棟である。建物総長は桁行3.18m・梁行1.70mで、柱間は桁行が西側柱列で北から1.60m・1.58m、梁行が両妻とも1.70mである。建物の方向はN-20°—Eである。p204の位置を考えるとp203の南側の調査区外にさらに柱穴が存在する可能性もある。

<掘り方・柱痕>掘り方の規模は径40～14cm、深さ5～15cmを測り、平面形は円形ないし楕円形を基調とする。柱痕はいずれの柱穴からも検出されない。

<埋土>黒褐色シルト質土で構成され、含水比が高く、しまりが悪い。

遺物 P203から土師器甕の小破片が出土している。

<所属時期>柱穴から出土した小破片では時期を特定しがたく、詳細は不明である。

6 柱穴群

遺構（第24図、写真図版11）

<位置・検出状況>調査区西端の凹地形に位置し、d2～d4・e2～e4区にあたる。耕作土を剥ぎ取ったⅡa層上面で検出した。

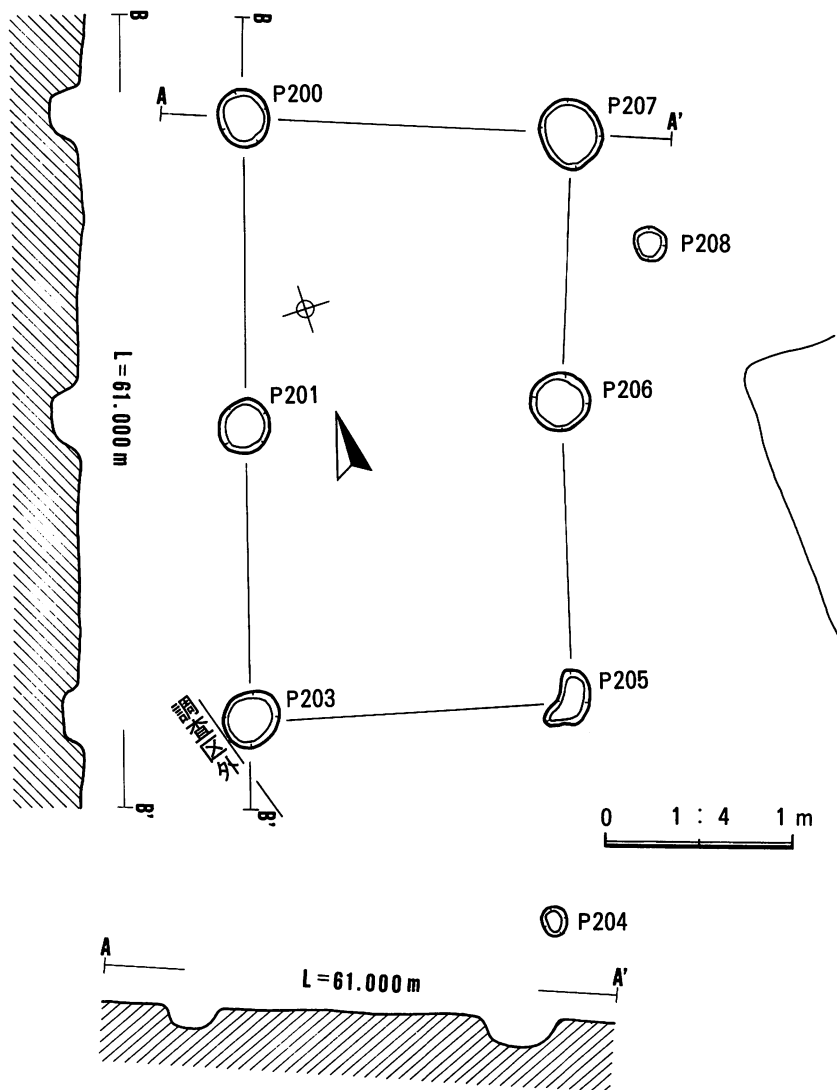
<規模・方向>2群に分かれ、北側の柱穴群はS-86°—W方向に、南側の柱穴群はN-78°—W方向に並んでいる。掘り方の規模は径8～36cm、深さは2～30cmを測る。全104基中75%が深さ9～18cmに集中する。深さと柱穴群の並びには相関性はみられない。平面形は円形ないし楕円形を基調とする。

<埋土>黒褐色シルト質粘土で構成され、しまりがわるい。

遺物（第24図、写真図版17）

遺物はP9、P67(75)、P77(74)、P78、P117から土師器や須恵器の破片が、P119からは縄文中期と見られる土器片が出土している。

<所属時期>出土遺物は2次的なものと考えられ、検出層位から考えて近代～現代のものと思われる。

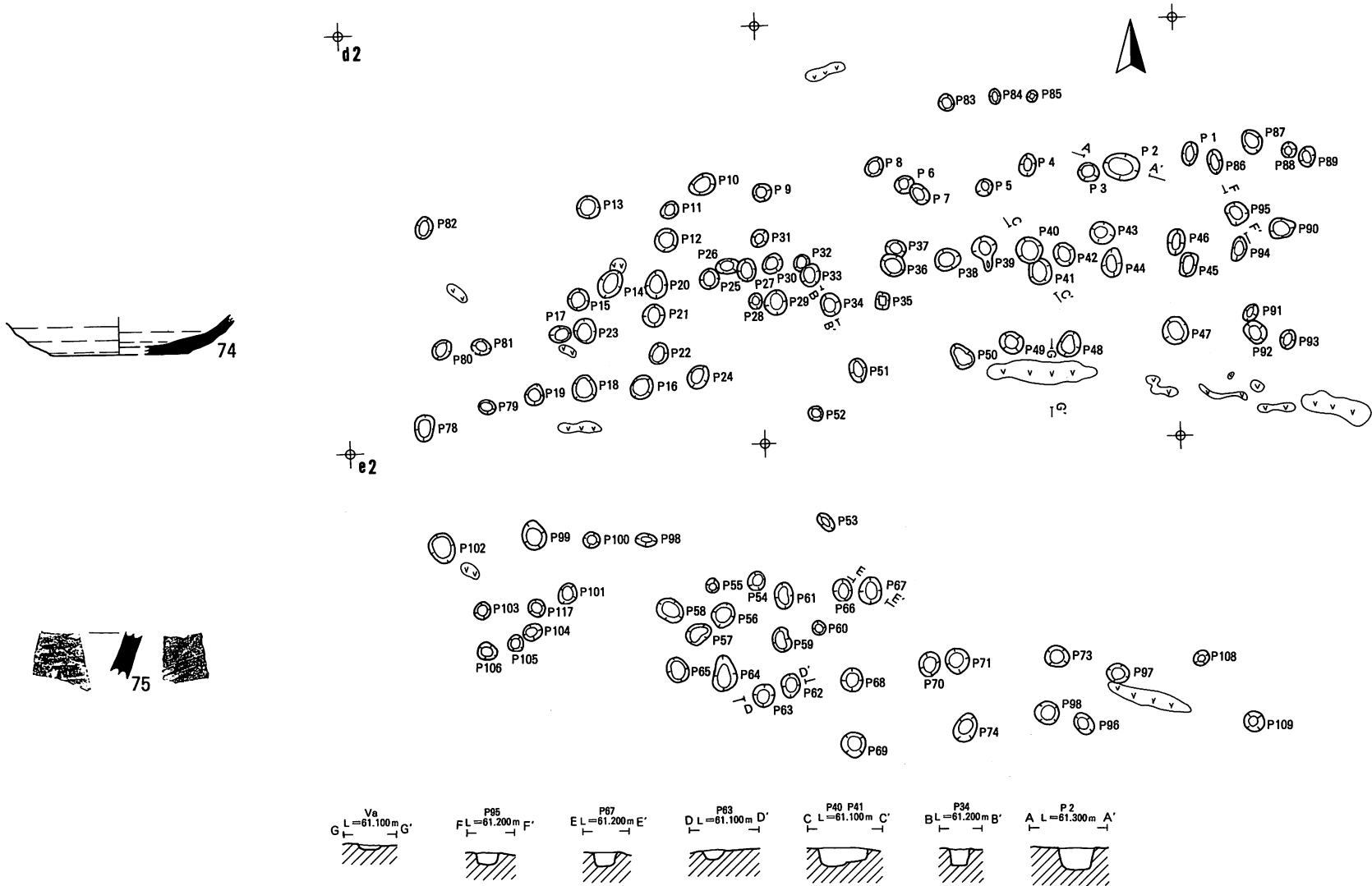


柱穴No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 200	30	26	15
P 201	30	30	11
P 203	34	34	10
P 204	14	14	10
P 205	30	16	13
P 206	36	33	6
P 207	40	36	12
P 208	16	16	5

第3表 柱穴規模一覧表

第23図 第1号掘立柱建物跡

第24図 柱穴群・出土遺物



番号	出土地点	種別	器種	外 面 調 整				内 面 調 整				内黒	口径	底径	器高	分類	備 考
				口縁部	体部上半	体部下半	底 部	口縁部	体部上半	体部下半	底 部						
74	P77埋土	須恵器	坏	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
75	P67埋土	須恵器	甕	—	ロクロ	—	—	—	ロクロ	—	—	—	—	—	—		

7.5YR2/2黒褐色シルト質粘土
しまりわるい 高含水比

0 1 : 60 10cm

番号	長径 (m)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (m)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	24	19	24	53	20	13	8
2	36	30	24	54	19	16	6
3	19	16	14	55	13	12	10
4	22	16	18	56	26	19	10
5	16	13	14	57	25	19	16
6	29	18	18	58	26	20	20
7	21	20	16	59	22	22	14
8	23	17	17	60	12	12	9
9	19	17	11	61	24	14	13
10	23	20	11	62	20	17	14
11	16	15	10	63	24	22	11
12	24	22	10	64	30	23	22
13	22	20	10	65	30	21	18
14	27	26	12	66	20	20	12
15	20	19	9	67	24	22	15
16	22	21	20	68	23	20	17
17	19	13	11	69	23	20	15
18	24	23	13	70	24	20	17
19	19	19	11	71	24	23	16
20	26	21	12	72	21	19	17
21	21	21	14	73	22	21	21
22	22	20	10	74	25	23	14
23	22	22	10	78	24	23	13
24	22	20	22	79	17	11	9
25	22	20	10	80	20	17	13
26	19	14	11	81	17	12	11
27	23	17	9	82	19	14	7
28	15	12	9	83	14	13	12
29	23	22	23	84	14	10	7
30	17	16	10	85	10	8	8
31	17	13	11	86	24	16	15
32	15	14	14	87	22	20	18
33	20	20	24	88	17	16	11
34	20	20	18	89	20	18	13
35	16	14	6	90	26	14	16
36	24	20	19	91	18	16	12
37	23	19	13	92	15	12	15
38	21	20	30	93	23	21	17
39	25	20	16	94	22	17	18
40	23	23	27	95	24	20	24
41	26	21	13	96	21	17	2
42	23	20	18	97	20	17	4
43	25	23	15	98	14	13	8
44	29	19	14	99	21	20	6
45	28	17	14	100	20	15	12
46	26	18	20	101	17	16	10
47	28	28	21	102	25	22	16
48	24	21	13	103	17	15	10
49	23	19	16	104	20	14	12
50	29	23	28	105	15	12	9
51	22	20	16	106	16	14	5
52	15	13	9	117	16	15	19

第4表 柱穴群規模表

V. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土器・石器のみである。遺物の取り上げはグリット一括で行った。出土した場所は遺構が検出された地区が主で、遺構の存在しない部分では縄文時代の破片が散在した。出土層位は調査区東側では埋土が薄く耕作土のⅠ層、それ以外ではⅢc層である。

(1) 縄文土器 (第25図、写真図版17)

77、85は胎土に繊維を含み、LRLの原体で施文されている。77は口縁部で、口唇部は同一原体で斜め方向から圧痕し、小波状となっている。ともに胎土に石英粒を含む粗砂質で、器厚は8mmである。76は外側が肥厚するように口唇が先細る。肥厚部分下に縦2本の粘土紐を貼りつけ(単位数不明)、肥厚部分にLRの縄文が施され、縦位2本の粘土紐貼りつけ部分を除いて横位の沈線が走る。78は全体的に脆くなっている。内側が肥厚し、口唇部は指圧で小波状になっている。82は両端に結節をつくるLRを縦方向に連続回転施文したものである。83は粘土紐を縦方向に波状に貼付したものである。84は全体的に脆い。RLの原体で施文されている。胎土は82のみが細砂質で他は粗砂質である。83以外石英粒を含む。器厚は、それぞれ7, 8, 7, 6, 14mmである。80は外面に外径3mmの竹管状の道具で斜め下から刺突を加えたもので、突起の天頂には楕円形状中空管で刺突を加えている。79は無文で山形突起を持つ。頸部内面に1条の沈線が施される。器厚はそれぞれ6, 4mmである。86はミニチュア土器の底部で外面がほとんど剥離している。胎土は粗砂質である。

以上の縄文土器は77、85は胎土に繊維を含むことから前期初頭に、76、78、82、83、84は小波状口縁、両端結節の縦位連続施文、縦位の粘土紐貼付などから中期の大木7式に、80は後期に、79は晩期の大洞C₂式に相当すると考えられる。

(2) 平安時代の土器 (第25図、写真図版17)

平安時代の土器は遺構のある区画を中心に少量出土しており、時期的にはほとんどが同時期に属すると思われる。

いずれも須恵器甕の破片で、粗掘で出土している。3片とも無文で、ロクロ痕がみられる。87は頸部付近に楔状の小さな穴が横位に並んでいる。89は内面に指頭痕が残っている。88の外面はにぶい赤褐色を呈する。

(3) 石器

遺構外から出土した石器は、石匙、石筥などの剥片石器と、砥石などの礫石器である。不定形石器や調整の明瞭でないもののいくつかは省略したものがある。以下に記述する各石器は縄文時代と平安時代の両時代に含まれていると考えられるが、器形の上からは区別がつきにくく一括して扱った。

石匙 (第26図90~92、写真図版18)

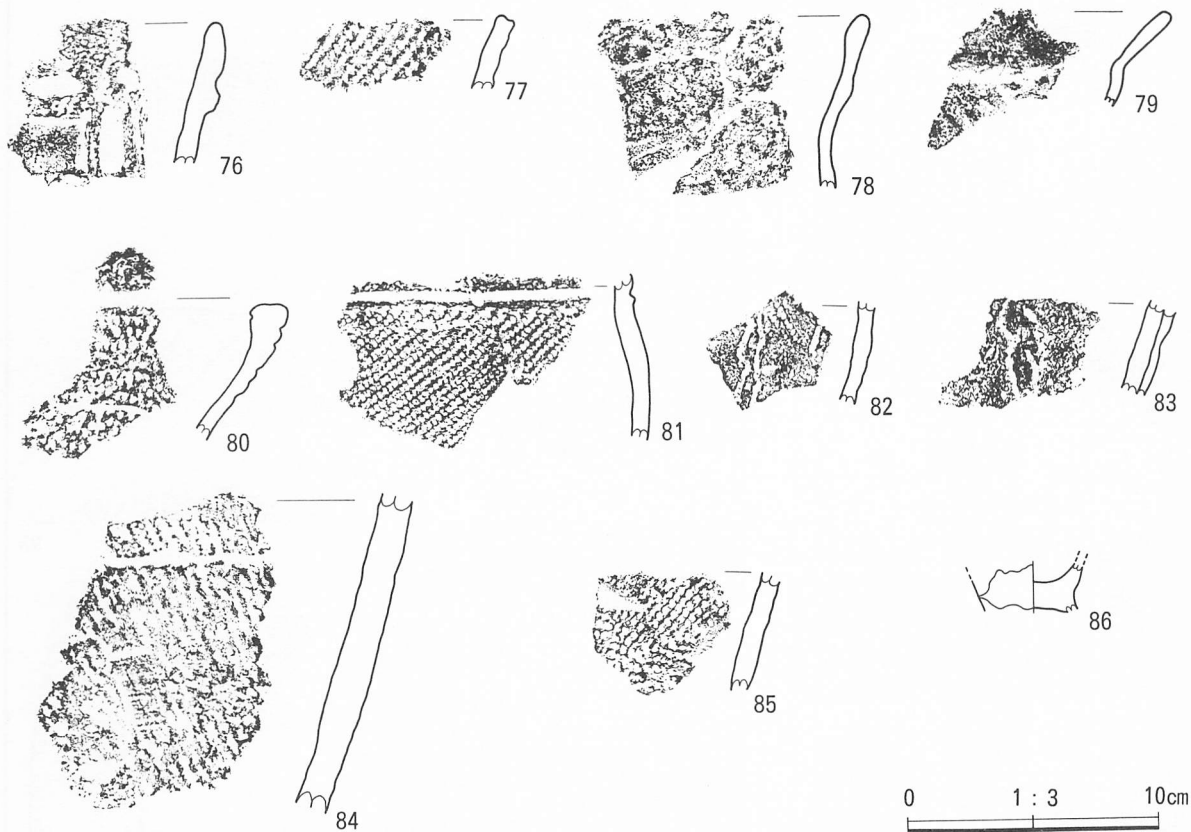
完形品2点と破片1点のあわせて3点出土した。90、91は縄文土器の出土した地点からで、92は平安時代の遺構を検出した東端からの出土である。3点とも縦長で、先端部は90、92が尖頭状で91は平坦である。92は先端部だけである。

石筥 (第26図93~94、写真図版18)

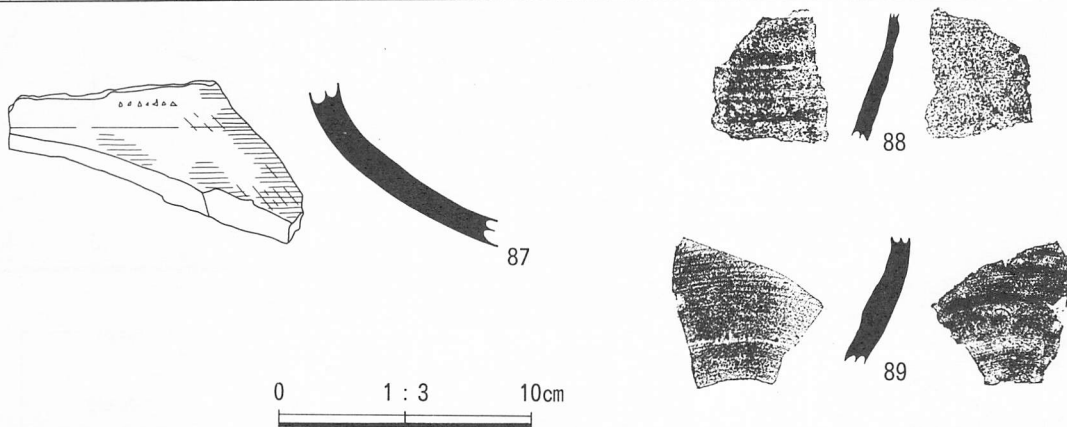
完形品1点と破損品1点の計2点出土した。93は1辺が膨らむ不整な二等辺三角形状で、両面調整である。94は頭部が欠損している。片面調整である。

不定形石器 (第26図95、写真図版18)

不定形な剥片の片面または両面の一部に調整を加えた石器である。95は1縁辺に刃部があり、両面に調整が

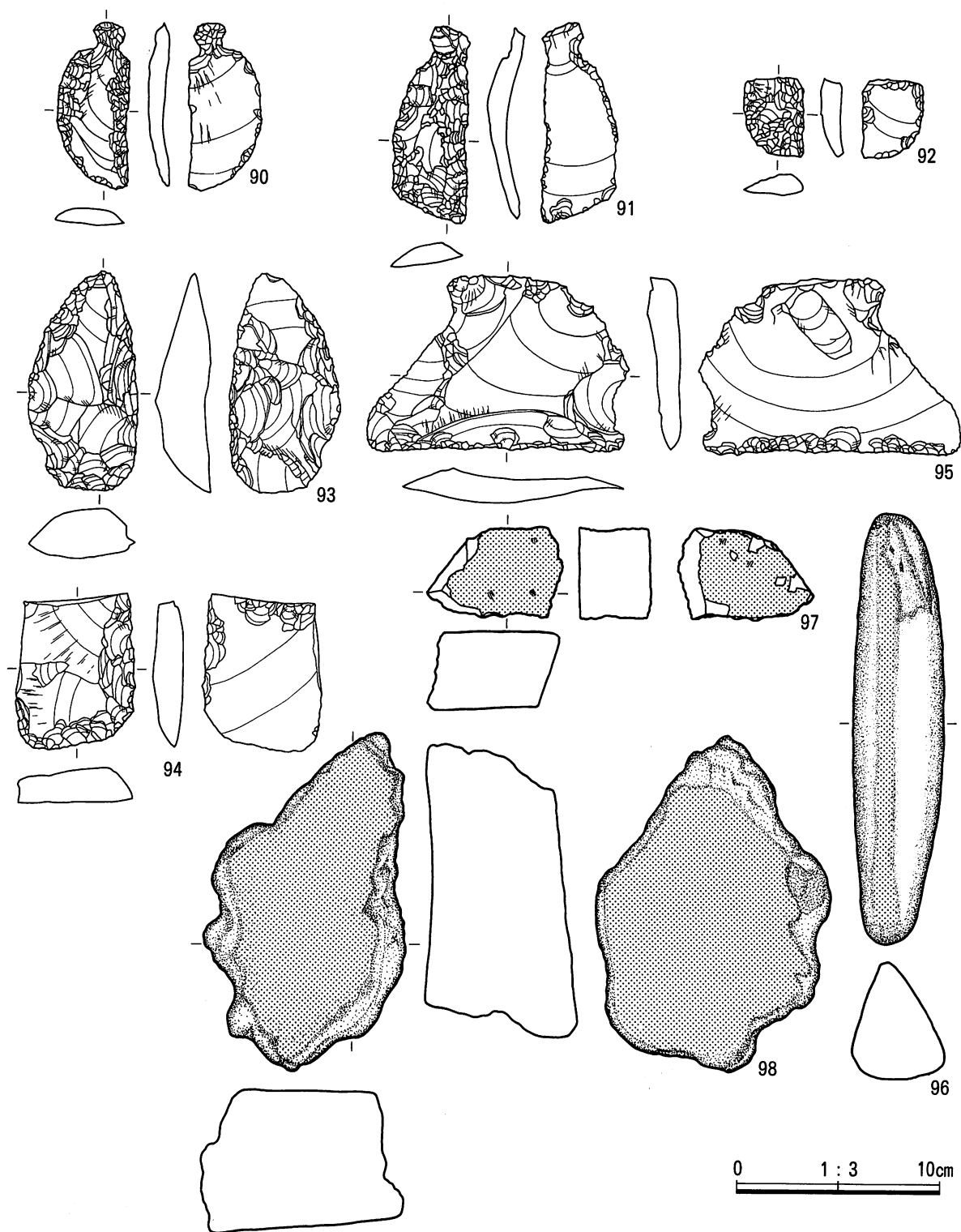


番号	出土地点	器種	部位	外面文様	地文	口唇装飾	内面調整	分類	備考
76	c 2区・IV層	深鉢	口縁	口縁が肥厚し、横位の沈線が走る。体部に2本の粘土紐			ナデ		
77	c 3区・IV層	深鉢	口縁		LRL	原体の圧痕文	ナデ		胎土に繊維含
78	e 4区・IV層	深鉢	口縁			小波状	ナデ		
79	c 4区・IV層	深鉢	口縁			山形突起	ナデ		
80	e 4区・IV層	深鉢	口縁	突起		天頂に突起をもつ突起	ナデ		
81	c 17区・粗掘	深鉢	胴	頸部に沈線	LR		ナデ		
82	d 1区・IV層	深鉢	胴	両端結節LRの縦位連続施文			ナデ		
83	c 1区・IV層	深鉢	胴	縦位に粘土紐貼り付け	LR		ナデ		
84	e 4区・IV層	深鉢	胴		RL?		ナデ		
85	d 11区・IV層	深鉢	胴		LRL		ナデ		胎土に繊維含
86	e 4区・IV層	ミニチュア	底						



番号	出土地点	種別	器種	調整	色調	分類	備考
87	e 9区・粗掘	須恵器	甕	頸部に楔状痕	2.5Y7/1灰白		
88	e 9区・粗掘	須恵器	甕	外面：ロクロ 内面：ロクロ	5B6/1青灰		
89	e 9区・粗掘	須恵器	甕	外面：ロクロ 内面：ロクロ	5YR5/4にぶい赤褐色		

第25図 遺構外出土遺物(1)



番号	出土地点	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
90	f 4区・捨土	石匙	54	24	7	6.96	頁岩	
91	d 2区・IV層	石匙	64	25	12	11.5	頁岩	
92	c 18区・IV層	石匙	(26)	20	8	3.71	頁岩	基部欠損
93	d 12区・IV層	石篋	71	36	18	40.2	頁岩	
94	d 9区・IV層	石篋	(50)	39	11	24.4	頁岩	基部欠損
95	e 11区・IV層	不定形	58	86	11	43.5	頁岩	
96	d 12区・IV層	砥石	192	45	59	634	凝灰岩	
97	e 3区・IV層	砥石	44	62	35	149	砂岩	
98	e 11区・IV層	砥石	175	118	88	2,231	安山岩	

※ () 残存部長

第26図 遺構外出土遺物(2)

加えられている。

砥石（第26図96～98、写真図版18）

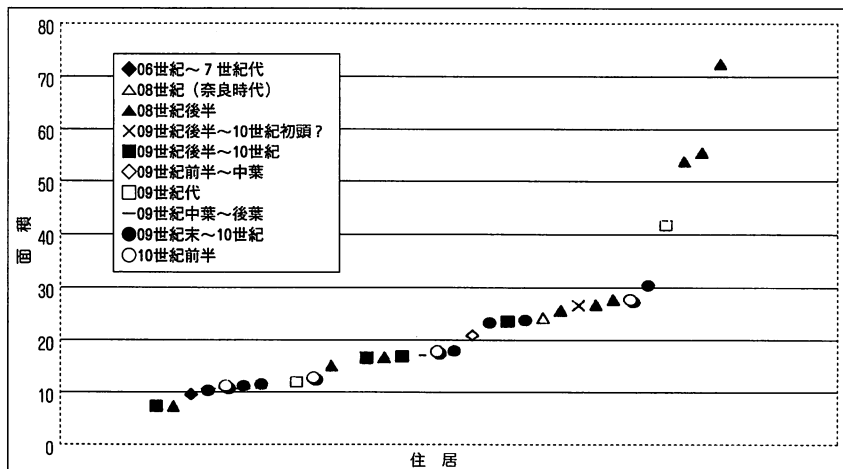
3点出土した。96は表側の一部が焦げたように黒くなっている。96は断面が三角形状で、頂角の稜線を利用している。

Ⅵ 考 察

（1）遺構

① 竪穴住居跡

中居俵Ⅱ遺跡で検出された住居跡は6棟で、規模は大きいものより東西7.38m×南北2.5m以上、東西5.75m×南北6.1m、東西5.6m×南北2.0m以上、東西5.3m×南北1.8m以上、東西2.0m以上×南北2.2m、東西2.1m×南北1.1m以上である。ほとんどの住居跡が調査区外に延びるため正確な規模は不明である。仮に長辺から面積を算出すると、54.5㎡、33.1㎡、31.4㎡、28.1㎡、4.8㎡、4.4㎡となる。伊藤博幸（1998）は「竪穴住居の規模と構成の変遷」の中で住居の面積によって、特小5.0～10.5㎡、小～23㎡、中小23.5～33.9㎡、中34.0～49.0㎡、大～62.4㎡、特大63.0～99.0㎡と区分しており、これによるとそれぞれ大・中小・中小・中小・特小に区分される。北上市内の牡丹畑遺跡、藤沢遺跡、八幡遺跡、金成Ⅰ遺跡、大谷地遺跡、高橋遺跡、堀ノ内遺跡、野田Ⅱ遺跡の住居跡で、面積規模を算出できる34棟を構築時期にかかわらず面積で並べてみると、約30㎡までは階段状の並びになる。これは少なくとも3つの規模に集中することを意味している。単純平均では約11㎡、16㎡、約25㎡となる。これらの規模は時期を問わず多く利用される規模と考えられる。また、時期と規模の関係をみると、8世紀後半に構築された住居(▲)ほど大型住居が多くなる傾向にあり、9世紀～10世紀(×・■・◇・□・-・●・○)では30㎡までの特小～中小に平均的に分布する。これは新しくなるにつれて規模が縮小化傾向にあるとみることができ。したがって、本遺跡の住居群がほぼ同時期に構築されたと考え類推すると、大型・中小型住居跡は8世紀後半的な住居規模分布に近いと考えられる。次に最小単位の住居規模についてふれる。特小と区分される住居は一辺に直すと2.24m～3.24m四方の正方形住居となる。本遺跡の特小と区分した住居は正方形住居に直すと一辺が2.10mと2.20mとなり、伊藤の区分した規模より小



第27図 住居面積

さいが、特小と見なした。形態でみると、住居にはカマドがなく、床面中央付近に地床炉をそなえている。古代住居の一般的な構造からはずれてはいるが、住居内施設構成としては問題がなく、季節による住み分けや集落社会での身分的な住み分けなども考えることができるので住居としている。他の遺跡の例を見ると、金

成I遺跡では一辺が1.2m～4.1mの遺構を住居状遺構とし、中には地床炉を伴ったものもある(9世紀後半～10世紀)。高橋遺跡では炉を伴わない2m四方の方形のものを土坑としている(10世紀前)。牡丹畑遺跡では一辺が0.8m～3.5mの方形遺構を住居状として検出している(8世紀後半、9世紀代)。唐戸崎遺跡では焼土を伴う1.7m×1.5mの方形のものを土坑としている(9世紀中頃～第三四半期)。このように各時期で住居に伴って小規模な方形遺構が存在することから、性格ははっきりしないものの、各時期で一般的な集落内施設として存在している。

住居内のカマドの位置と時期の傾向を集計してみると、8世紀後半は北壁中央に、9世紀後半～10世紀は東壁北寄りに位置することが多い。したがって、本遺跡の住居は8世紀後半的なつくりを持っていることがわかる。

② 竪穴状遺構

縄文土器片が出土する西側の凹地区で検出した。南北規模から推測すると1/2以上が調査区外に延びる。小型住居跡と同じような規模を持つが、焼土等を検出できなかったため住居状遺構とした。時期を決定できる遺物が出土していないので所属時期は不明である。

③ 土坑

II層目の埋土に炭化物粒や焼土塊(径数cm)が少量の土師器坏小片と混入していた。カマド状遺構の可能性も考えたが、地山付近の焼成の状況を確認できなかったため土坑としている。時期は住居と同じ9世紀後半頃と考えている。

④ 溝跡

2条検出された。1号溝跡は重複関係から4号住居跡より新しい時期の遺構である。2号溝跡は2号住居跡の西側斜面を下るように造られている。斜面上方向の延長部分は地山では検出できず、ここを起点としているものか、上位層に構築されたのち攪乱を受けたのかは判断できない。1号溝跡から土師器や須恵器の破片が出土しているが、流れ込み等も考えられるので、詳細な時期は不明である。また、2条の溝の関係や住居跡との関係も不明である。

⑤ 掘立柱建物跡

柱穴群検出面の下面で検出した。桁行の間尺が5.30尺、梁行が5.67尺である。柱穴から土師器甕破片が出土していることを考えると、住居跡と同時期に存在していた可能性もあるが、詳細は不明である。

⑥ 柱穴群

耕作土を剥ぎ取った面で検出した。検出面が非常に軟弱で、降雨後は浸透した水が柱穴に溜まりやすく、形状も崩れやすかった。柱穴の並びに沿って白色の火山灰と見られるものが厚さ約1cmで部分的に検出された。この火山灰は調査区内の他の場所からは検出されず、検出層位からは2次堆積の可能性が大きい。縄文土器片や土師器・須恵器破片が柱穴から出土したが、検出層位や埋土等からは、近代・現代のものと考えられる。

(2) 出土遺物

本遺跡で出土した遺物は大半が平安時代に属すると考えられるので、ここでは土師器・須恵器について考察を行う。考察するにあたり、図示できた土器を中心に整理・分析し、それらの組み合わせや特徴から年代・性格について検討する。出土遺物はほとんどが住居跡より出土している。

① 土器の分類

〔土師器〕

坏・鉢・甕がある。坏・鉢はすべてロクロを使用しているが、甕は破片が多く、非ロクロのものが多い。

<坏> ほぼ完形または器形を推定できるものが6点、口縁部または底部のみの破片が4点出土した。内外面ともにロクロナデによるものが多く、ヘラミガキされた後黒色処理されたものが少量出土している。ヘラミガキは体部下半が放射状ミガキを施している。底部の切り離し技法は確認できるものすべてが回転糸切りである。これらのうち、再調整の認められるものは手持ちヘラケズリであり、6点出土している。主体をしめるのが再調整を施されるものである。これらについて、底部や外面の再調整の違いと器形により次のように分類することができる。

[I類] ロクロ使用で底部または体部下半に手持ちヘラケズリを施す(1,16,17,19,22,23)。6点。

すべて底部から内湾ぎみに立ち上がり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたる。

[II類] ロクロ使用で再調整を施さない(3,61,62)。3点。

A 底部から内湾ぎみに立ち上がり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるもの

B 底部から内湾ぎみに立ち上がり、体部は外傾して口縁部が軽く外反するもの(61)

<鉢>2点出土した。すべてロクロ使用で、底部は回転糸切後手持ちヘラケズリが施されている。

<甕>ほぼ完形のもので2点、口縁部から胴部上半のもので8点、胴部だけのものが2点、胴部下半から底部のもので11点出土した。なお、ほぼ完形のもの以外は器形・胎土・色調など総合的に判断し、同一個体でないことを確認して掲載している。ロクロ使用の有無は口縁部～胴部上半の外面や底部内面のロクロナデ痕で判断できるものが多く、未使用のもので19点出土した。

ロクロ使用の有無で次のように分類することができる。

[I類] ロクロ未使用のもの(5,8,7,6,11,13,12,10,29,24,27,30,31,34,32,9,66,67)。18点。

外面の頸部に段を持つものが2点(29,66)、頸部が括れ、口縁部が外反するものが6点(6,7,8,,27,29,66)、底部が高くなっているもの5点(10,11,12,13,67)で、ロクロ未使用のものに多い。口縁部から胴部に刷毛目を施し、口縁部はその後ナデ調整をしているものが5点(6,7,8,27,29)、体部下半または底部にかけてヘラケズリ調整をしているもの10点(10,11,12,13,24,30,31,32,34,67)、底部に木葉痕を持つもの1点(30)、底面中央に網代痕をもつもの1点(24)である。外面に刷毛目調整をもつものは内面にも施されている。

[II類] ロクロ使用のもの(25,26,28,74)。4点。

頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反するもの3点(25,26,28)、そのうち28は口縁端部が上下両方に引き出され、器高が36cmと長胴甕である。口縁部～体部上半にかけてロクロナデ痕が残り、体部下半から底部にかけてヘラケズリ調整が施される。25は器高が10cmと短胴甕である。底部に回転糸切痕が残る。

〔須恵器〕

坏・甕・壺がある。壺は須恵器のみの出土である。土師器に比べて量は少ない。

<坏> ほぼ完形または器形を推定できるものが4点、口縁部から胴部上半のもので2点、底部片が2点出土した。器面調整は内外面ともロクロナデによるもので、底部はすべて回転糸切り無調整である。これらについて、土器の器形により次のように分類することができる。

A 底部から内湾ぎみに立ち上がり、体部は外傾してそのまま口縁部にいたるもの(20,21,65)

B 底部から内湾ぎみに立ち上がり、体部は外傾して口縁部が軽く外反するもの(18,50,54)

<甕> すべて破片である。外面に叩き目痕が残るもの(15,37,38,57,64,73)、内面に当て工具痕が残るもの(15,37,38)、指あて痕が残るもの(57,64)がある。

<壺> 小型の壺の口縁部破片と同一個体と見られる胴部下半から底部にかけての破片が出土している。底

部片は回転糸切無調整である。

② 出土土器の組み合わせ

分類した出土土器をまとめたものが第5表である。

遺構名	土 師 器						須 恵 器		
	坏		甕		鉢	手捏ね	坏	甕	壺
	I	II	I	II					
1・3号住居	1	1	9		2			1	1
2号住居	5		7	4			2	4	
4号住居						1	2		1
5号住居		2		1				1	
6号住居			2				1		

第5表 各遺構出土土器一覧表

(1・3号住居)

精査の途中で重複関係を確認したので、出土したほとんどの遺物はどの住居に所属するのかが明確には言えない。唯一3号住居跡煙出しから土師器甕Ⅰ類の胴部破片が出土した。出土土器は土師器坏Ⅰ・Ⅱ類、土師器甕Ⅰ類、ロクロ使用の小型の鉢、須恵器甕胴部破片、須恵器壺の底部とみられる破片である。掲載できなかったものには土師器甕Ⅰ類の破片が多い。

(2号住居)

出土土器は土師器坏Ⅰ類、土師器甕Ⅰ・Ⅱ類、須恵器坏、須恵器甕の破片である。掲載できなかったものでは、土師器坏の破片が多く、中でも内黒のものが目立つ。坏の器形は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものが多く、須恵器にのみ口縁で軽く外反するもの(B)がある。土師器坏Ⅰ類は回転糸切後に底部周辺に手持ちヘラケズリを施したことが多い。

(4号住居跡)

出土土器は須恵器坏と壺、土師器手捏ね土器である。カマドを含めた3/4は調査区外に延びるため全体像は把握できないが、掘り方や規模が2号住居跡と類似している。

(5号住居跡)

出土土器は土師器坏Ⅱ類、土師器甕Ⅱ類、須恵器甕の破片である。内黒の土師器坏Ⅱ類のほぼ完形品が出土したのは本住居跡だけで、かつ土師器坏の中で唯一口縁部が軽く外反する。

(6号住居跡)

出土土器は土師器甕Ⅰ類、須恵器坏である。土師器甕は口縁部が横ナデで体部をヘラケズリし、頸部に段ができています。掲載できなかったものには須恵器甕の破片がある。

以上が各住居跡から出土した土器の特徴である。

② 土器の編年的位置

本遺跡から出土した土師器は、製作に際し坏はすべてロクロ使用、甕はロクロ使用と未使用のものである。高橋(1982)は、北上川中流域の土器群を基に各地の土器の比較検討を行い、県内の古代の土器を四期に大別している。これによると、遺跡によるばらつきを認めながらも、甕・坏が主体でロクロ使用とロクロ未使用の土器が共伴する土器群はⅢ-1群(9世紀前半)とされた。「土師器は僅かにロクロ未使用のものを含み、坏の切り離しは回転糸切り後回転あるいは手持ちヘラケズリ調整をしたものが多く、内面に黒色処理を施す。甕は体部上半がロクロ調整、下半がヘラケズリ調整され、小形のものはロクロ成形で回転糸切りである。須恵器坏は回転ヘラキリが多く、回転糸切りもある。」中居俵Ⅱ遺跡の土師器坏は回転糸切後底部の一部に再調整を加えたものが多く、また、ほぼ完形の甕は上記の特徴をそなえる。しかしながら、口縁部～体部上半

の破片の中には内外面にハケメを多用しており、なかには頸部に段を持つものも見られる。これはⅡ-2群(8世紀後半)の甕の特徴を持ち、ロクロ使用のものより多い。氏家(1957)は東北地方の土師器を七型式に分類している。この中で頸部に段をもつ甕は第5型式(栗囲式)では多く出土し、第六型式(対馬式)ではなくなるとしている。伊藤(1998)は北上盆地南部の土器を15型式に分類している。これによると、坏は9世紀中葉頃(回転糸切後削り調整例有り)、甕は8世紀末(口縁:横ナデ 体部:外面はハケメ ケズリ ナテ 内面は横位ハケメ主)の特徴をしめす。以上の時期区分により本遺跡出土土器の時期を考えると、土師器坏と甕の特徴だけでは時期区分は難しい。しかしながら、岩崎台地遺跡群では国分寺式(8世紀)の甕が9世紀後半まで持続して使用されており(西野1998)、和我地区では9世紀後半の土器組成の中に8世紀の特徴を持った土師器甕が共伴することがありうる。以上の一般的傾向をおさえながら、北上市内の遺跡出土土器と比較する。

牡丹畑遺跡SI007住居、藤沢遺跡SI004住居では、ロクロ不使用で内黒の土師器坏、ロクロ不使用の甕が出土している。甕は口縁部横ナデ、体部ハケメ・ミガキ・ケズリ調整が施されている。牡丹畑遺跡のSI010住居ではロクロ不使用の土師器坏とⅠ類の坏、甕Ⅰ類とⅡ類で体部にケズリ調整のあるものないもの、回転糸切無調整須恵器坏、須恵器壺、甕の破片が、八幡遺跡SI004、SI010では土師器坏Ⅰ類、甕Ⅰ類、回転糸切無調整赤焼き土器坏、回転糸切無調整須恵器坏などが出土している。SI004ではさらに土師器坏Ⅰ類と甕Ⅰ類も出土している。時期は出土土器の組み合わせと住居の構造から、牡丹畑遺跡SI007・藤沢遺跡SI004住居は8世紀後半、牡丹畑遺跡SI010住居は9世紀代、八幡遺跡SI004・SI010は9世紀末～10世紀に営まれていたと考えられている。これらの例から主に土師器坏と甕を考えると、坏・甕ともにロクロ不使用の組成で8世紀後半に、ロクロ未使用・使用の坏とロクロ未使用・使用甕の組成で9世紀代に、ロクロ使用で調整無の坏とロクロ使用甕または未使用甕の組成で9世紀末～10世紀とみることもできる。

したがって、伊藤の分類および他遺跡との比較から中居俵Ⅱ遺跡の1・3号住居および2号住居の営まれた時期を9世紀後半と位置付ける。

次に八幡遺跡・牡丹畑遺跡・金成Ⅰ遺跡の住居跡に出土した土師器坏で計測のされているもの28点について口径-底径比を調べてみる。坏Ⅰ類の口径-底径比は0.38～0.54・単純平均0.46、Ⅱ類は0.37～0.45・単純平均0.41で、前者のばらつきが大きい。中居俵Ⅱ遺跡ではⅠ類が0.36～0.54、Ⅱ類が0.45～0.46と同様の傾向をしめすが、点数が少ないので断定はできない。

ここで前述した住居規模構成、カマド位置、出土遺物から推定される時期を整理し、総合的に本遺跡の集落が営まれた時期を推定する。①住居規模分布によると、規模構成がまだ大型傾向にあること、②カマド位置は北壁中央であることと、③出土遺物は8世紀的な特徴をしめす土師器甕に、回転糸切調整有の坏が多い傾向にあることなどを考えると9世紀後半の中でも古いほうに位置付けられる。

西野(1998)は、北上盆地北部三郡(和我・稗縫・斯波)の住居構成について、律令国家と在地勢力の関係から、基本的に大型住居を核とした中型・小型住居10軒前後の集落(7～8世紀)、小型化・均一化(9世紀初頭)、3～4軒単位小集落の増加(9世紀後半～10世紀前半)の変遷を考えているが、律令国家と協力的な関係にあった和我については、律令国家の支配前からの集落形態が持続されたと考えている。中居俵Ⅱ遺跡の住居構造・集落形態と出土遺物の時期的不釣合いは西野の考えに従っているようにみえる。

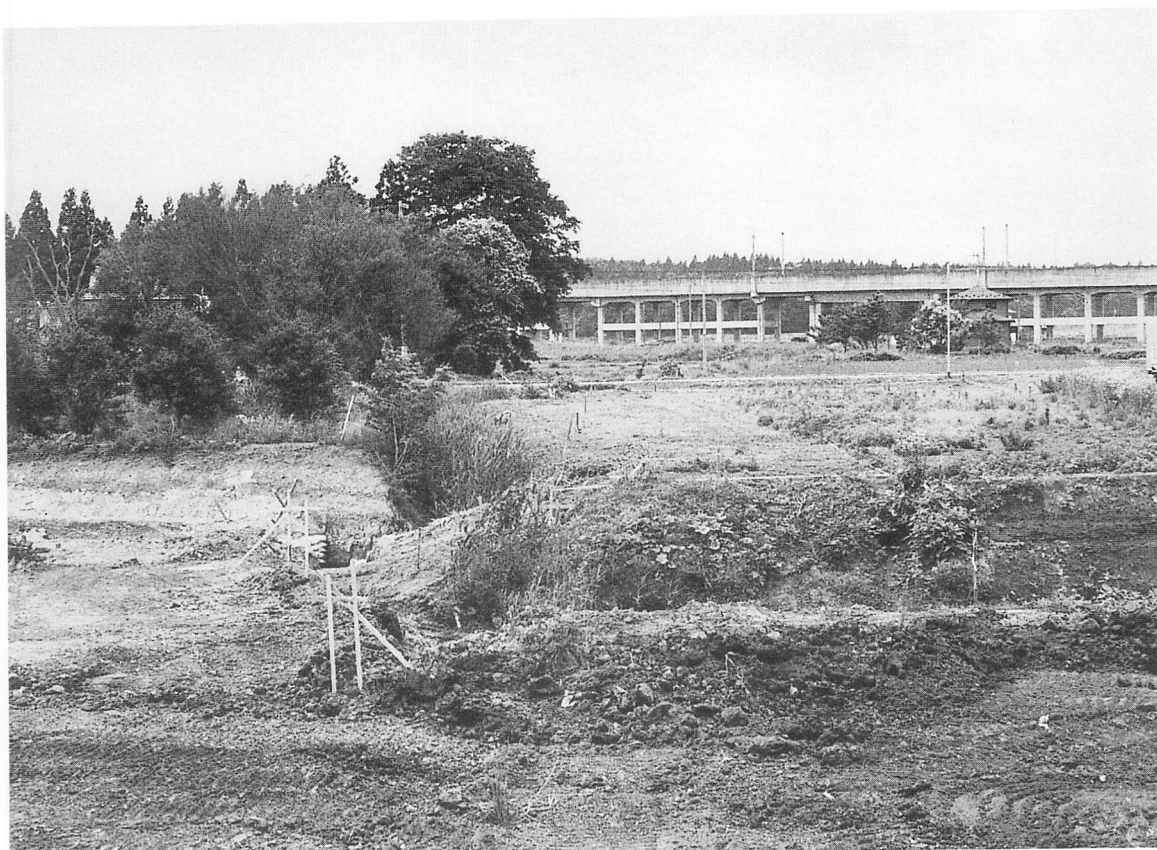
Ⅶ まとめ

1. 中居俵Ⅱ遺跡は岩手県中央部の北上市二子地区に所在する。遺跡は低位段丘の煤孫段丘上に立地し、現北上川より約800m西側に位置する。昭和初期頃は果樹園や畑として、最近では水田として利用されていた。
2. 調査の結果、縄文時代の土器片と平安時代の遺構・遺物が検出された。主体は平安時代である。縄文時代は前期初頭から後晩期にかけての土器小破片が少量出ている。平安時代の遺構は竪穴住居跡6棟、土坑1基であり、竪穴状遺構1棟、掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、柱穴群の時代は特定できなかった。
3. すべての竪穴住居跡は一部が調査区外に延びるため全体像は不明である。検出できたカマドはすべて北壁中央部に位置し、2号住居跡は柱穴が方形に並ぶ。面積は1号住居が54.5㎡、2号住居が33.1㎡、4号住居が31.4㎡、3号住居跡が28.1㎡、5号・6号住居が4.8・4.4㎡と、大型・中小型・特小型である。
4. 平安時代の出土遺物の中で土師器坏・甕はそれぞれ2つに分類された。坏はすべてロクロ使用で、再調整の有るものをⅠ類、無いものをⅡ類に、甕はロクロ不使用のものをⅠ類、使用のものをⅡ類にした。須恵器は坏・甕・壺が出土した。坏は回転糸切無調整、甕は叩き目のある胴部片、壺は小型の破片で回転糸切無調整である。
5. 住居形態からは9世紀以前も想定できるが、出土遺物から9世紀後半の年代が考えられた。

(参考文献)

- | | | |
|---------------------------|-------------------|--------------------|
| 江釣子村教育委員会(1981) | 「高橋遺跡」 | |
| 北上市埋蔵文化財センター(1993・1994) | 「北上遺跡群 本宿羽場遺跡」 | 文化財調査報告書第19集 |
| 北上市教育委員会(1988) | 「藤沢遺跡」 | 文化財調査報告書第54集 |
| 北上市教育委員会(1977) | 「尻引遺跡」 | 文化財調査報告書第17集 |
| 江釣子村教育委員会(1984) | 「江釣子遺跡群 八幡遺跡」 | |
| 北上市埋蔵文化財センター(1992・1993) | 「金成Ⅰ遺跡」 | 文化財調査報告書第17集 |
| 北上市埋蔵文化財センター(1991) | 「森下遺跡」 | 文化財調査報告書第4集 |
| 北上市教育委員会(1988) | 「牡丹畑遺跡」 | 文化財調査報告書第55集 |
| 高橋信雄(1982) | 「岩手の土器」 | 岩手県立博物館研究紀要 |
| 氏家 和典 (1957) | 「東北土師器の形式分類とその編年」 | 『歴史』第14号東北史学会 |
| 伊藤 博幸 (1998) | 「北上盆地南部の様相」 | 第24回古代城柵官衛遺跡検討会資料集 |
| 西野 修 (1998) | 「北上盆地北部の様相」 | 第24回古代城柵官衛遺跡検討会資料集 |
| 北上市埋蔵文化財センター (1998) | 「唐戸崎遺跡」 | 文化財調査報告書第35集 |
| 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1991) | 「上川岸遺跡」 | 文化財調査報告書第153集 |
| 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1993) | 「館Ⅳ遺跡」 | 文化財調査報告書第187集 |
| 中川 久夫他(1963a,b) | 「北上川沿岸の第四系および地史」 | 地質学雑誌69巻 |
| 金原 光男(1981) | 北上低地帯の応用地質学的研究 | 岩手大学工学部修士論文 |
| 大上和良・吉田 充(1984) | 胆沢扇状地の火山灰層序 | 岩手大学工学部研究報告37巻 |
| 岩手県教育委員会(1979) | 「野田Ⅱ遺跡」 | 文化財調査報告書第34集 |
| 岩手県教育委員会(1979) | 「堀ノ内遺跡」 | 文化財調査報告書第34集 |

写真図版

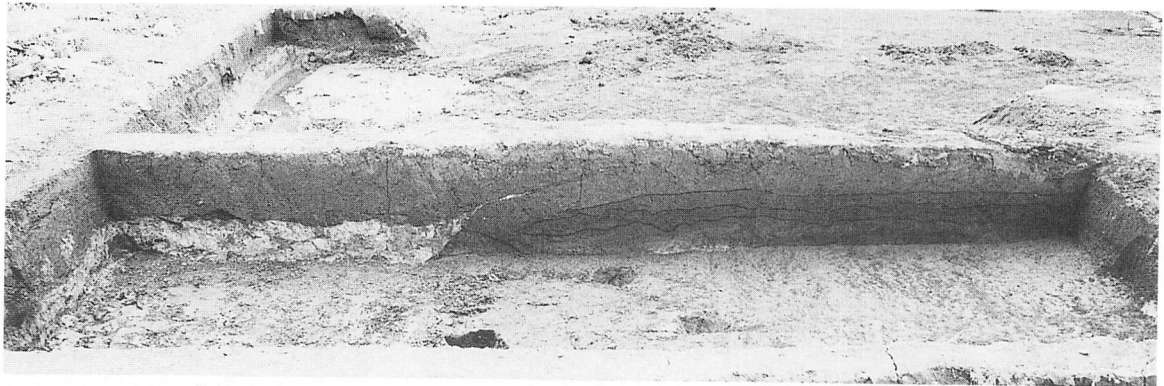


↑ 調査前（東から）

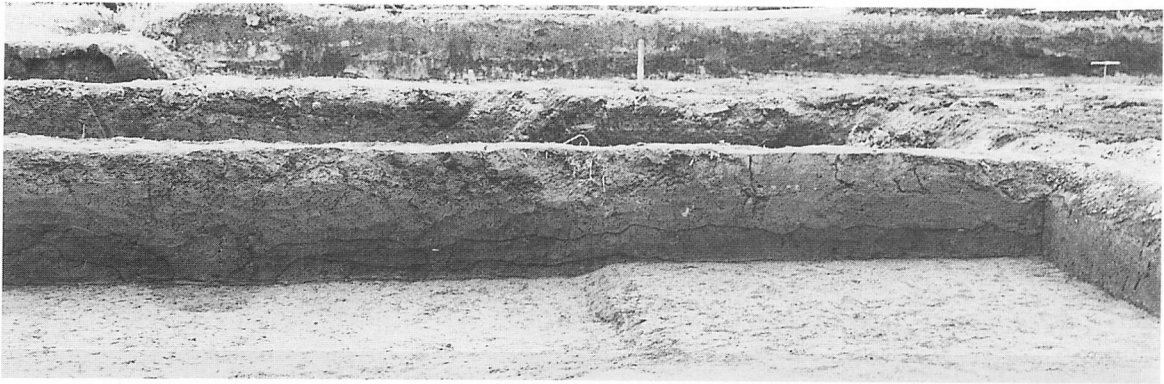
調査後（上が南）↓



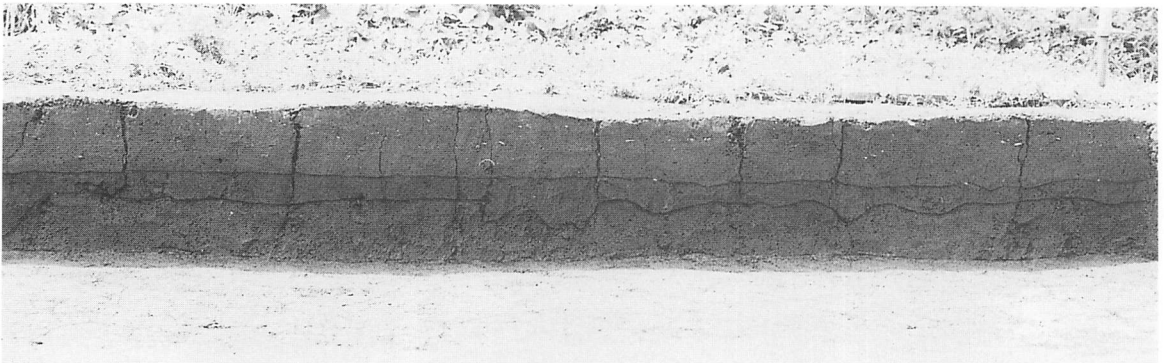
写真図版 1 調査区全景



f 4 · g 4 区 (東から)



f 6 · g 6 区 (東から)



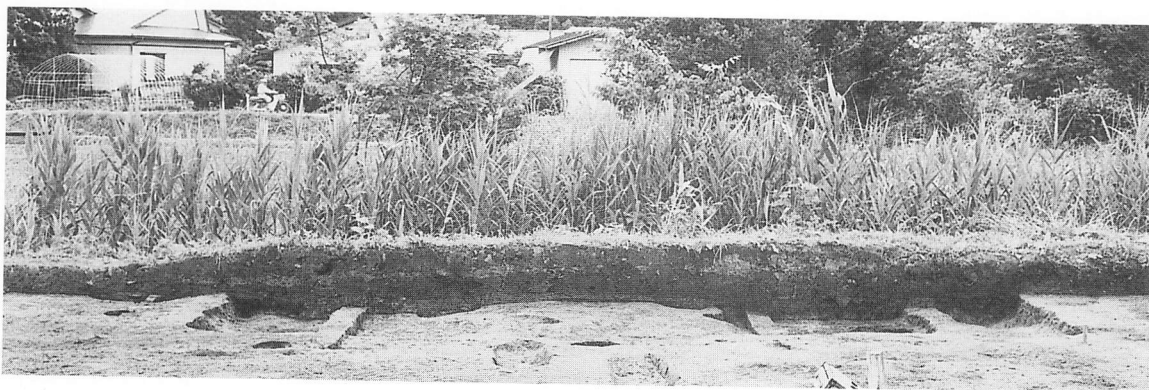
f 10 区 (北から)



c 1 ~ f 2 区 (東から)



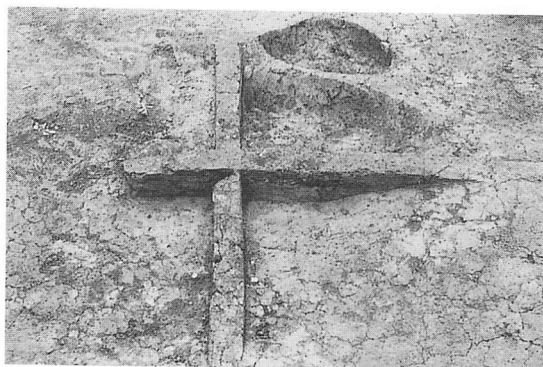
全 景 (上が南)



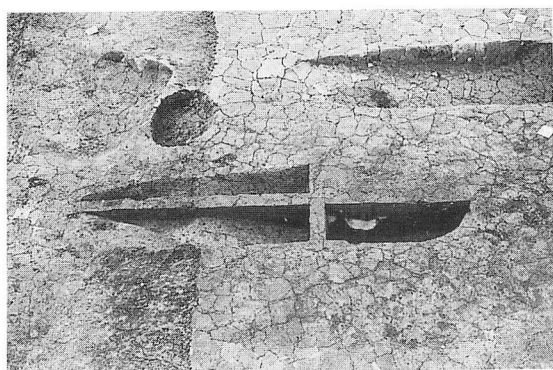
埋 土 断 面 (北から)



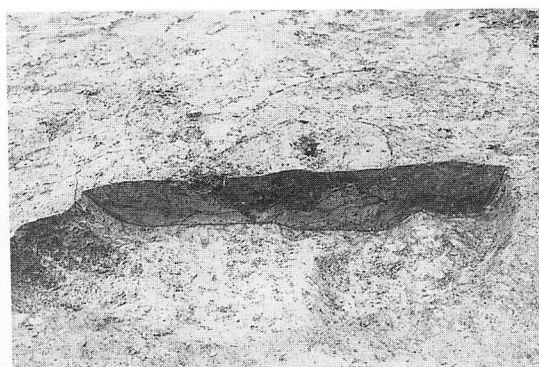
第1号住居跡煙道縦断面 (東から)



第1号住居跡燃烧部断面 (南から)



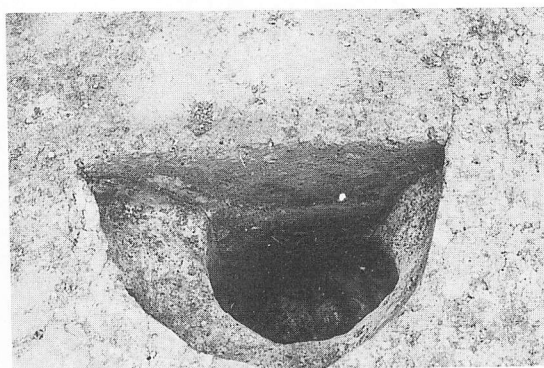
第3号住居跡煙道縦断面（東から）



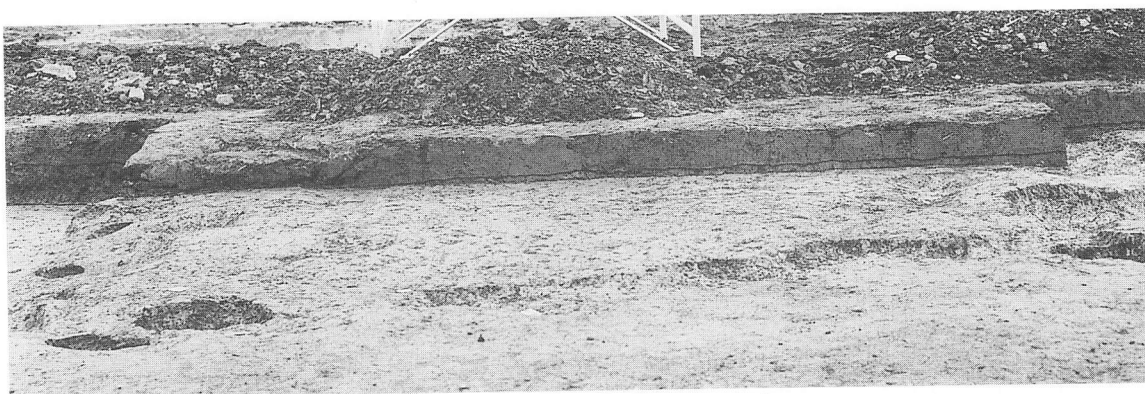
同左燃烧部断面（東から）



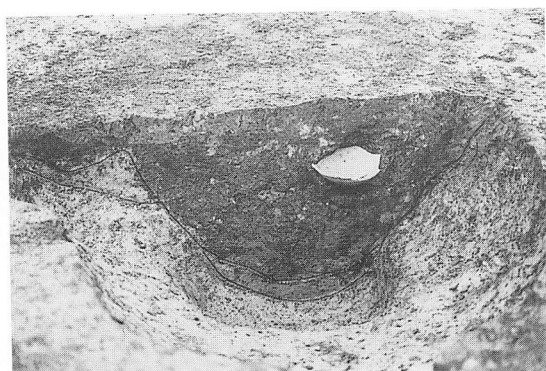
第3号住居跡煙道部完堀（南から）



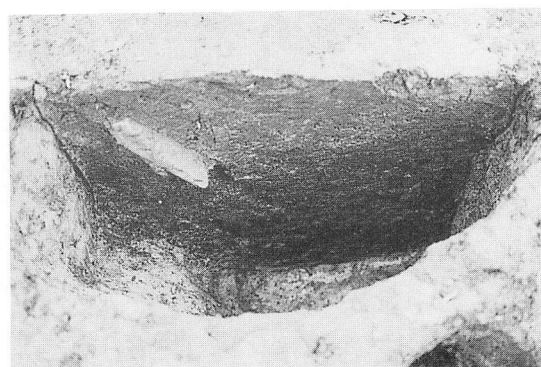
第1号住居跡P2土坑断面（南から）



第4号住居跡埋土断面（南から）



第4号住居跡P1土坑断面（西から）

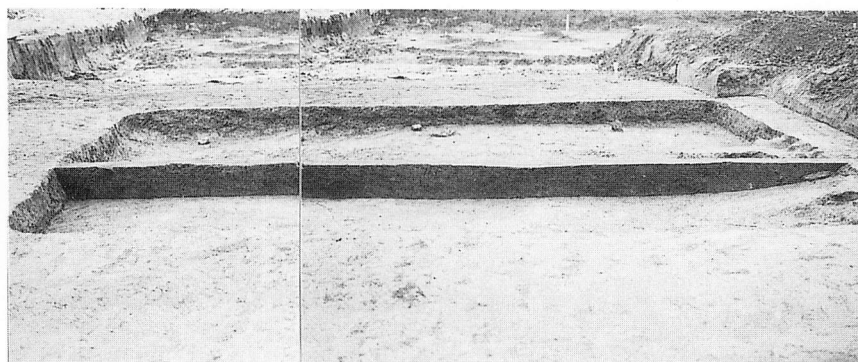


P3土坑断面（東から）

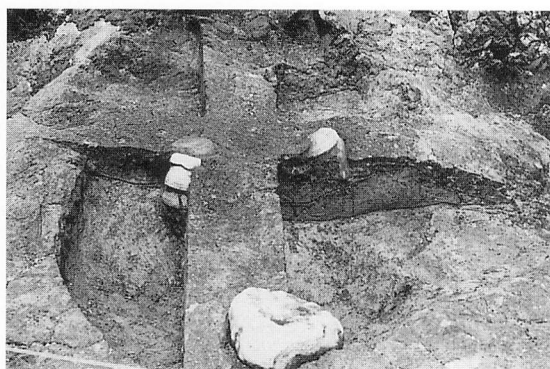
写真図版4 第1・3号竪穴住居跡(2)、第4号竪穴住居跡



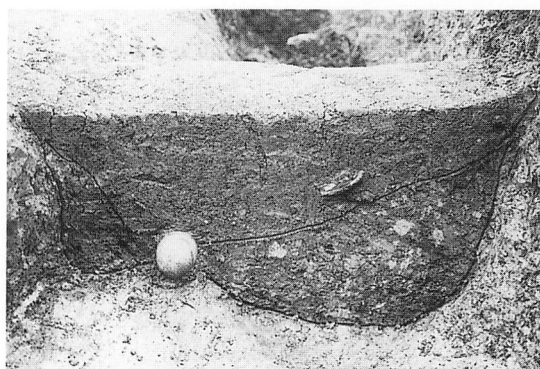
全 景（上が北）



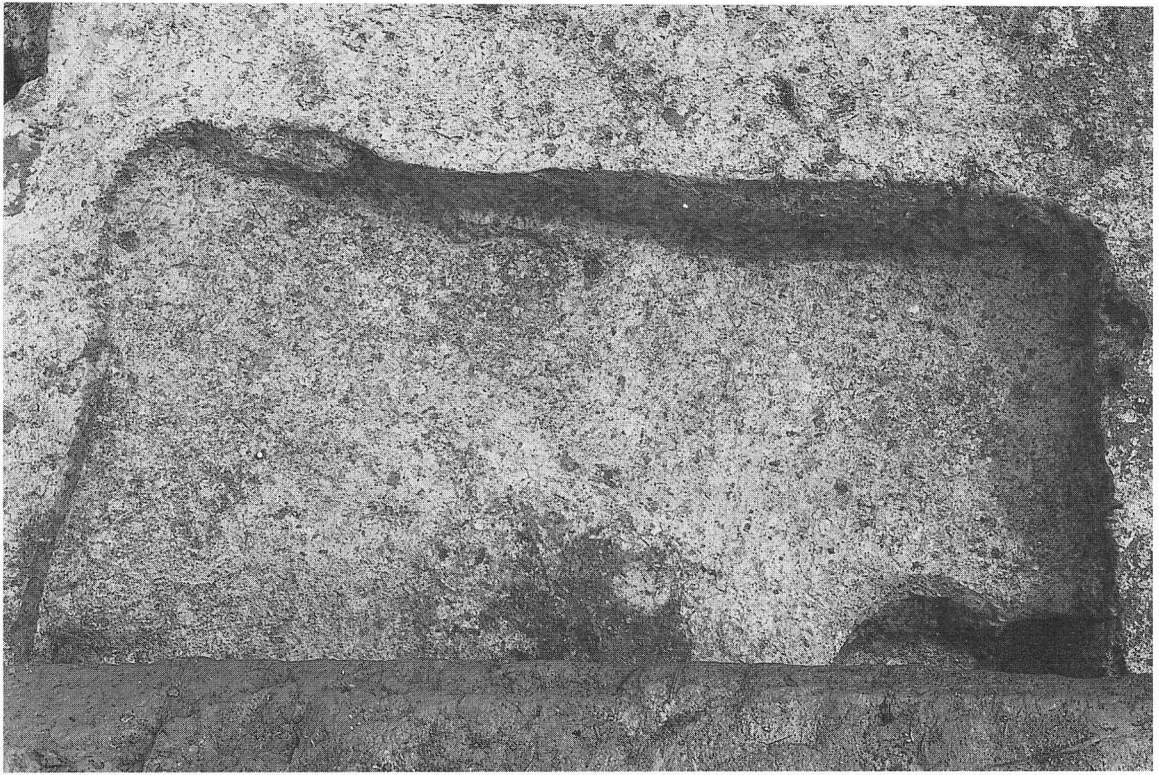
埋 土 断 面（東から）



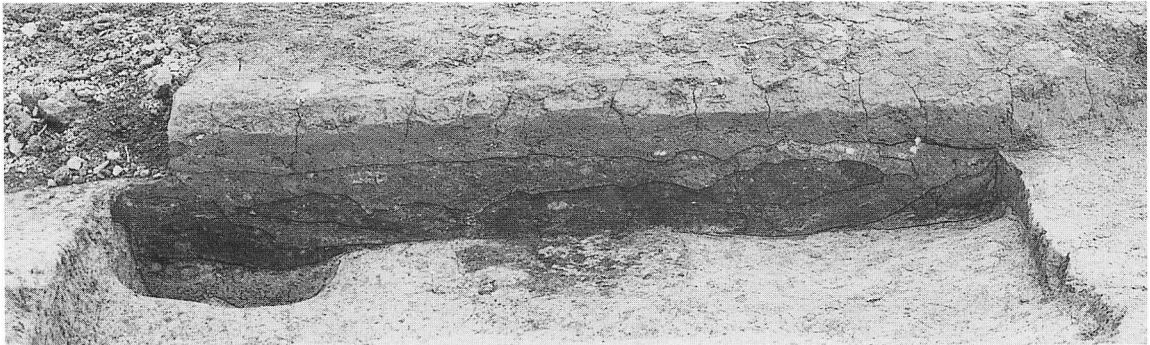
カマド燃烧部断面（南から）



南壁堀方断面（西から）



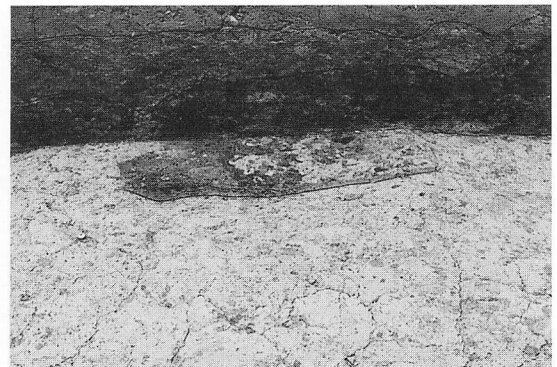
全 景（上が南）



埋 土 断 面（南から）



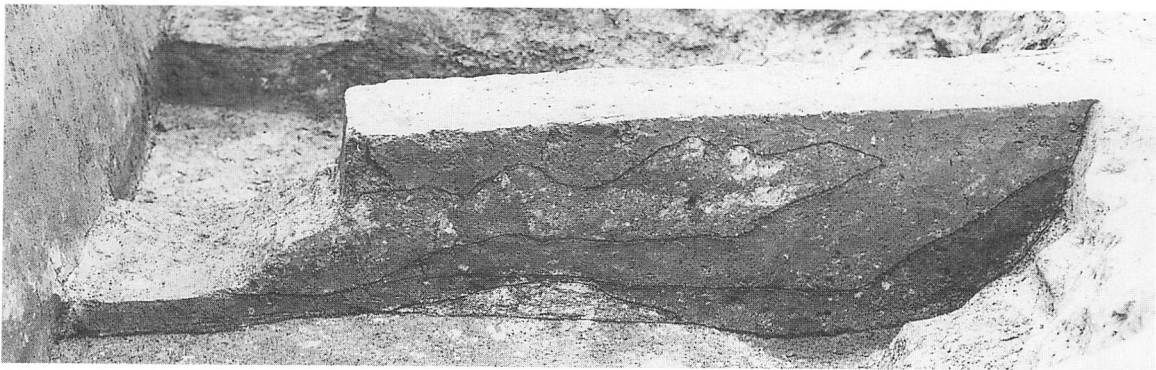
← 遺物出土状況



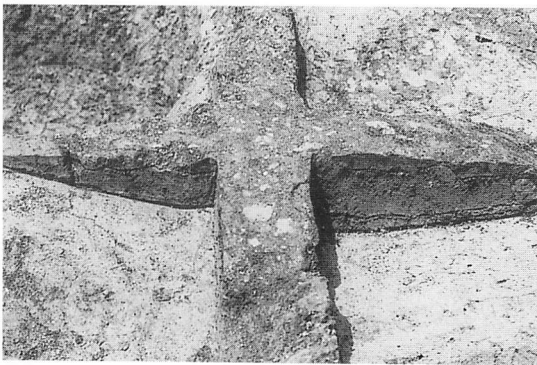
地床炉断面（南から）



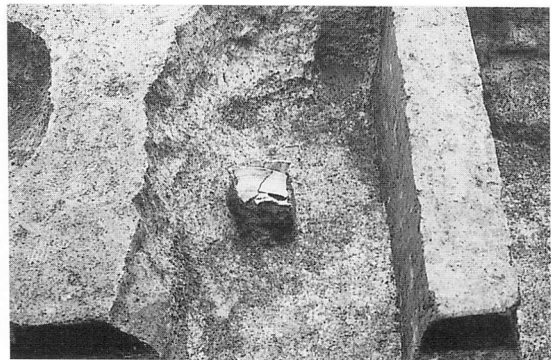
全 景 (上が西)



埋 土 断 面 (北から)



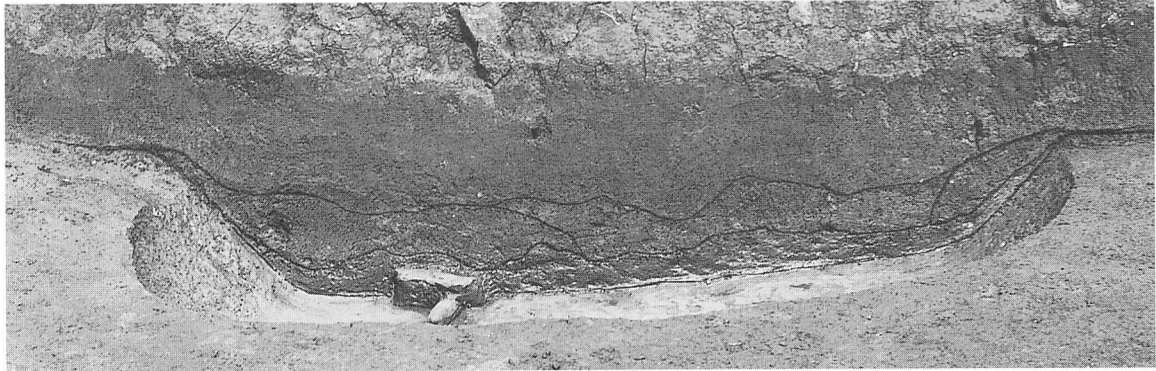
地床炉断面 (南から)



土器出土状況 (東から)



全 景 (東から)

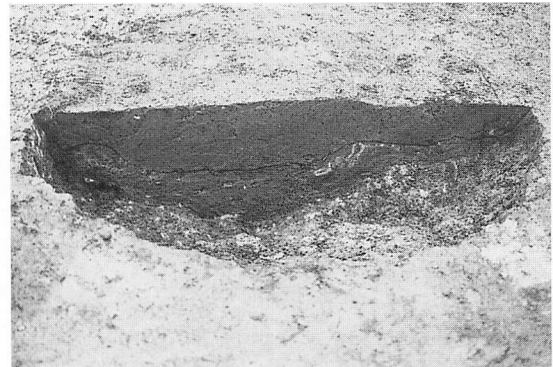


埋 土 断 面 (西から)

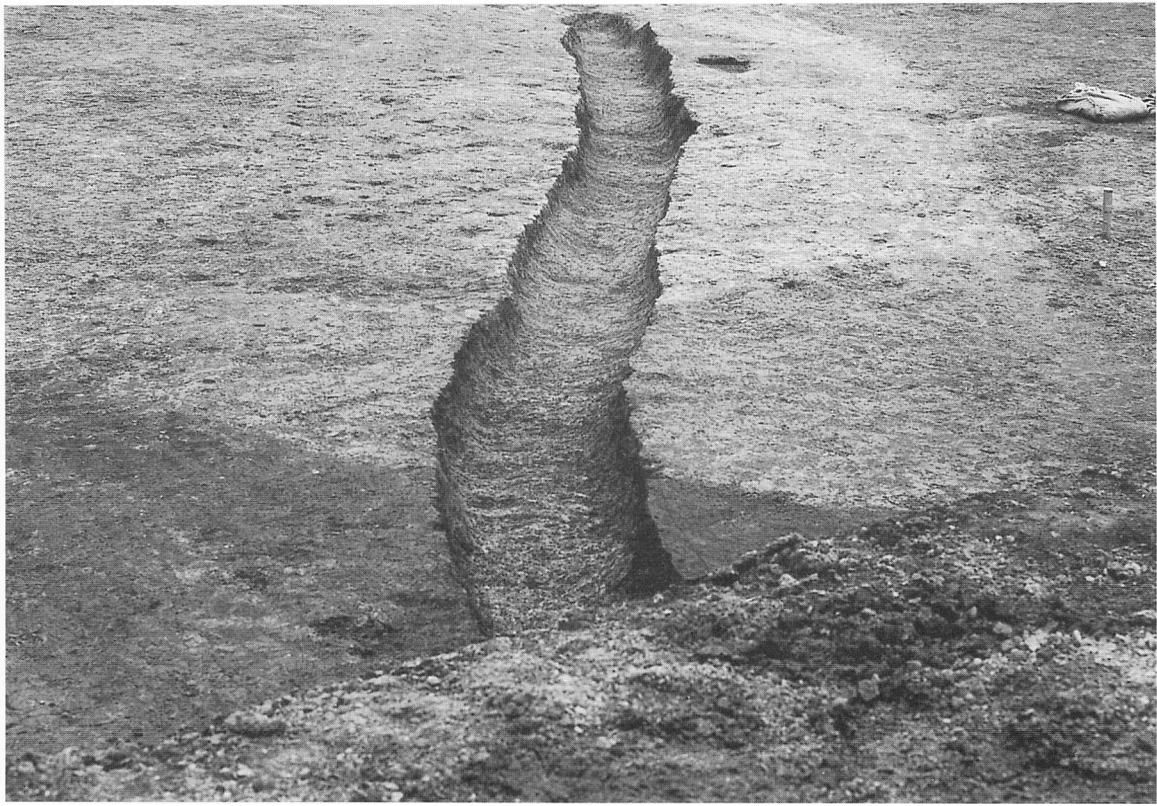


第 1 号 土 坑

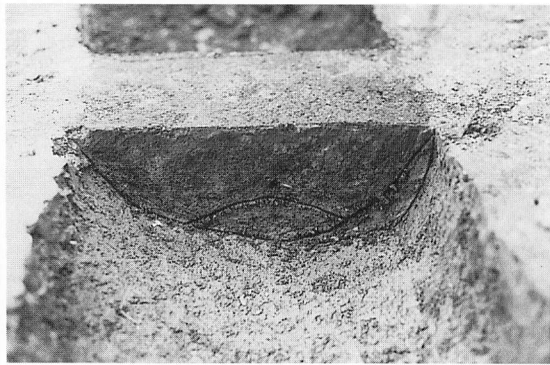
平 面



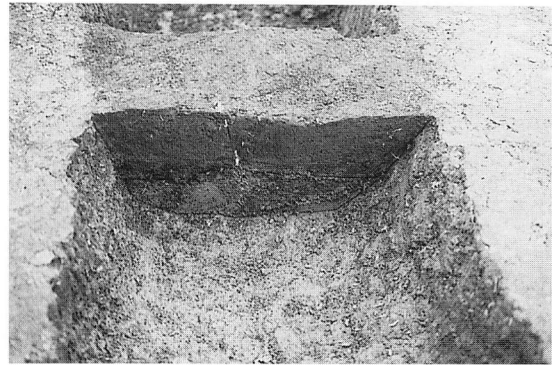
断 面



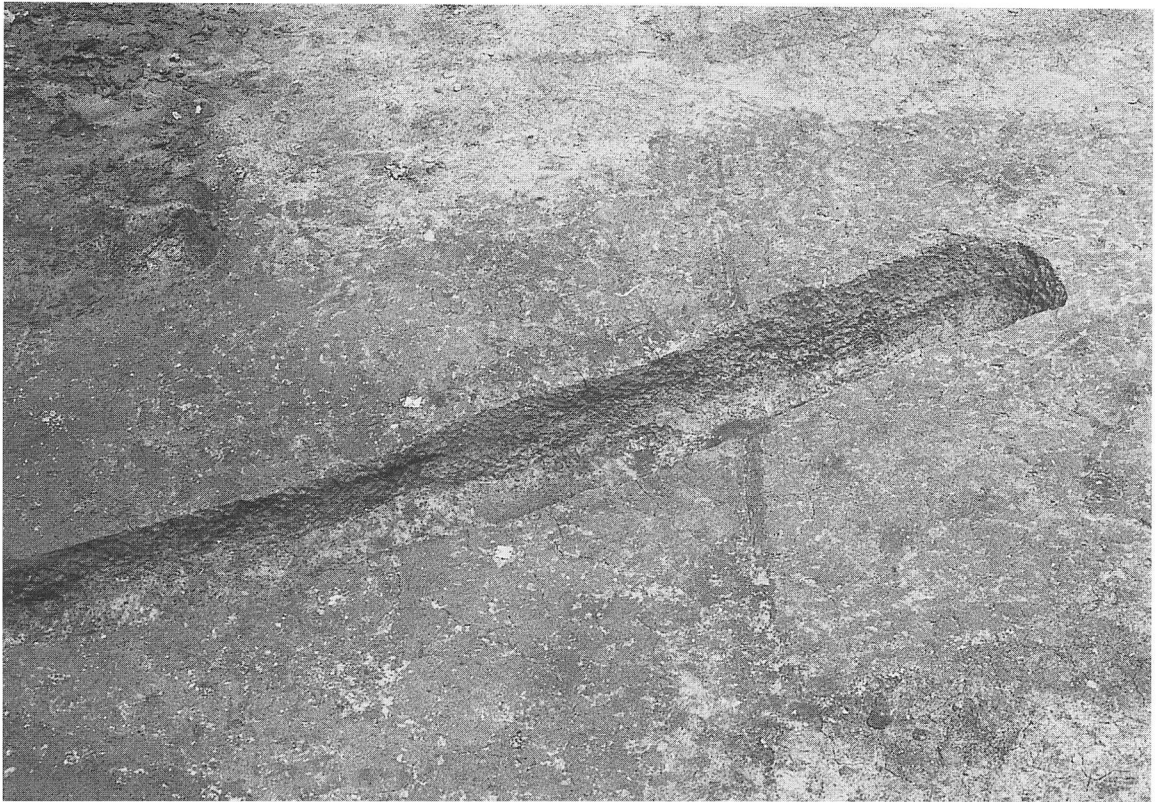
全 景 (南から)



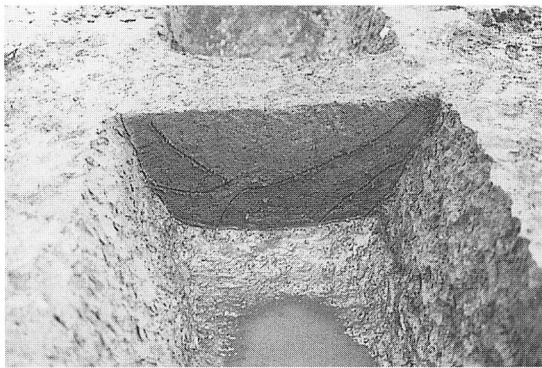
埋 土 断 面 (AA')



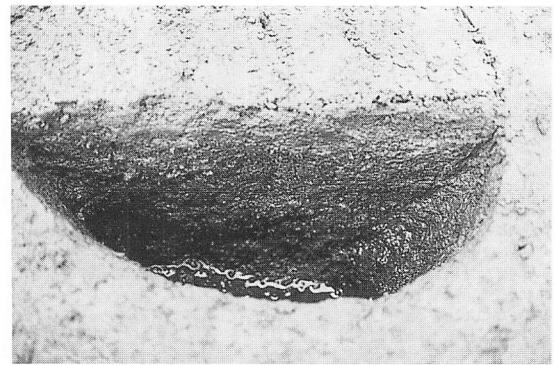
埋 土 断 面 (BB')



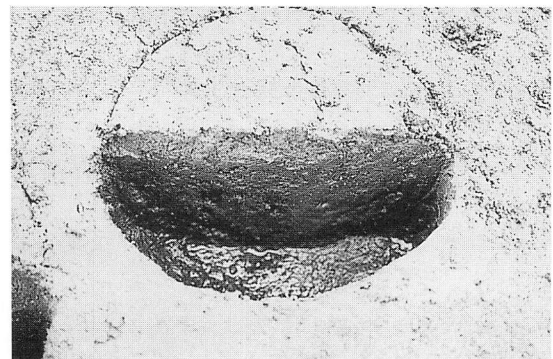
全 景 (南から)



埋 土 断 面 (東から)



柱穴群埋土断面 (P 2)



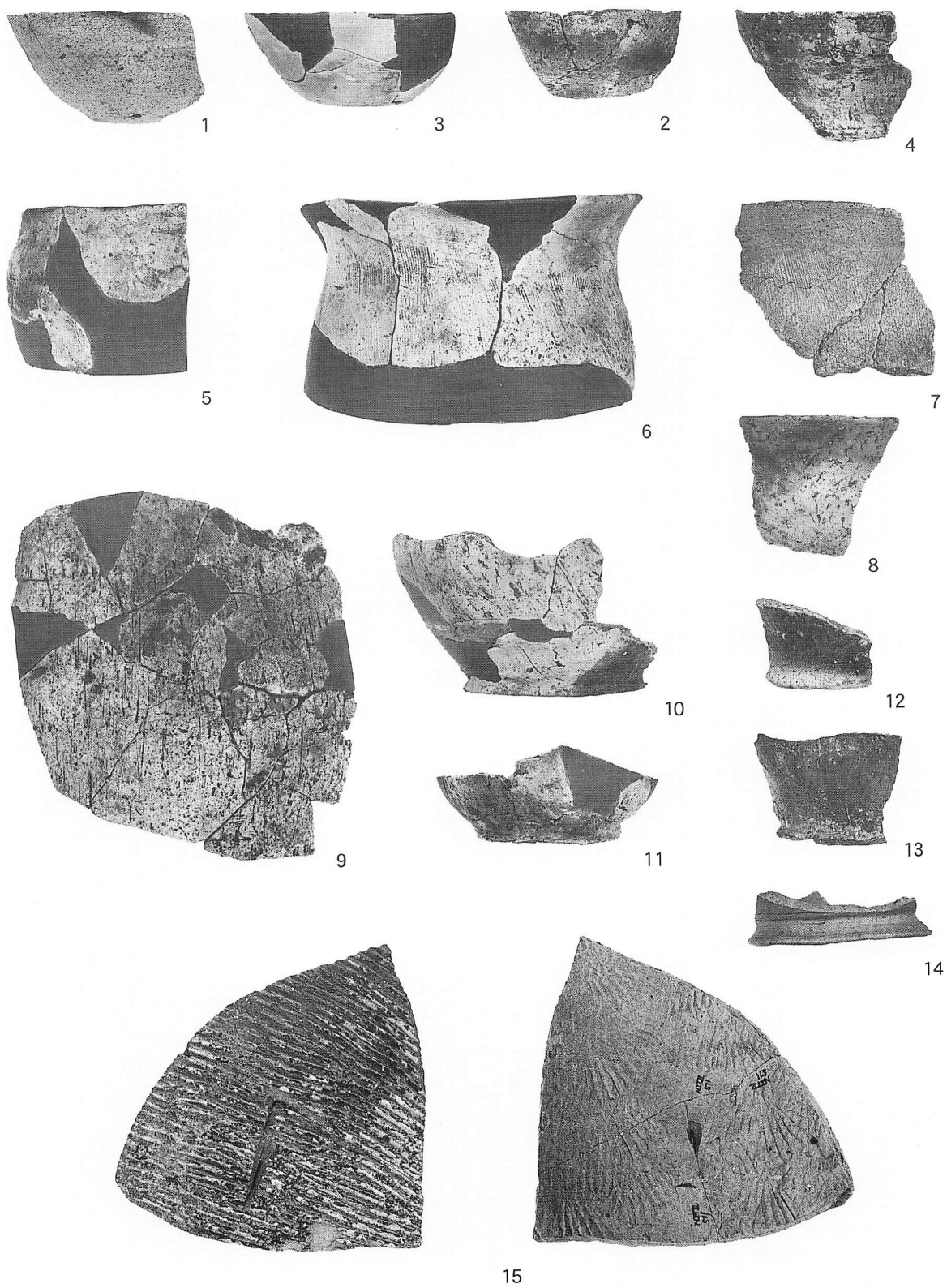
柱穴群埋土断面 (P 67)



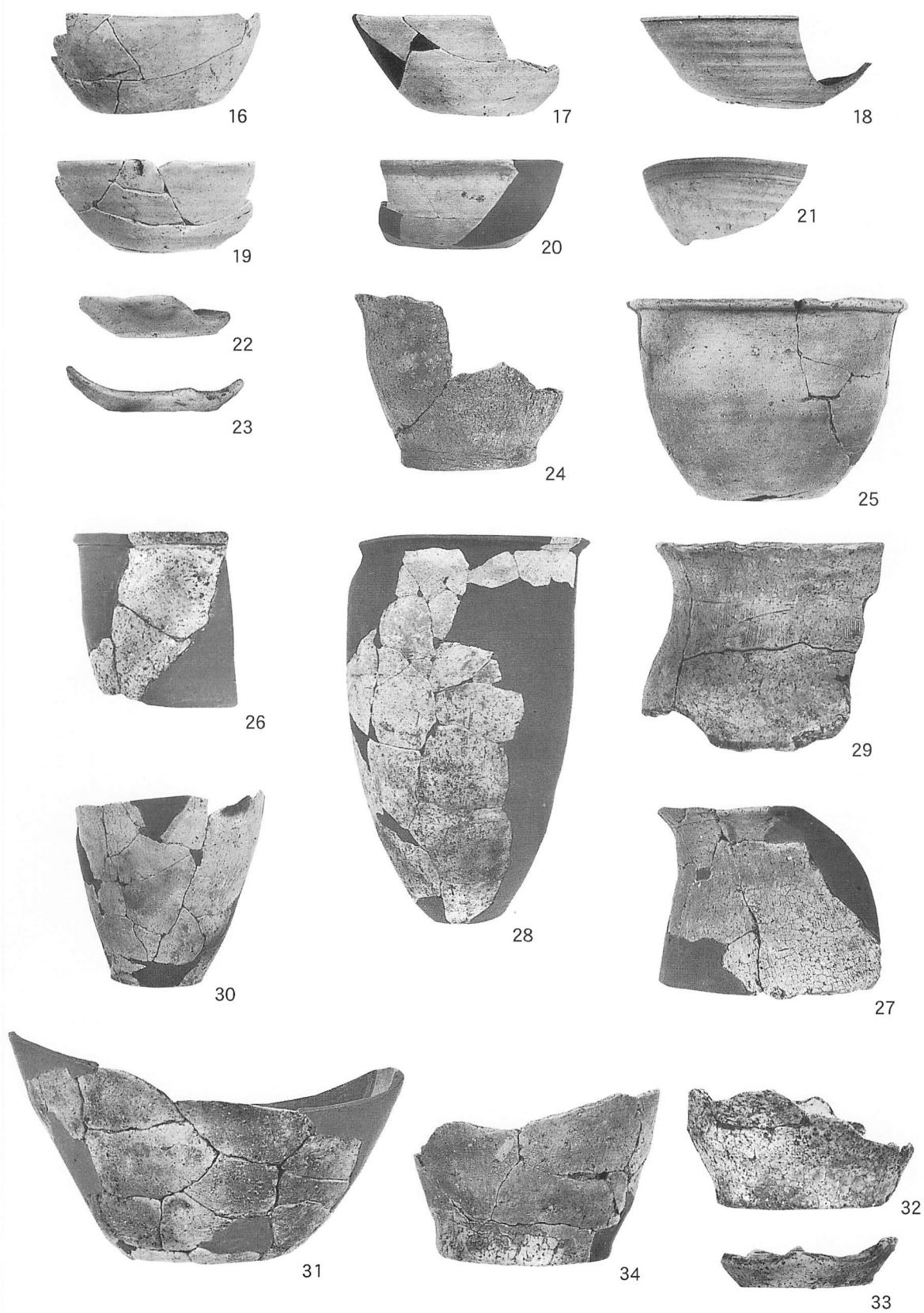
第1号堀立柱建物跡（北東から）



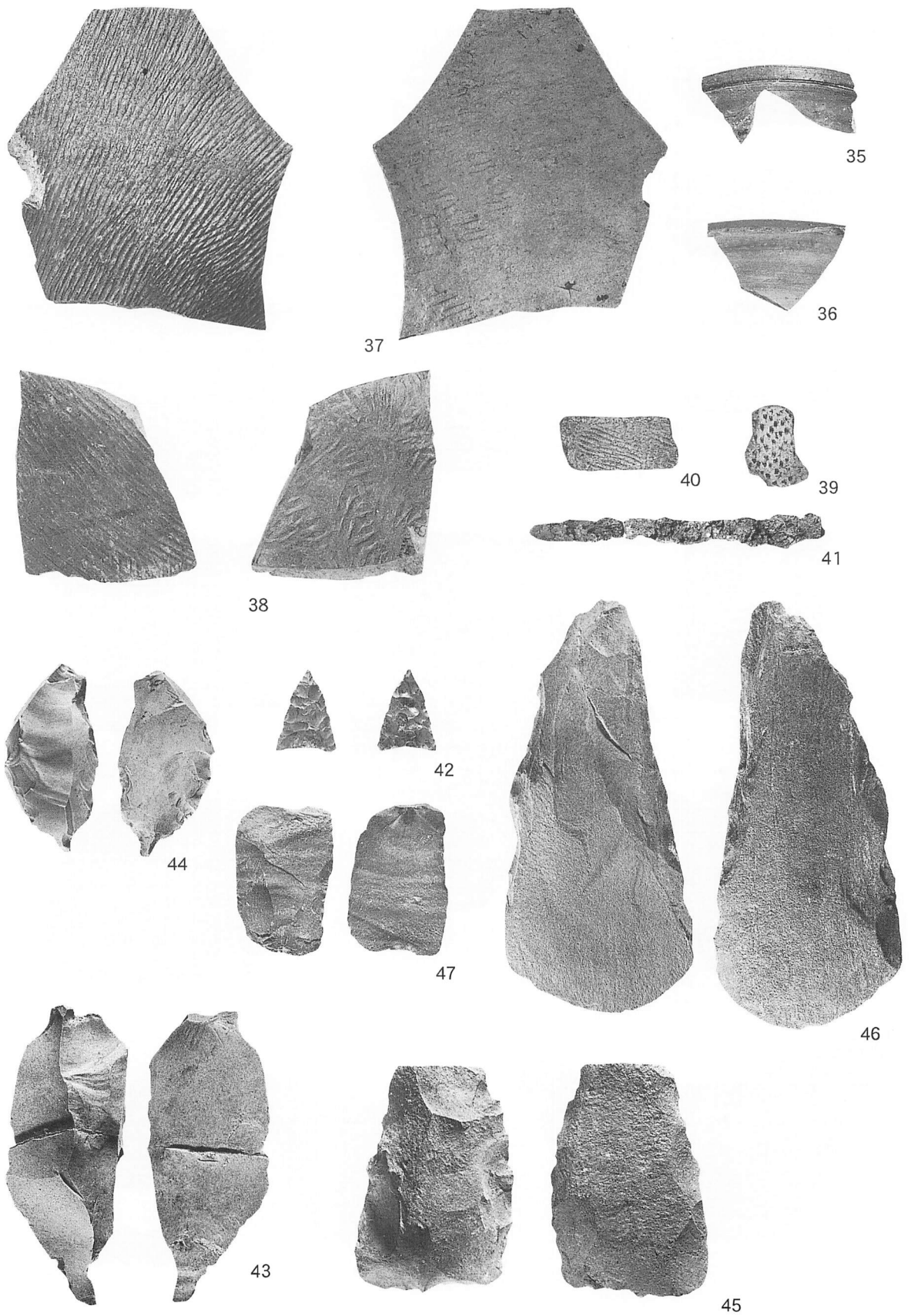
柱 穴 群（西から）



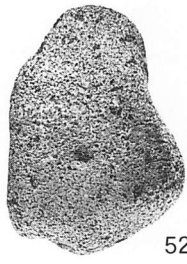
写真図版12 第1・3号竪穴住居跡出土遺物



写真图版13 第2号竖穴住居跡出土遺物(1)



写真図版14 第2号豎穴住居跡出土遺物(2)



52



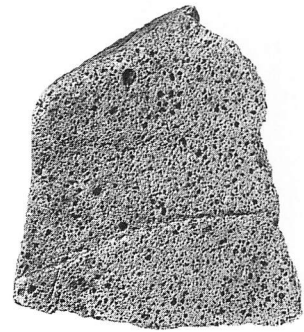
49



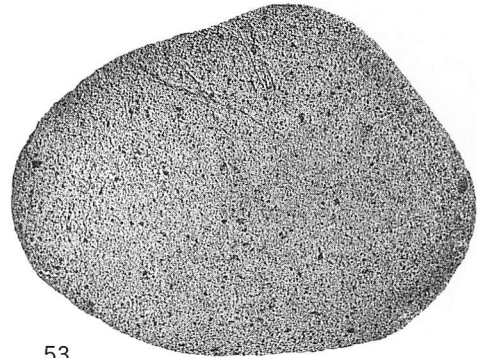
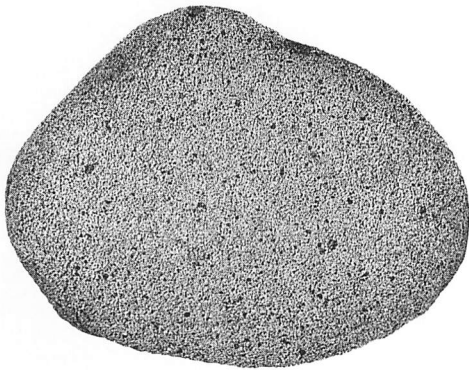
48



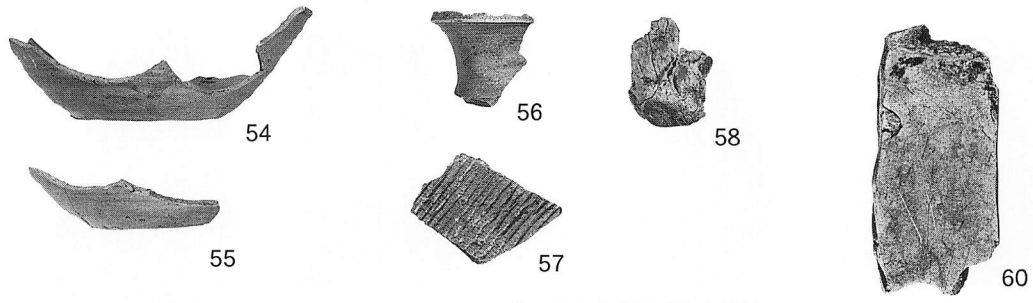
50



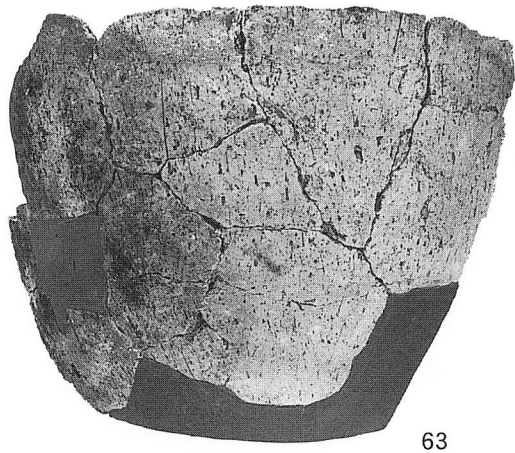
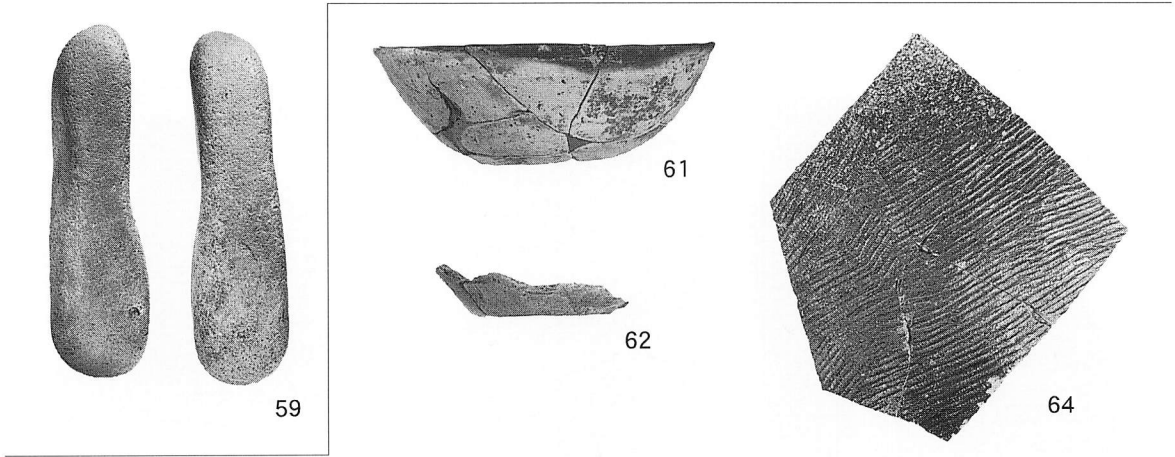
51



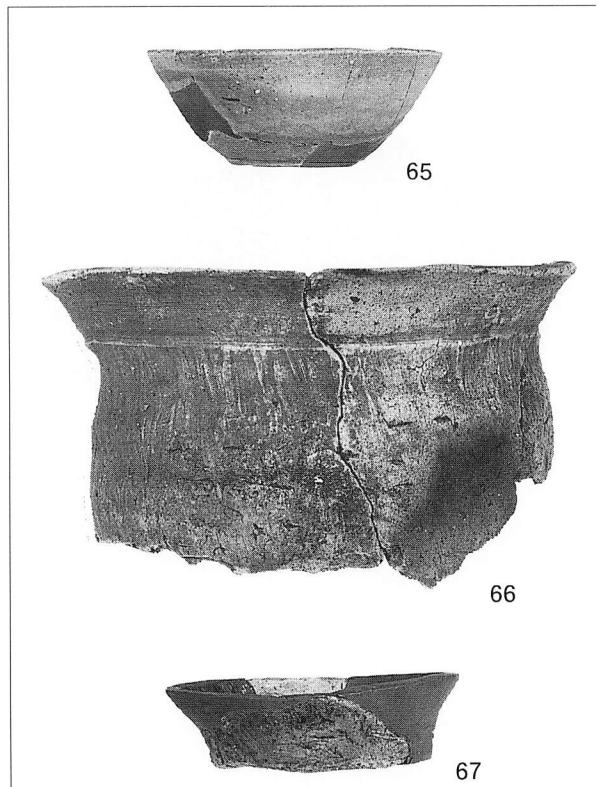
53



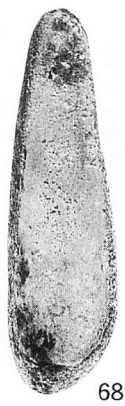
第4号竖穴住居跡出土遺物



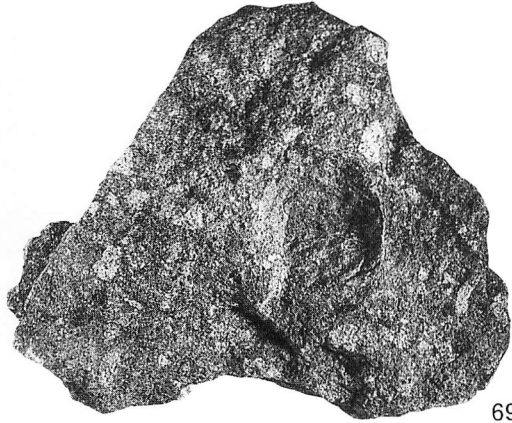
第5号竖穴住居跡出土遺物



第6号竖穴住居跡出土遺物

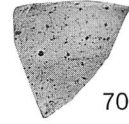


68

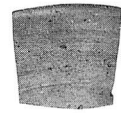


69

第1号竖穴状遺構出土遺物



70

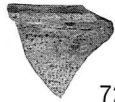


71

第1号土坑出土遺物

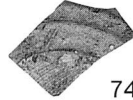


73



72

第1号溝跡出土遺物



74



75

柱穴群出土遺物



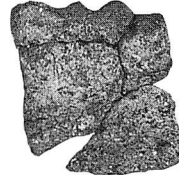
77



85



76



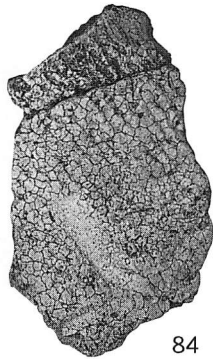
78



83



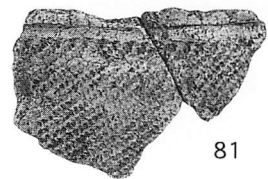
82



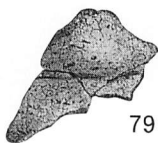
84



80



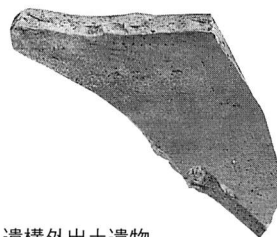
81



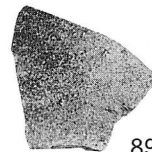
79



86



87

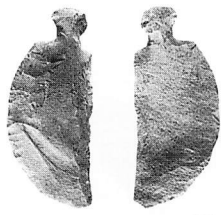


89

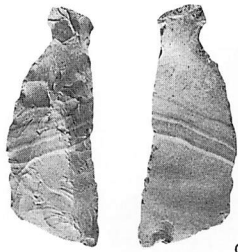


88

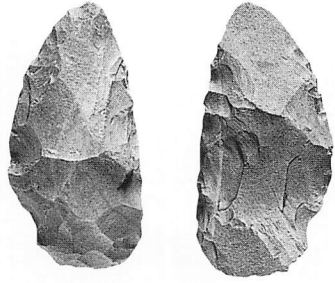
遺構外出土遺物



90



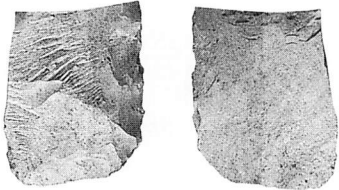
91



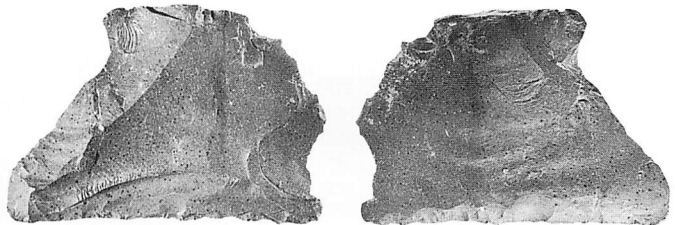
93



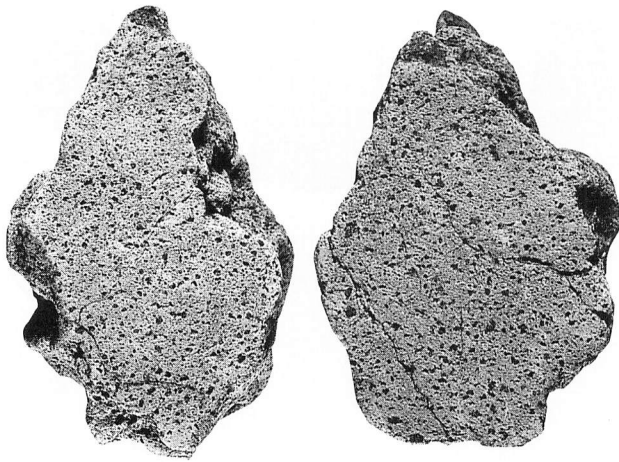
92



94



95



98



97



96

写真図版18 遺構外出土遺物（石器）

報告書抄録

ふりがな	なかいたわらにいせきはくつちょうさほうこくしょ								
書名	中居俵Ⅱ遺跡発掘調査報告書								
副書名	二子地区ほ場整備関連発掘調査								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第362集								
編著者名	吉田 充								
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001・9002								
発行年月日	西暦2000年6月30日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
なかいたわらにいせき 中居俵Ⅱ遺跡	きたかみしふたごまち 北上市二子町 なかいたわらちない 中居俵地内	3206	ME56-2249	39° 18′	141 ° 8′ 45″	1999/06/22~ 1999/07/28~	800m ²	ほ場整備 に伴う緊急発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項		
中居俵Ⅱ遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 6 棟 竪穴状 1 基 土坑1基 溝跡 2 条 掘立柱建物跡 1 棟 柱穴群		縄文土器				

平成12年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職員】

所 長 伊 藤 民 也 副 所 長 櫻 田 次 男

[管理課]

管 理 課 長 川 浪 清 徳 囑 託 千 葉 芳 夫
 課 長 補 佐 山 崎 善 光 〃 藤 島 恵 子
 主 査 立 花 多 加 志 〃 新 田 トヨ
 主 事 日 影 睦 夫 〃 佐々木 光 重

[調査第一課]

調 査 第 一 課 長 佐々木 勝
 課 長 補 佐 佐々木 清 文
 主任文化財専門調査員 小山内 透

文化財専門調査員

〃 赤 石 登
 〃 吉 田 充
 〃 小 原 眞 一
 〃 小 笠 原 健 一 郎
 〃 金 野 進
 〃 鳥 居 達 人
 〃 金 子 昭 彦
 〃 東 海 林 淳 美
 〃 阿 部 勝 則
 〃 羽 柴 直 人
 〃 小 野 寺 正 之
 〃 菅 原 靖 男
 〃 長 村 克 稔
 〃 溜 池 浩 二 郎
 〃 菊 池 貴 広
 〃 村 上 拓
 〃 本 多 準 一 郎
 〃 北 村 忠 昭
 〃 丸 山 浩 治
 〃 村 木 弘 卓
 期限付専門職員 小 江 藤 原 賢 敦 徳 (6月退職)
 〃 藤 菊 池 上 信 賢 介
 〃 井 川 又 晋
 〃 吉 田 眞 由 美
 〃 北 田 博 義

[調査第二課]

調 査 第 二 課 長 高 橋 與 右 衛 門
 課 長 補 佐 中 川 重 紀
 主任文化財専門調査員 高 橋 義 介
 〃 金 子 知 子
 文化財専門調査員 中 工 藤 道 孝
 〃 古 館 貞 身
 〃 阿 松 部 眞 澄
 〃 尾 藤 芳 幸
 〃 工 前 岩 田 徹
 〃 早 濱 坂 田 稔
 〃 安 高 藤 由 紀 夫
 〃 千 佐 木 葉 正
 〃 半 藤 藤 淳 彦
 〃 杉 澤 武 昭 太 郎
 〃 中 星 村 直 美 之

文化財専門調査員

〃 高 中 高 金 中 工 古 阿 松 工 前 岩 早 濱 安 高 千 佐 半 杉 中 星
 〃 橋 川 橋 子 田 藤 館 部 尾 藤 田 淵 坂 田 藤 木 葉 藤 澤 沢 村
 〃 鈴 吉 北 吉 原 齋 島
 〃 木 川 田 田 藤 原
 〃 聡 徹 勲 和 子 津 子 征

期限付専門職員

〃 鈴 吉 北 吉 原 齋 島
 〃 木 川 田 田 藤 原
 〃 聡 徹 勲 和 子 津 子 征

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第362集

中居俵Ⅱ遺跡発掘調査報告書

二子地区ほ場整備関連遺跡発掘調査

印刷 平成12年10月25日

発行 平成12年10月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019)638-9001・9002

FAX (019)638-8563

印刷 小松茂印刷所

〒020-0025 盛岡市大沢川原2丁目5-37

TEL (019) 623-6073

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000